

自立の旅



米国国務省人物交流計画に基づくもう一つの進路

米国公立高校交換留学

～資料編～

別冊の実施要綱と併せてご覧ください

企画 南日本カルチャーセンター

若 者 へ

既存のレールを走るのも、それはひとつの生き方です
でも、別のレールを走ってみれば、
別の景色が見えるのです

温室の保護の下に、真の自立はありません
既知の価値の中に、若者の夢はありません
未知と混沌の上に、夢と自立は生まれます

さあ、少しの勇気を出して、
自立の旅に出ませんか



目 次

もう一つの進路	2
保護者の皆様へ	3
高校留学の勧め	5
このプログラムの特色	7
高校留学の落とし穴	9
事前学習	10
オリエンテーション	11
オリエンテーションスケジュール	13
出願方法	15
審査・判定とカウンセリング	17
ELTiS	17
留学事前講座	18
受入体制	19
留学期間中のセンターの業務	20
家庭生活	21
学校生活	22
オリエンテーション感想	23
スチューデントレポート	26
参加者へのアンケート	31
Questions and Answers	33
出願書	40
留学生出身校一覧	42
帰国後の進路	42

もう一つの進路

国際化がますます進展し、各国の文化、経済、教育などの情報が日本にいながらにして入手できる時代となってまいりました。今後、「世界」という概念は、はっきりと地球上の大きな「一つの国」として変わっていくでしょうし、また、同じ人間という意識がますます身近な実感となってくるはずです。事実、またそうでなければなりません。

各国の相互理解が叫ばれて久しくなります。確かに相互理解は徐々に各国の人々に浸透し、「世界共存」という理念がはっきりとした指針となりつつあります。しかしながら、島国であり、ほぼ単一民族国家に近い日本の実状から察するに「真実の国際化」となりますと、少々の疑問が残ります。すなわち、それが当然の事として何の抵抗なく、不可欠のものとして一般地域住民に受け入れられているかどうかということです。なぜなら、単一民族であり、国境もなく、そのために異文化との接触が一般社会単位では見られない我が国で、「真の相互理解」の概念が「不可欠のもの」として受け入れられるには、余りにも異民族との接触を持つことのできない環境にあるのではないかと考えるからです。

相互理解にはまず相手のことを「知る」ことが必要であり、「知る」ためには多くの、しかも確実な情報が必要となります。異民族との接触が少ない我が国にとって、他国のものに接することは非常に貴重であることは言うまでもありません。しかも、それが若い時期に、積極的に海外に飛躍して、「自分の眼」で見聞を広めることは、さらに有意義であると確信します。

南日本カルチャーセンターでは、1974年より交流プログラムを実施し、20,000名を超える小学生、中学生、高校生、大学生、社会人をアメリカの一般家庭にホームステイさせてまいりました。帰国後、さらにアメリカの高校、大学に留学している生徒、学生は1,000名を超え、業界のパイオニア的地位を確立しております。この様な現状に対応するために、15歳から18歳の高校生を対象としまして、米国公立高校正規留学のプログラムを企画しております。

このプログラムは、1961年に米国国務省により定められた「青少年の教育文化交流に関する規定」に基づいて実施されるものであり、米国公立高校への交換留学制度です。その目的は、日米両国民の友好と親善を深めると同時に、青少年の国際人の育成を目的としております。

センターでは、米国におけるいくつかのこのプログラム認可公益教育法人と提携して、このプログラムの日本サイドにおける窓口として、主に出発までの事前学習や事務処理のお世話と米国到着までの移動の手配、また、帰国時の到着までの手配を行ないます。さらに留学生の渡米後は、日本の保護者の窓口として米国の公益教育法人と折衝してまいります。

日本の社会に根強く存在する学歴社会を否定するものではありません。日本独特の文化を背景に培われた価値の存在を無視するものでもありません。ただ、「他国家」「価値の多様性」「異文化」「異言語」の存在、そしてそれらのものを担う「異民族」の有様にも眼を向けて欲しいのです。「日本」ととらわれずに、「世界的」「宇宙的」視野の世界に足を運んで欲しいのです。

若い皆さん！世界に目を向けなさい。自分自身の人生に目を向けなさい。このプログラムが、そんな皆さんのために硬直化した画一的な進路から離れた、「もう一つの進路」とならんことを願わずにはいられません。



保護者の皆様へ

1 グローバリズムの視点

現在ほど、日本の若者が留学を目的として、海外へ出向くといった時代は、日本の有史以来ありません。わずか150年前は、鎖国政策がとられ、海外の異文化が意図的に拒絶されていたことを考えれば、隔世の感があります。それは、国際交流とか相互理解とか国際親善とか世界共存などの理念がその遠因としてあげられるでしょうが、「平和」であることがその根本的な基盤となっていると言えるでしょう。

近代国家は、産業や経済の発展に伴い、他国との関わりを持つことなく独立国家としての形態を維持する事はほとんど不可能です。産業や経済の相互依存だけでなく、文化、教育、政治、スポーツなどのあらゆる分野において、国家間の関係は緊密な情報交換や提供、さらには価値の共有などを必要としており、それはまさしく「世界共存」という考え方を絶対的に必要とする時代が到来している事を意味しております。よく言われる国際化とかボーダレス社会とかいう言葉がそれを象徴的に物語っています。好むと好まざるとに関わらず、他国との関係は必要であるということです。そして、その関係が、選択の余地なく必要とされる以上、それは、相互交流としての友好的な相互理解に基づく関係が望ましい事になるわけです。ここにいたり、国際理解や異文化理解、相互理解の必要性を実感せずにいられません。これからのボーダレス社会を生き抜いていかねばならない今の子どもたちには、これら国際理解、異文化理解、相互理解という概念の延長上に、明らかに「世界共存」という理念が必要とされます。一国の利害や利益に固執せず、一国の価値観や見識で時代を論ぜず、一国の視点や視座で現実をとらえてはならないのです。すなわち、一言で換言するなら、多角的な思考回路と多様な価値観の受容が必要なのです。そして、若い時期にこれらを体得しておくことが、常識の一つとして必要とされる時代が来るのも遠くはないと思います。

2 時代と時間の共有

国際理解や異文化理解のもっとも端的な方法は、まず、その国に行き、実際にその国の住人として、同じ視座で生活してみるという事です。それに優る方法は、絶対ありません。そうする事によって、ただ単にその国の言語を生活レベルで学習するだけでなく、考え方の違いや価値観の相違、風習や習慣の違いなどの人間が持つ文化的な理解が可能となってきます。実は、言葉以上に大切なものが、これらのものなのです。言葉の学習は、どこでもできますし、言葉は単なるコミュニケーションの手段でしかなく、また、近い将来はAI翻訳などによって、異言語そのものが存在し得ない時代が来ることも予見できます。でも、言葉の背景にある国民性や価値観や風習、習慣などの数多くの相違を知ることが、異文化理解や国際理解では最も重要なことです。特に、それが高校時代の多感な時期に、米国の高校生と「時代と時間」を共有し、同じ教室に机をならべて学習しながらとなると、その意義は大変深いものとなってきます。言葉が理解しあえるだけでなく、価値観を共有しあえるということの方が大切なのです。

大人になってからの英語学習においては、英語という手段を通してコミュニケーションはできるけれども、価値観の共有はできずに、異文化理解においては否定的であるという社会人の方々を数多く見ることがありますが、これは、一般的に、年をとればとるほど、異文化理解や国際理解は難しくなるという事例の最たるものです。おそらく、大人になればなるほど、思考の柔軟性が欠落し、自分がこれまで生まれ育った環境での価値観から離れることができずに、異文化に対して排他的になったり、敵対的になったりします。年をとってからは、観光旅行で海外に行くのは好きだけど、ホームステイで家庭に滞在することには抵抗があるという方が多い事の原因はこの辺にあります。これだけ日本から数多くホームステイに行くにもかかわらず、参加者は圧倒的に子どもたちであって、社会人はほとんどいないのが、その証拠です。ですから、社会人となって、大人となったら、異文化の家庭で生活することすら窮屈になってくるのです。異文化交流は、若い時であればこそ、抵抗なく受け入れることができ、若いからこそ、柔軟性のある、多様性のある価値観や、多角的な思考を身につけることができるのです。

3 高校留学の特質と危険性

ここで高校留学の特質と危険性をそれ以外の留学と比較しながらいくつか考えてみたいと思います。

アメリカにおける留学には、年齢や知識や学業レベルに応じて、高校留学、大学留学、大学院留学と、大きく3つに分けられます。ところが、高校留学と大学留学及び大学院留学には根本的な違いがいくつかあります。それは大学以上

の留学では、残念ながら通常の日本人留学生は、事前に、単なる語学の勉強である英語コースをとる事を強要されるという事です。ですから、クラスには当然の事ながら、米国人大学生は全くおらず、日本人や東南アジア、中南米、中近東の学生と一緒に、ある特定のレベルに英語力が到達するまで、そのクラスを受講する事になります。この「語学の勉強」を目的とした学習はいわゆる語学留学と呼ばれ、語学の習得をした後、本来ならば大学や大学院などの専門分野へ進学するのですが、最近ではこの語学留学が主たる目的となって、そこを卒業することで精一杯という現実があり、むしろ語学留学が留学の中の主流という笑えない現状があります。その点、高校留学では、英語が分かろうが、分かるまいが、最初のクラスから米国人高校生と同じ教室で同じ様に学習できるのです。これによって、言葉の習得だけでなく、異文化との接点が日常のクラスで体験できるのです。すなわち、先述したとおり、語学の学習以上に大切な異文化理解や価値観の相違、習慣の違いなどを学校生活レベルで最初から体験することが可能なのです。そういう意味では、日本で最も人気のある「語学留学」は、異文化理解には程遠い環境での生活になっているわけです。

また次に、大学以上の留学の場合、滞在方法が寮かアパートになりますが、高校留学の場合はホームステイという方法であるということです。これによって、学校だけでなく、家庭生活における日常においても、ホストファミリーの方々と英語を使う機会に恵まれるだけではなく、あらゆるホストファミリーを中心とした人的交流が生まれ、そこに生の異文化生活を体験できるわけです。確かに、大学生でも希望すれば、ホームステイをすることが可能ではあります。しかしながら現実には、半年以上もホームステイすることはありえません。何故なら、彼らにとってホームステイはあまりにも自由の効かない生活だからです。通常の大学留学生は、最初の半年間はまじめに学習していたにもかかわらず、だんだん怠惰になり、学校に行かなくなり、アパートやマンションなどの自宅が日本人留学生の溜まり場になるというのも、皮肉にも、自由の効く生活がこのような現実を生み出すのです。そのような環境の中の大学留学生は、確かにアメリカで生活はしていますが、日本人文化圏での生活と呼べるものであり、異文化理解につながる価値ある生活では全くありません。このように両者間の滞在方法の相違においても、高校留学の持つ恵まれた環境を指摘することができます。

高校生と大学生という年齢の差は、「鉄は熱いうちに打て」の通り、異文化体験や相互理解は適応力のある時にこそ、それが精神的にも肉体的にも可能であり、また、その時期だからこそ、多くの意義を含んでいるという事に関連してきます。それは、高校留学においては、若い時期に「精神的自立」を体得できる可能性があるという事です。1年間にわたり親元を離れ、異なる環境と異なる価値観を持った異国で、1人で生活するわけですから、相当な精神力を試され、それが培われる事となります。確かに高校留学は苦しさの連続です。必要とされるものや育まれるものは、忍耐力、積極性、自立心、主体性、克己心、精神力、観察力、社交性、協調性、向上心、責任感、規律性、自制心、判断力、問題解決力など数え上げればきりがありません。それだけに総合的な人間性が試されます。

しかしながら、これまで述べてきました高校留学の有益性は、プログラムとしてその成果が達成された時に、指摘できる一面性であります。と言いますのも、高校留学の特質は諸刃の剣であるという認識も必要だからであります。すなわち、適応力があり、若くて、可塑性があるという、一見、優れた一面性として表現されたことは、逆から述べれば、判断力がなく、未熟で、流されやすいという意味でもあるわけです。ですから、16、7歳の未熟で、判断力の無い者が異国の、異文化の、異言語下の他人の家庭で、孤立無援に生活するということは、同時に数多くの精神的試練と危険を伴うということでもあります。プログラムの結果として、成果の達成感より挫折感がより大きければ、これほどの辛さもまた無いと言っていいでしょう。ここに、高校留学の危険性と落とし穴も見ることができます。(その危険性と落とし穴を乗り越えるための方法論が、オリエンテーションであるとセンターでは考えております。)

4 もう一つの進路

「かわいい子には旅をさせよ」と昔の人は言いました。旅には幾多の困難が待っているからこそ、昔の人はそれを勧めたのです。そこには、「艱難汝を玉にす」という考えが根底にあります。つまり、困難が人を創るということです。現在の日本の教育を見れば、偏差値教育の弊害があらゆるところに破綻を来しています。「世界の中の日本」とこれからの置かれた日本の立場を考えれば、教育の現場にも新しい試みが必要かと思われます。小学校から中学校、中学校から高校、高校から大学、大学から社会へと連綿と続く、日本社会にある既存の敷かれたレールをただ走るのも一つの進路ならば、高校時代の3年間に1年間くらい、「もう一つの進路」として別のレールを走ってみれば、別の景色が見えるでしょう。別の景色を見れば、今の景色がより鮮明に見えてくるでしょう。

遠回りに見えても、長い人生からすれば、短い、価値ある1年と断じて疑いません。子どもさんの自立への旅立ちとして、この高校留学を強くお勧めいたします。

高校留学のお勧め

☐ 高校留学と大学留学

まず、多くの人が誤解していることがあります。それは大学生で留学することを「大学留学」、高校生で留学することを「高校留学」と、ただ単に思っていることです。つまり、ただ留学をする時の年齢の違いと考えているだけなのです。ですから、「高校で留学をしたい。」と相談しても、先生方を含めた周囲の大人たちは、「今は大学受験に専念して、大学に行ってから留学すればよい。」と、したり顔をして答えるのが常で、それ以上の発展に至ることはほとんどありません。偏差値の高い高校や大学と関りを持つ生徒や大人達ほど、これらの傾向が顕著でもあります。この単純で、杓子定規の指導を例えるなら、「野球をやりたい。」と希望している生徒に、「バスケットをやればよい。」と助言しているようなものなのですが、言う方も言われる方も、それがとてつもなく矛盾だらけのことであることに気づきません。

全く冗談ではないという次元の話なのですが、こんな誤認の中で、生徒たちの進路相談や親子間の会話が、行われているのですから、文部科学省が、いくら生徒たちの留学を、推し進める施策を打っても、「笛吹けど踊らず」という事態は、変わることはありません。また、さすがに文部科学省は、留学そのものの価値は十分に認識し、多様性のある政策を行っているように思われますが、留学の価値の伝え方が不十分で、留学という方法を鼓舞する施策だけでは、誤解や誤認が益々増加していくようにも思われます。

何故、このような誤認が発生するのでしょうか。高校生の「時」に行くのが高校留学、大学生の「時」に行くのが大学留学と考えてしまうのは、単純に考えれば当然かもしれません。でも、そのような誤認や混同を生む最大の原因は、日本における進学の在り方にあり、それが留学にも同じ現象をもたらせていると指摘できると思います。同時に、「目的」と「方法」が常に混在しあい、ともすれば、方法が目的化したり、目的が方法化したりする、非論理的で、曖昧な思考過程にあると思います。

例えば、多くの高校生と指導者、大人たちが、その進路を話し合うとき、「どこの大学に行くのか」という話題が主で、「何学部を受験するのか」という話題は、ほとんど上らないのが現実です。考えてみれば、こんな不思議な話はありません。「〇〇に興味があるから、〇〇学部に進学したい」と「目的」があり、それから志望大学を決めるという「方法」に発展するのが普通なのに、どこの大学に行くかという「方法」を決めた後に、そこの大学の何学部に行くのかという「目的」を決めたりする有様は、本末転倒以外の何物でもありません。挙句の果ては、志望大学の志望学部の偏差値が少し高いということで、志望大学を変えるのではなく、志望学部を変更するという奇妙奇天烈なことすら始まります。このように、私たちの思考過程では、何を学びたいかより、どこで学ぶかが決定要因の上位にあったりするのが、日常的な感覚です。そしてよくある、「方法が目的化していく」という悪循環の繰り返しが始まります。

ですから、「高校留学をしたい」と希望した生徒に、「大学留学を勧める」周囲の大人達の助言は、留学＝スポーツという構図の上に成り立っています。つまり、留学（スポーツ）は知っていても、具体的にその内容は理解していませんので、「野球というスポーツをしたい」と言っている生徒に、「バスケットというスポーツを勧める」という奇妙な助言が生まれるのですが、問題は非常に深刻なものが 있습니다。つまり、高校留学と大学留学の差異や本質、目的は語られることなく、それらを全く理解されていない大人たちが、その相談相手となり、誤認の中で指導が行われているからです。「〇〇大学の法学部に進学したい」という生徒に対して、「法学部は今の偏差値では少し厳しいから、教育学部にすれば〇〇大学は大丈夫だろう」と助言することと、ほぼ同様のことであることがわかります。

☐ 高校交換留学と大学留学の本質

米国における高校交換留学の本質は、家庭生活、学校生活、市民生活を体験しながら、義務教育に当たる高校で、一般教養を中心とした授業を、米国の高校生たちと一緒に受けるという、総合的な異文化体験を行うことができることにあります。この同世代の高校生達とのいる教室に放り込まれることに、高校交換留学の最大の価値と本質があります。英語が分かったり分からないが、授業が理解できようができませんが、お構いなしの状態、ジョンやメアリーのいる教室に投げ込まれる、待たないの現実です。同時に、ホームステイを通して日常生活の異文化も体験するでしょうし、ホストファミリーを通して市民生活の様子も窺い知ることができます。一年間という限られた時間の中で、密度の濃い、広範囲にわたる体験と人的ネットワークを作り上げることもできます。多感な時代に体験する異文化は、強烈な刺激であり、甚大な影響を与え、多様な価値に対応できる人間性や人格を可能にします。「君子三日見ざれば、括目してこれを待つべし」という言葉があります。すなわち、三日会わないだけでも、人は驚くほどの成長をするものであるという教えですが、若者であれば日々新たであり、その成長は異文化ではなおさらです。例えば、高校一年生、二年生、三年生と年齢の違う生徒たちでも、一年生で交換留学を体験した生徒の英語力が最も伸びるという明瞭な結果が、この年頃の生徒たちの可能性を物語るものでもあります。

その点、大学留学の本質は、専攻教科の専門性につきます。学業中心の生活がすべてであり、何故、これほど勉強しなければならないのかという時間の連続です。米国大学に入学するのは簡単ですが、卒業するのは困難ですので、高校留学で体験するような、家庭生活や市民生活を楽しむ余裕と時間は、ほとんどありません。但し、学業中心の生活にならない、楽しい大学留学の話を耳にすることがありますが、それは留学とは名ばかりで、遊学に過ぎないという冷酷な現実があり、結果として、何年間の留学になるのかさえわかりません。それでも、大学の卒業証書を手にすることができるのは、ほんの一握りです。大多数は、事前の英語コースに汲汲として、本科の授業を受ける前に挫折して帰国することになります。それでも、帰国する学生はまだ良好であり、そのまま居座り、不法就労に従事したり、結婚したりして、滞留期間の期限も切れ、不法滞在や強制送還となる数も少なくはありません。入学するのが難しく、卒業するのは簡単という日本の大学の現実を反映して、日本の大学生が不勉強であることは昔から言われたことですが、この日本的価値観が留学期間中においても発揮され、卒業の難しい海外の大学では、卒業はまさしく鬼門となってしまうわけです。そんな学業中心とならない大学留学は、価値が半減するどころか、日本に帰国後、就職においても、進学においても、次のステージに進む土台すら見つからないという過酷な環境が待ち構えており、最悪の状態です。

あくまでも一般論ではありますが、これまでの参加者たちの結果から見ても、高校留学は誰にでも勧めることができますが、大学留学は不勉強な生徒には危険極まりないものであるというのが、センターの見解です。不勉強であると自認しているのであるなら、大学留学ではなくて、語学留学という形で、遊学的な視点からトライしてみるのが最適だと考えています。また、優秀な生徒を自認しているのであるなら、「大学留学」よりも「大学院留学」が最良の選択であることを敷衍しておきます。つまり、日本の大学で専門教科を徹底的に学び、同時に英語力を付け、その分野の進んでいる海外の大学院で学ぶことが、最も効果的な留学の在り方だと考えます。

留学

通常、人は勉学の場合、自国に求める事を前提としていると言っても過言ではありません。国民がいて、国家があるのですから、日本人が日本国で生活し、働き、勉強するのは自然なことです。そして、母語によって提供される自国における教育は、より良い国民、善良な市民を育てるための自然な有様でもあります。中には、そうあるべきだと言う方々も、いらっしゃるかもしれません。さらには、自国以外の国で、母語以外の言語を使って教育を受けることは、日本人としてのアイデンティティーを喪失することにも繋がり、とんでもないことだと考えることもできます。また何よりも、自国で教育を受ける権利があり、義務があるのですから、その方が費用も廉価で済み、良いことづくめでもあります。

それとは異なり、留学とは、言わずもがな、自国以外の国で学ぶこと、教育を受けることです。異なった特別の進路の在り方ですから、より一層慎重に、留学の本質や目的、専門や将来展望について考えることが大事です。さらに、生活コストも余分に必要ですし、他国ですから教育を受ける権利もありませんので、教育費の負担も大きくのしかかります。何より、自国以外での生活は、馴染めないことが多く、不自由な生活でもあり、精神的にも疲弊し易く、相当なストレスと負担が重圧となります。こんな不自由な環境に身を置く「留学」なるものの価値などは、一見、何も好んで選択するような余地は、どこにも無いように思えます。

高校交換留学の価値

先述しましたように、高校交換留学の最も価値あるものは、現地の高校生の教室に放り込まれる学校生活にあります。若いティーンエイジャー同士、まず一緒に居て、同じ空気の中で時間を共有すれば、友情や信頼も生まれ、異文化に関する理解や敬意も育まれ、言語や文化を超えてお互いに学びあい、国際理解や尊重につながる契機も醸成されるというような理念を感じ取ることができます。もちろん、若いゆえの難しさや落とし穴もありますが、高校生の年齢にしかできない、期間の限られた濃密な異文化を体験することが可能です。

この約30年間で、急激に国際化が進みました。いわゆるグローバリズム、世界標準の価値観への移行が、急激に加速した時代でもあります。一国の利害や価値だけで判断できることも数多くありますが、他国の存在や価値、判断や知見を無視することができないこともまた無数にあります。すなわち、交通や経済、金融や貿易などで、近代化と国際化が進み、国家間の移動や交流が激しくなり、自国だけで、また自国のみが繁栄することは、不可能な時代に突入しているというのが、紛れもない現実だということです。そして、この認識を持つことが、特に若い世代には大切です。あらゆるものが多様化しているのが現代社会の特徴であり、それは国内ではなく、世界全体も同様です。特に、将来を生きる若者達にとって、この認識の欠落はガラパゴス化した世界観に繋がりがかねません。だからこそ、文部科学省が躍起となり、日本の若者を海外に送り込もうとしているのです。

「田舎の学問より京の昼寝」とか、「人中が薬」とか、日本の先人たちが放った言葉には含蓄があります。若い時こそ、価値の多様性や多元的思考を実感するためにも、異なる角度から学問をし、数多くの人々と会い、幅広い見識と知見に出会って、一回りも、二回りも成長できるものであるという価値観が、これらの言葉の中に見え隠れします。適切な高校留学の道と選択を行って欲しいと思います。

このプログラムの特色

1 徹底した情報開示と説明

多くの方々が高校留学を前にして、各団体の留学制度の特質をパンフレット上で比較、検討されていることでしょう。その中で、このパンフレットを読まれると、内容が難しく、その量が非常に多いことにお気づきだろうと思います。このことは、センターのプログラムの特色でもあります。国際交流プログラムや異文化理解の研修プログラムなどは長い経験や実績と、それに基づく指導、運営、そして時代変化に伴う継続的な修正と見直しを必要とする、非常に複雑なプログラムです。それだけに、運営するセンターと参加者間における相互理解のための確認が大変大切です。様々な予期せぬ事態が発生したり、不足の事態に陥ったとき、両者間が不快感や不信感を抱くことのないよう、センターでは事前の「徹底した情報開示と説明」を心がけており、それがこのパンフレットにも象徴されています。また、出願後にお渡しいたします参加者用資料や保護者用資料なども同様です。

2 費用の内訳を明示

この公立高校交換留学プログラムは、日本とアメリカという2国間にわたって成立しておりますので、非常に多面性を持っています。また期間も、留学前、留学期間中、留学後と3つに分けることができ、それぞれの期間に行われていることも、行われている場所も、全く異なりますので、参加者を直接指導したりする担当者はもちろんのこと、運営や管理に携わる者も、時期や場所によって異なるという側面があります。もちろん、プログラムはセンターが中心になって運営してはおりますが、米国公益教育法人、所属公立高校、ホストファミリー、損害保険会社、航空会社など、企業団体だけでもこれだけの組織が関与して、支えられているプログラムです。このような複合的な要素の強いプログラムですから、参加者が負担する費用の支払い概算を明示しておくことで、参加者からの理解が得られやすく、プログラムに対する認識もより深いものとなってくるとセンターでは考えております。そして、さらに、内訳を明示する理由がもう二つあります。一つは、センターのプログラムは事前学習から始まり、帰国後の再適応オリエンテーションをもって終了するまで、約2年間の長期にわたるため、約2年間の費用がいくらかと表示するだけでなく、2年間の間に行われる個々の費用を明示した方が、理解されやすいということです。二つ目は、プログラムを構成するものは、「事前学習と事後学習費用」「オリエンテーション費用」「日本から米国までの往復総費用」「センターの2年間の運営費」「米国公益教育法人の運営費」の5分野から成り立っていると考え、その5つの分野の費用を明示した方が、もし参加者が途中で留学を断念されたとき、

それまでの経過費用の算出がより簡略化されるだろうということです。ですから、この5つに分けて内訳を概算しております。

3 審査・判定とカウンセリング

センターでは、高校留学の参加者を、合格、不合格という2つの単純な概念で、判定することはいたしません。多くの組織がそういった手法をとるのは、出願時点の能力だけで判断し、その後出発までの準備期間を重視していないからといえるでしょう。センターでは、留学への強い意志がある生徒を、出発までに、「育てていく」という姿勢を持っています。出願後、提出していただく書類と電話による英語インタビューの結果、また、中学一年次からの学業成績と欠席日数や、出願時期などを総合的に踏まえ、出願者が高校留学を果たして成し遂げられるかどうか、出願時点での留学成功の可能性を、センターの長年の経験から審査し、判定結果を6段階で通知します。その通知を受け、出願者は、留学準備を進めるかの決定を行います。たとえ、低い判定を受けたとしても、本人に挑戦したいという強い意志があれば、センターは喜んで、生徒を指導します。また、判定のためにカウンセリングが必要と判断した場合は、センター職員が自宅に家庭訪問して、保護者、生徒同席の上、カウンセリングを行います。

4 事前学習

多くの高校留学における参加者や保護者の根本的誤解は、自分は高い判定を受けたのだから、留学生としての資質が認められたのだと勘違いするところから始まっています。高校留学のプロとして体験的に指摘できることは、高い判定を受けた生徒でも、事前に何の指導することなく送り出せる高校生はいません。つまり、事前の学習や指導なき高校留学は、多くの危険性をはらんでいるということです。その視点に立ち、センターでは数多くの事前学習を準備していますが、ここでは「英語学習」と「自由研修」について説明します。

「英語学習」では、異文化理解や相互理解に関する英語のCDによる書き取り、また、アメリカの高校生による日本文化に関する質問の回答準備、アメリカの学校で使われる英語の慣用句や英語による教科別の課題や日常生活用語など、覚えておかなければならない英単語集などを学習してもらいます。

留学したから急に英語ができるわけではありません。留学してからの英語力の向上は、出発の段階での英語力に大きく左右されます。留学は出発までに学習した英語力を試す場です。基礎学力のない上には英語力につきません。さらに、英語力のある生徒ほど、友達も多く持

つことができ、ホストファミリーとの関係にもほとんど問題は見られず、1年間の学習成果も大きく、すべてにおいて良好な結果を導き出します。英語力があるかないかは、留学の結果の成否を判断することのできる大きな目安なのです。ですから、出発までにどれだけ英語力をつけるかが今後の参加者の大きな課題となります。

「自由研修」では、センターから与えられた全6回のテーマについて意見と感想をレポートとしてまとめて提出してもらいます。日本人留学生は他国から来た留学生と比較すると、自ら問題意識を持ち、考え、自分の意見を述べ、主張する姿勢が大きく欠落しています。英語が話せる、話せないことの以前の問題として、自分自身の意見や主張がないのが特徴です。また、アメリカでの授業では討論形式のものが多く、自分の意見を持ち、積極的に討論に参加するということはとても大事です。

5 オリエンテーションが充実

留学の事前準備として、語学力に加え、多くのアメリカに関する情報を収集しておくことも必要ですし、同様に自分の国についても学んでおく必要もあります。また、異文化体験に適應できるよう「自己改革」を行っていくことも大切です。オリエンテーションは、保護者同伴のものが1日、2泊3日の冬のオリエンテーション、5泊6日の春の1次オリエンテーション、2泊3日の春の2次オリエンテーションが行われます。保護者同伴オリエンテーションでは出発までの勉強法や日常生活の心構え、冬のオリエンテーション、春の1次オリエンテーションでは、具体的に「自主性、自立心、自己主張に基づく自己改革」をテーマに、日米の比較文化、学校生活ガイダンス、家庭生活ガイダンス、討論会、ケーススタディなどを行います。そして、2次オリエンテーションでは、主に危機管理を取り上げます。合計で生徒が受ける事前学習時間は100時間を超え、日本で行われている平均的な高校留学制度のオリエンテーションの約5倍の量を受講します。

6 留学事前講座

日本を出発してから数日後に高校入学手続きという大きな環境のギャップに悩まされることがないように、また、事前に英語力の向上とアメリカ生活の早期適應を目的として、センターでは、高校留学が始まる前に約1カ月間、留学事前講座をセンターからの留学生のためだけに開きます。参加決定者は、希望すればこの講座を受講することができます。また、事前に行なわれるSLEPTTEST及びELTiSのスコアが規定の点数以下の場合、この講座を受講しなければなりません。1カ月間はホームステイしながら、10人ぐらいの少人数制で、月曜から金曜日まで週5日間、1日5時間程度、英語だけの授業を受けます。授業内容は、英語の「話

す」「聞く」「書く」「読む」を中心に行われます。また、英語以外にも、9月以降の高校入学のことを考慮したトレーニングや、高校生活についての説明も随所に組み込まれたカリキュラムを用意しています。

7 アカデミックレポートの送付

期間中はアカデミックレポートによるプログラム運営を行います。アカデミックレポートとは「ACレポート」と「スチューデントレポート」の2つからなります。「ACレポート」は担当コーディネーターが生徒の学校、家庭生活を客観的に評価し、報告するものです。「スチューデントレポート」は生徒が自分自身を客観的に自己反省する目的で、毎日記入していく日記形式になっています。これらのレポートにより、具体的な問題となって現れない生徒の悩みを、早期解決するという方法をとっています。また、日本の高校でもレポートの提出を義務づける場合があり、特に進級を希望する生徒にはこれらのレポートが大変有効です。さらに、帰国後、自らの留学を客観的に振り返り、記録する貴重な資料となるでしょう。

8 留学期間中のサポート

センターでは、パソコンによるインターネット接続が可能な参加者には、出発までの事前学習や留学期間中のサポートを、e-mailなどを通して行ないます。また、留学中も、e-mailなどで定期的にセンターから助言や情報提供を行ったり、センター担当者が、留学生からの質問や相談に対して、アドバイスをしたり、カウンセリングも行ないます。



高校留学の落とし穴

数多くの留学希望者に、周囲の者がいかに留学の厳しさ、困難さを諭しても、「憧れの留学」「夢に見た外国生活」「英語を自由に話す自分」など、彼らにそれ以上の希望がある限り、自らが体験するまで現実を理解できません。ですから、センターではそれは仕方のないことだと考えています。

最も大事なことはただひとつ、高校留学を志そうとする人やその保護者の方々には、高校留学の危険性と落とし穴を十分に認識して、その実態を把握しておかれることだろうと思います。「高校留学の成功について」を一言で表現するのは無理があり、数十ページにわたる議論が必要ですが、「高校留学の危険性や落とし穴」を指摘するのは、それほど困難なことではありません。また、「高校留学の魅力や有益性」に関する意見や考えは、数多く見ることができますが、「高校留学の危機性や落とし穴」に関するものはほとんど希有です。しかし、センターでは、参加される側にとって、それは大変大切な情報の一つであると考えておりますので、有効に役立てて欲しいと思います。下記に記載されている10項目は、センターの長年の経験と実績から指摘できる、高校留学の落とし穴と危険性の真髄です。決して、一方的に高校留学を肯定しないためにも、これらの意味を良く理解して欲しいと思います。しかし、このことで、必要のない不安や恐怖心を留学生たちが抱くのであれば、それはセンターの本意ではありません。これらを知ることによって、より前向きな気持ちで接していただきたいのです。すなわち、下記のような落とし穴に落ちる事のないように留学生活を実践すれば、自ずから良好な結果と有意義な留学体験ができるのだという考え方をしてもらえば、あえてその危険性と落とし穴を説明する意義があるというものです。

1. 米国到着時に、交換留学生に求められるのは次の2点です。高校側はELTiS212点以上の「英語力」を求め、ホストファミリー側は「自立」した生徒であることを要望します。英語力のクリアは、勉強すれば比較的簡単ですが、自立できない生徒のホームステイ（家庭生活）は、ホスト側にとったら最悪の交換留学生となります。高校留学が結果的に、否定的な評価を受ける事例の80%前後は、この2点のどちらかが不十分であることに起因するものです。センターがオリエンテーション期間中に、「自主性」「自立心」「自己主張」の三点から、自立について指導していくのも大きな理由があります。
2. 自己判断力のままならぬ日本の高校生が、自己責任を背景にして、孤立無援の異国の環境で自ら判断しなければならぬ危険性とその厳しさがもたらす自立は諸刃の剣です。つまり、もし間違った判断であろうとも、その結果は自己に直結しています。判断力を磨くために、客観性を養うことが急がれます。
3. 留学の結果として、英語力アップが必然的に付随してくるわけではありません。目的のない留学では、英語力の飛躍はそう期待できません。多くの日本人が考える「留学＝英語力の上昇」という構図は、とんでもない誤解です。
4. 多くの人は、「留学」そのものに価値があると考えています。しかし実際は、「留学で得られるもの」に価値があるのであり、主体的に自らが取り組まなければ、「留学」そのものには、価値は皆無です。
5. 影響されやすい、流されやすい日本の高校生が、誘惑の多い環境で自分だけを頼りとして、自分の足を大地につけて、一人で立ち続けなければならないという厳しい環境がもたらす功罪があります。つまり、克己心があれば自立できるでしょうが、自己管理ができなければ、際限なく流されていくだけです。
6. 米国では、自由という巨大な快樂と、責任という巨大な苦悩は、同じコインの裏と表の模様です。小さな自由と小さな責任が、別々のコインとして存在している日本の高校生には、自由の快樂しか見えてきません。
7. 自己主張のできない者は、敗者となるのが米国社会です。英語ができないとか、恥ずかしいとかなどの理屈や弁解は不要です。主張することが先決なのです。
8. 米国では高校生に対して、「まだ子供だから」という周囲の理解の姿勢は全くありません。また、本人もそれを言い訳や弁解にはできません。その環境は日本の生徒にとって、非情であり過酷なものです。つまり、日本にいる時に、できるだけ親から自立しておくことが必要です。
9. 高校留学は、日本で失うものを引き換えにして、米国で得るものが存在しています。そして、得るものの量は、事前学習に正比例しています。つまり、事前学習のない留学は遊学でしかなく、得るものより失うものが多くなり、留学の意義は半減します。
10. 異文化での留学生活は、「驚き」と「不満」と「困難」と「苦悩」と「戸惑い」を常態としています。つまり、そこは文化的戦場であり、留学生は戦士です。戦士である以上、理論的武装が必要です。事前学習とオリエンテーションが、その理論武装の場であり、怠惰であれば理論武装のない戦士となり、文化的戦場では敗北を意味します。

事前学習

高校留学の成否は、適切な指導に基づく事前学習がすべてです。センターはこのプログラムにおいて、事前学習の時点から生徒を「育てる」という視点で対応しています。ただ優秀な生徒を選考し、限られた者だけに高校留学を体験させるのではなく、英語力は平均的でも、留学に対する意欲が非常に強く、なおかつ、個性が豊かであったり、異文化について強い熱意のある者や、人的交流に熱い情熱を持っている者などを、留学適性者として事前学習を通して、出発までに育てていきたいと考えています。センターの事前学習は、「英語学習」「異文化学習」「自文化学習」「自己改革」の4つに分かれています。

1 英語学習

英語学習では、「英文法」「聞く学習」「読む学習」「書く学習」「慣用表現の暗記」という5つのジャンルに分けて学習してもらいます。

「英文法」では、1冊の英文法の参考書を、繰り返し勉強してもらい、基礎英語力を徹底して出発までにつけるように指導します。

「聞く学習」では、日米文化の違い等を説明した英語のCDを聞いて、それをディクテーション（書き取り）してもらいます。書き取ることでより集中して聞く習慣をつけるようにします。

「読む学習」では、センターから渡された英語の本を読み、その本を読んでいない人にも内容がわかるように、チャプターごとに日本語で簡潔にまとめ、それをセンターに提出してもらいます。

「書く学習」では、センターから出された全10回のテーマについて、300以上の英単語からなる英語のレポートを作成し、提出してもらいます。

「慣用表現の暗記」では、日常生活でよく使われる慣用的表現を500文選定してありますので、それを丸暗記することによって実生活には困らない程度の自己表現を身につけることが出来ます。

その他の英語学習では、全てが英語で書かれた国語や数学の問題を解いてもらいます。そうすることで、「英語で問題を解く」意識を生徒たちに持たせることができます。

また、米国高校生によって書かれた「日本及び日本人についての素朴な質問」に対する自分なりの回答を英語で準備することです。すなわち留学期間中に必ず質問される典型的な日本に関する質問を事前に自分の頭で考え、その答えを準備しておくことは、交換留学であるこのプログラムの趣旨からも大変大事であり、このような学習を通して、適切な相互理解が保たれていくことになるのです。

2 異文化学習

まず、センターによって執筆された「日米ここが違う」を精読してもらい、日本とアメリカの文化の違いを徹底的に理解してもらいます。これは自文化学習の教材にもなり、アメリカを理解しながら、それと対比させて、日本を理解していこうというもので、異文化に適応するために、事前学習として大変役に立つものです。

次に、これまで参加した生徒がおこしたトラブルを他山の石として学習します。すなわち、ケーススタディとしてトラブルに対する自分の意見をまとめ、提出してもらい、同種同様の問題に自分自身が直面したとき、正確な判断と行動がとれるように学習するものです。

この他に、アメリカとアメリカの高校について、概略を説明した教材で事前に学習してもらい、初めて学校に行くとき戸惑うことがないようにします。

3 自文化学習

先述した「日米ここが違う」を学習することにより、日本及び日本人の位置する場所を自覚し、異文化を意識した視点で日本文化と文明を考えるようにします。そして、指定された日本文化を英語で紹介する本などを多読し、伝統的な日本文化に対する理解も深めさせます。

4 自己改革

日本の高校生が、米国の高校で1年間を過ごすということは大変魅力的なことに見えますが、いくつかの落とし穴が待っていることも事実です。日本の高校生とアメリカの高校生には大きな違いが数多く見られます。これらの違いを事前に、出発まで自己改革という視点で見直してもらいます。まず始めに、「自由研修」があります。自由研修は生徒の自主性、自己表現力を養うためのものです。センターから社会問題などについてのテーマが全6回与えられます。それについて生徒は、様々な角度から情報を収集し、分析判断して自分の論旨で、考えや意見、感想をレポートにまとめ、センターに期限内に提出します。海外で生活する際に最も必要で、なおかつ日本人留学生に欠如しているものは「自己主張」です。豊富な知識と博学さは米国高校生をはるかに凌駕しているのですが、「意見」「主張」「持論」が貧困です。この一面性を補足するためにこの自由研修は行われます。センターがこの研修を通して生徒に望むものは、「常に自ら問題意識を持ち、考える姿勢を実践する」にあります。

オリエンテーション

☒オリエンテーションについて

留学前の準備期間は、留学期間中よりもはるかに大切な時間です。準備期間の過ごし方で、留学期間の成長を100パーセント間違いなく、予測することができます。

準備期間における

- ・自己改革の不足は、米国文化に圧倒されて委縮してしまいます。
- ・英語学習の不足は、留学期間中の英語習得に問題が発生します。
- ・日本に関する学習の不足は、生徒の相互交流の姿勢に問題が出ます。
- ・交換留学の意義に関する学習の不足は、ホストファミリーとの生活に問題が生まれます。
- ・異文化学習の不足している者は、異文化への対応ができずに事件、事故にあう可能性が残ります。
- ・米国の高校生に関する理解の不足は、友人作りで問題性を残します。
- ・日米の高校の違いに関する認識の不足は、高校生活で必ず問題を発生させます。

以上のことから、準備期間中に自国と異文化に関するより多くの情報を収集し、学習することが留学を成功させるための最大の方法であることが分かります。そして、それを指導するのが、留学者によるオリエンテーション（事前研修会）なのです。このプログラムではオリエンテーションを「留学前」「帰国後」の2つに分けて行います。オリエンテーションで指導されたことを確実に理解し、実践すれば、留学は必ず成功します。留学前のオリエンテーションのテーマは「自主性、自立心、自己主張に基づく自己改革」です。すなわち、日米の高校生に見られる最も大きな相違である「自主性、自立心、自己主張」を大いに養いながら、ひとりで異文化に耐え抜く精神力を身につけてもらわなければなりません。

☒保護者同伴オリエンテーション（1日）

このオリエンテーションは、保護者同伴で行われます。期日は出願状況に基づき、その都度実施されます。その目的は、保護者に対しては、留學生の親としての協力的な環境の作り方と異文化へ子を送り出す親としての異文化理解のあり方についてを中心に行います。生徒に対しては、春のオリエンテーションまでにしておくべき課題と留學生としての自己改革のあり方を目的として行います。この最初のオリエンテーションでは、SLEP TESTと呼ばれる、英語力を客観的に判断する試験を行います。なお、全員参加が原則ですが、出席できない参加者は、本オリエンテーションを録音したCDを聞き、資料を精読いただき、条件つきで、本オリエンテーションの出席にかえることができます。この場合のSLEP TESTの受験は、センターより代替法をご案内いたします。

☒冬のオリエンテーション（2泊3日）

2泊3日で行われます。このオリエンテーションの目的は、留學生としての自覚を早期に体感させることにあります。春の1次、2次オリエンテーションと合わせると、合計で生徒が受ける事前学習時間は100時間を越え、日本で行われている平均的な高校留学制度のオリエンテーションの実に5倍の量を受講します。最終的に全てのオリエンテーションを終了しなければ、留学への参加は認められません。オリエンテーションでは、予測できる異文化への不適応を討論し、出発までに各自が勉強しておかねばならないこと、そして日常生活の中で望まれる米国生活での姿勢を指導します。具体的に、「日米比較」の授業では、日米の違いを徹底的に学び、「学校生活ガイダンス」では米国高校の授業登録の仕方や授業形態、高校生活全般の説明を行います。また、「自由研修」では討論会、「相互理解」では逆に自文化を考えさせ、「ケーススタディ」ではこれまで先輩達が悩んだ事柄を100問設定し、意見を述べ合う形で進めていきます。また、センターがただ単に指導するだけでなく、指導された内容をどれだけ把握しているか、毎朝30分程度の小テストでチェックします。なお、宿泊代、食事代は費用に含まれています。

☒春の1次オリエンテーション（5泊6日）

5泊6日で行われます。このオリエンテーションの目的は自己改革の実践です。日米比較、学校生活ガイダンス、自由研修、相互理解、ケーススタディの学習を通して、これらを実践してもらいます。さらに、個別カウンセリングを実施するなど、期間中、徹底的に留学準備の指導が行われます。なお、宿泊代、食事代は費用に含まれています。

☒春の2次オリエンテーション（2泊3日）

2泊3日で行われます。出発を目前に控えた時期ですので、この時期に研修指導した方がより効果的であると思われる内容を主に指導します。具体的には「危機管理」「金銭管理」「規則とルール」「強制送還」などプログラムに関する重要な問題や危機管理を始めとする生命の安全に関する問題を取りあげます。また、交換留学の査証申請などを始めとする渡航に関する事務手続き、留学期間中の保険に関する事務手続き方法、具体的な出発準備や何を持っていくかなどの、実務的かつ現実的な内容のものが数多くあります。また、参加者自身も現実的内容の質問が多く発生する時期でもあり、それらに対する質疑応答の時間も組み込まれています。なお、宿泊代、食事代は費用に含まれています。

☒再適応オリエンテーション（1泊2日）

1年間の異文化での生活は、感受性の強い生徒にとっては、完全に米国文化に適応し、同化しています。そのため、帰国後は、逆に日本文化への不適応が見られます。家庭生活における不適応、学校生活への不適応、逆ホームシックからくる日本文化への不適応などが一般的に見られる事例です。

これら日本文化への再適応をスムーズに行うために開かれるのが、帰国後の1泊2日のオリエンテーションです。高校への復学に関する説明、日本文化にどう再適応していくか、今後の進路に関するカウンセリングなどをこのオリエンテーションで行います。特に高校への復学については、日米の高校との相違がかなり大きいため、学校への再適応になかなかなじめない生徒が出てきますので、過去の事例を具体的に提示しながら、今後生徒に発生する可能性のある問題を指導していきます。在籍する高校へは、このオリエンテーションが終了してから行かれることを強くお勧めします。なお宿泊代、食事代は費用に含まれております。

ある高校教師からの便り

高校留学におけるオリエンテーション（事前研修会）の重要性が、声高に叫ばれているにも関わらず、依然として、オリエンテーションが軽視されている。このままでは高校留学におけるトラブルは、増えることはあっても、減ることはなかろうと思われる。今、私の手元に1つの資料がある。タイトルは「渡航前のオリエンテーションのあり方」というもので、日本における高校留学業者のオリエンテーションに関する実態を財団法人日本国際教育協会がまとめたものだ。そこには、7社のオリエンテーションの実施内容と実態がまとめられている。ただ単純にどれだけの時間をかけて高校生を事前に指導するのだろうかという疑問をもって目を通していても、各社さまざまである。1番短いところは、1泊2日で12時間。最も長いところで、3泊4日で49時間と書いてある。平均2泊3日で24時間というところである。これが長いのか短いのか、私には判断はできない。

しかしである。

海外の異言語下で、異なる文化、習慣、環境、価値観の存する国で、わずか17歳前後の、自己判断力もままならない者が、1人で1年間にわたって生活するという高校留学であるなら、それでは少し短すぎるのではないか。質の相違もあろうが、絶対的な量も必要である。1年間の異文化での生活を24時間で説明するには、私には異議がある。絶対に充分とは思えない。

服部君から何を学ぶか。度重なる表面化した留学生殺人事件から何を学ぶか。さらには、全く表面化していないが、数限りなく現地で起きている日本人の異文化不適応から何を学ぶか。それらはすべて、留学業者がプロとして生徒に指導すべきことではないのか。それがオリエンテーションではないのか。私は決して留学を否定していない。肯定論者である。自分自身の留学経験を通して言うのだ。そして、その経験から、オリエンテーションの必要性を声を大にして望むのだ。

その意味において、貴社のオリエンテーションを私は高く評価する。私はその内容や質は知らないが、スケジュールにおける他とは全く比較できないその量の多さだけで、通り一ぺんでは誰でもはできないことだと推測する。同じ教育者として、そこに並々ならぬ熱意を感じる。（以下略）

オリエンテーションスケジュール

このオリエンテーションスケジュールは、大体のひな型です。

保護者同伴オリエンテーション以外のオリエンテーションの宿泊代や食事代はすべて費用に含まれています。

保護者同伴オリエンテーション

10:30	13:00	14:00	16:30	17:30
	出発までの準備	昼 食	SLEP TEST 保護者心構え	事 務 手 続

冬のオリエンテーション (1月上旬) 予定

	1日目	2日目	3日目
08:30		小テスト	小テスト
09:00		SLEP TEST	日米比較
10:30 10:40			
		日米比較	日米比較
12:10		昼 食	昼 食
12:50		学校生活 ガイダンス	掃 除 退 所 式
14:00			
14:30	入 所 式	相互理解	
15:00			
15:30	高校留学 について	自由研修	
17:20	夕 食 入 浴 カウンセリング	夕 食 入 浴 カウンセリング	
19:00			
	自 立 について	ケーススタディ	
21:00			

春の1次オリエンテーション (3月下旬から4月上旬) 予定

	1日目	2日目	3日目	4日目	5日目	6日目
08:30		小テスト	小テスト	小テスト	小テスト	小テスト
09:00		日米比較	日米比較	日米比較	日米比較	日米比較
10:30 10:40						
		日米比較	日米比較	日米比較	日米比較	日米比較
12:10		昼 食	昼 食	昼 食	昼 食	昼 食
12:50		学校生活 ガイダンス	学校生活 ガイダンス	学校生活 ガイダンス	学校生活 ガイダンス	掃 除 退 所 式
14:00						
14:30	入 所 式	野外活動	スポーツ活動	創作活動	スポーツ活動	
15:00						
15:30	E L T i S					
16:30	自由研修	日米比較	自由研修	日米比較		
	小テスト					
17:20	夕 食 入 浴 カウンセリング	夕 食 入 浴 カウンセリング	夕 食 入 浴 カウンセリング	夕 食 入 浴 カウンセリング	夕 食 入 浴 カウンセリング	
19:00						
	ケーススタディ	ケーススタディ	ケーススタディ	ケーススタディ	ケーススタディ	
21:00						

春の2次オリエンテーション
(5月中旬) 予定

	1日目	2日目	3日目
08:30		小テスト	小テスト
09:00		プログラム規則 強 制 送 還	比較文化
11:00			
12:10			昼 食
12:50		ELTiS	掃 除
13:30			退 所 式
14:00		入 所 式	
15:00			
16:30	危機管理	危機管理	
17:20	夕 食 入 浴 カウンセリング	夕 食 入 浴 カウンセリング	
19:00	危機管理	危機管理	
21:00			

再適応オリエンテーション
(翌年6月下旬) 予定

	1日目	2日目
08:30		ELTiS
10:30		復学手続き
11:00		カウンセリング
12:10		昼 食
12:50		掃 除
13:30		退 所 式
14:00	入 所 式	
15:00	自己診断 ケーススタディ 再 適 応 進 路	
17:20	夕 食 入 浴 カウンセリング	
19:00	進 路 について	
21:00		

出 願 方 法

☐出願方法

出願希望者は、このパンフレットを充分に読んでから、下記の方法で随時、出願してください。なお、出願書の提出が留学決定を意味するものではありません。

- 1 巻末の米国公立高校交換留学出願書
- 2 中学1年以降の「通知表のコピー」または「成績証明書」
- 3 出願料20,000円

※出願料は、いかなる場合でも返金できません。

出願書提出先

〒890-0056 鹿児島市下荒田3丁目16番19号
株式会社 南日本カルチャーセンター
電話 099-257-4333 (代表)

出願料20,000円は現金書留か、下記口座にご送金ください。

振込先

三井住友銀行	鹿児島支店	普通口座	828282
南日本銀行	本 店	普通口座	230800
鹿児島銀行	鴨池支店	普通口座	3138706
肥後銀行	鹿児島支店	普通口座	1055554
沖縄銀行	本 店	普通口座	1278721
郵便振替口座			02010-8-32878

口座名: (株)南日本(ミナミニホン)カルチャーセンター

※振込の際は**参加者名**で送金してください。

☐出願からカウンセリングまで

「出願書」「通知表のコピー(成績証明書)」「出願料」が到着後、センターから「アセスメントテスト」「保護者用と生徒用の質問書」「身上調書」「留学適正試験」「英文音読試験原稿」「英文自己紹介記入用紙」が送られてきます。送られてきた書類を全て記入後、センターに送り返してください。また、センター職員が電話で、英文音読試験と英語インタビューを行います。出願書類を含む、それら全ての書類とインタビュー結果を元に、センターで留学成功の可能性の判定を行います。もし、この時点でセンターが、判定のために、さらにカウンセリングが必要と判断した場合は、センターから連絡を取り、センター職員が自宅に家庭訪問して、保護者、生徒同席の上、約3時間のカウンセリングを行います。センター職員は、生徒に関するレポートを作成し、出願時点での留学成功の可能性を、カウンセラーとして客観的に判定します。

☐留学成功の可能性の審査・判定

センターは、出願書を含む全ての提出書類とインタビュー結果、また、中学一年次からの学業成績と欠席日数や、出願時期などを総合的に踏まえ、出願者が高校留学を果たして成し遂げられるかどうか、出願時点での留学成功の可能性を、センターの長年の経験から審査し、判定結果を6段階で通知します。その通知を受け、出願者は、留学準備を進めるかの決定を行います。ただし、一番低い判定を受けた出願者は、留学準備を進めることはできません。なお、ここで通知するセンターの判定数値は、あくまでも出願時点のもので、留学準備を進めていく過程で、その数値は、上がったり、下がったりするものです。つまり、今後の出願者の努力次第で、留学成功の可能性は高めることができるということです。

☐事前学習終了の義務と英語学習

生徒は、センターから与えられる事前学習を、定められた一定の期間内に提出し、終了しなければいけません。また、いかなる判定を受けた場合でも、出発までにELTiSのスコア212点以上まで英語力を向上させることが、必須条件です。センターの判定結果に、出願時点の英語力は大きく反映されていません。なぜなら、センターでは、意欲のある生徒が規定以上の英語力を得られるよう、英語学習の指導を徹底するからです。また、オリエンテーションで行われる授業で指摘された内容や事柄や情報を理解し、さらに与えられた課題を終了しなければなりません。これらの事前学習段階で、怠惰であったり、オリエンテーションでの学習成果内容が大変低いものであったりすると、段階的な手順を踏みながら、最終的にはセンターの判断により、参加を取り消されることがあります。

☐参加費用の支払

留学生参加費用は、現金で支払う方法とローンを組む方法があります。現金でお支払される場合は、判定後、10日以内に参加費用の一部、残りは、3月10日までに納入してください。ローンを組まれる場合は、クレジット会社よりお近くの銀行等の教育ローンを利用された方が、はるかに安い金利で借り入れできます。ローンを組まれる場合は、1月下旬までに手続きを完了してください。

☒ 出願、審査、出発、帰国、復学まで

出願から、審査、出発、帰国、復学までの大まかな手順は、下記の通りです。

1 出願

出願に必要な書類等をセンターに提出する。しばらくすると、センターから英語力を判断するアセスメントテスト、質問書や身上調書、留学適性試験などが送付される。

2 「アセスメントテスト」「質問書」「身上調書」などの提出書類の記入と英語インタビュー

センターから届いた書類を全て記入して、センターへ提出する。また、電話による英文音読試験と、英語インタビューの実施。

3 カウンセリング（センターが必要と判断した場合）

センター職員から連絡をとり、カウンセリングの日程を決める。指定された日時にセンター職員が自宅にお伺いし、保護者、生徒同席の上、カウンセリングを行う。カウンセリング終了後、担当職員が生徒に関するレポートを作成する。

4 判定結果の通知

審査後、出願時点での留学成功の可能性の判定結果がセンターから通知される。

5 参加費用の納入と同意書の提出

判定結果を受け、留学準備を進める場合は、10日以内に参加費用の一部を入金する。また、通知に同封されている同意書をセンターへ提出する。

6 日本の在籍校への連絡

同意書をセンターへ提出後、在籍している中学校・高校へ、米国公立高校交換留学に出願し、留学準備を開始する旨を連絡する。

7 事前学習の開始

8 保護者同伴オリエンテーション

生徒、保護者同席の上、1日間、オリエンテーションが行われる。なお、全員参加が原則だが、出席できない参加者は、本オリエンテーションを録音したCDを聞き、資料を精読いただき、条件つきで、オリエンテーションの出席にかえることができる。

9 留学用正式書類の提出

生徒は留学先へ提出する正式書類を提出。

10 冬のオリエンテーション

2泊3日で生徒だけを対象に開かれる。

11 参加費用の残金の納入

3月10日までに費用の残金を納入する。また、留学事前講座の受講者は、4月末までに留学事前講座受講費用を納入する。

12 春の1次オリエンテーション

春休み期間中、5泊6日で生徒だけを対象に開かれる。

13 春の2次オリエンテーション

2泊3日で生徒だけを対象に開かれる。

14 ビザ申請

旅券の取得後、交流訪問者（J-1）ビザの申請、取得。

15 日本の在籍高校への留学手続き

在籍高校へ正式な届け出を提出する。（留学届、休学届等）

16 受入家庭、留学先高校の決定

留学事前講座を受講する生徒は、出発が7月中旬と、通常より早くなるので、留学先高校の決定はこの講座期間中ということもある。

17 出発

8月下旬に出発するが、留学事前講座を受講する生徒は、7月中旬頃になる。

18 留学事前講座

この講座を受講する生徒のみ。

19 高校留学期間

8月下旬から翌年6月中旬ごろまで。

20 帰国後の再適応オリエンテーション

日本に帰国後、1泊2日で生徒だけを対象に開かれる。

21 日本の在籍高校への復学

保護者同伴の上で在籍高校へ行き、帰国の報告と復学手続きをする。

審査・判定とカウンセリング

センターでは、成績が優秀だとか、英語力のあることを、判定の要因としているわけではありません。出願時には成績や英語力が平均的であっても、留学への強い意志がある生徒を出発までに、センターで「育てていく」という姿勢を持っています。つまり、英語に自信がなくても、留学に対して確かな目標を持っていたり、アメリカ人との文化交流に情熱を持っていたり、アメリカ文化を学ぶ強い気持ちを持っていたり、留学適性が抜群であるなどの、生徒の意思や人格的なものも重視しております。さらには、特筆すべき特技の持ち主とか、何かに抜きん出た才能を持っているなどの、留学希望者の個性や才能が審査の際の大きな要因となり、高い判定をすることもあります。センターが、生徒に対して事前学習やオリエンテーションを多すぎるほど準備しているのも、この「育てる」という理念の方法論の一つなのです。高い判定を受けた生徒であっても、センターの事前学習やオリエンテーションなどでの指導なしに、出発できる生徒はいません。センターでは、留学が成功するように、出発まで徹底的に生徒を指導してまいります。

1. 留学成功の可能性の審査・判定

本プログラムには、「参加資格」があります。その資格を満たして、更に出願後に提出していただく書類、電話による英語インタビュー、また、中学一年次からの学業成績と欠席日数や、出願時期などを総合的に踏まえ、出願者が高校留学を果たして成し遂げられるかどうか、出願時点での留学成功の可能性を、センターの長年の経験から審査・判定します。判定は下記の6段階で通知されます。出願者は、その通知を受け、留学準備を進めるかの決定を行います。もちろん、決定にあたって、センターも相談に乗ります。ただし、45%以下の判定を受けた場合は、留学準備を進めることはできません。

留学成功の可能性	判定と目安
85%～95%	S判定・・・成功圏 安心して留学準備を進めてください。
75%～85%	A判定・・・安全圏 特に心配することはありませんが、努力を怠ってはいけません。
65%～75%	B判定・・・標準圏 平均的な高校留学の出願者です。努力すれば大丈夫でしょう。
55%～65%	C判定・・・努力圏 相当な覚悟を持って臨めば、可能性はあります。
45%～55%	D判定・・・挑戦圏 挑戦してもいいのですが、リスクがあることを承知してください。
45%以下	F判定・・・不合格 今期の高校留学の参加は難しいでしょう。

2. カウンセリング

審査・判定を行う際、センター職員が出願者や保護者と実際にお会いして、話をした上で判定した方が良いと判断した場合、センターではカウンセリングという方法をとります。このカウンセリングは、センター職員がご自宅にお伺いして、保護者、生徒同席のもと、約3時間かけて行われます。センター職員が、カウンセリングを行うことで、書類上では現れない出願者の個性や性格、人間性などを知り、その上で、判定を行います。なお、センターがカウンセリングが必要と判断した場合は、全国どの地域にお住まいの出願者の元へもお伺いします。

ELTiS (英語力)

米国国務省は、世界中から留学生を自国に招聘するにあたり、当然ながら英語力の規定を設けています。この留学プログラムに参加する留学生に必要な英語力の条件として、ELTiSという英語実力判断試験のスコア212点以上の取得が定められています。2014年までは、英語力判定にSLEP TESTという試験が用いられ、スコア45点以上の取得が求められていましたが、2015年よりELTiSに変更になりました。ELTiSは、文法や語彙、長文読解問題などに加え、数学の計算問題や、統計グラフを読み取る問題など、従来のSLEP TESTに比べると、アメリカの高校の授業を想定した、より実践的な英語運用能力を問う内容となっています。ELTiS212点は、SLEP TEST45点と同等のレベルとテストの発行元は公表していますが、センターは、問題形式に馴染みのない日本の学生がELTiSで212点を取得するには、SLEP TEST48点から50点程度の英語力が必要だと、過去の参加者のデータから認識しています。

センターでは、SLEP TESTを定期的 to 実施し、英語力を判定しながら、センター独自の事前学習を通して英語学習の指導をします。留意していただきたいことは、212点は留学生に必要な英語力の必要最低条件であり、それを達成することが目的ではなく、できるだけ高いスコアを出して出発して欲しいということです。早く出願すれば、早くから事前学習に取り組むことができ、それだけ英語力向上が期待できます。また、冬のオリエンテーションまでに行われるSLEP TESTの結果が50点未満、またはELTiSの結果が212点未満だった場合は、そこで留学を断念するか、7月中旬から始まる留学事前講座中にELTiS212点以上をクリアする必要があります。

留学事前講座

留学事前講座の目的

ELTiSで212点を取れずに、留学事前講座を受講する人は、単に受講するだけでなく、英語力を向上させなければならぬという義務があります。この講座の大きな目的は、英語力をつけることがすべてです。留学事前講座後半にELTiSが実施され、米国公益教育法人より、受講者全員が、スコア212点以上の結果を出すことが求められます。当然、留学事前講座を受講する生徒は、センターでその可能性があると判断しているからこそ、その講座を受講した後、高校に在籍する予定で、日本を出国する前に交換留学のビザを、アメリカ領事館から取得しております。そして、アメリカ入国の際にも1年間の滞在期間を得て入国します。しかし、1カ月間の期間中、英語力を伸ばすことに本人が怠惰になったり、遊んだり、楽しんだりすることに興味の対象が向いたり、不適切な言動や問題行動が散見された場合や、英語力が全く向上していないと担当の講師に判断された場合は、留学事前講座を終了することなく帰国することも起こり得ます。この事を肝に銘じて、この講座を終了して欲しいと思います。

事前講座中のカウンセリング

渡米後、多くの留学生が、留学初期段階に見られる異文化不適應状態や、言葉の不自由さから始まる焦り、これから始まる高校留学への不安や疑問、その他の様々な問題を抱えます。事前講座の期間中、これら留学生の悩みや問題など、e-mailなどでサポートを行います。

講座内容

授業内容は、1日5時間、月曜日から金曜日まで週5日、週25時間です。授業内容は、英語の「話す」「聞く」「書く」「読む」を中心に進められます。英語の授業以外に、高校に入学した後のことを考慮したトレーニング、及び説明が随所に組み込まれたカリキュラムを用意しています。授業以外にも、期間中は色々な行事や活動が行われます。この講座の目的は、「英語能力の向上」と「米国高校の入学後の詳細な説明」にあります。

留学生が授業を受ける施設は、地域の公共施設、学校などが使われ、同地区の一般家庭に滞在することになります。この留学事前講座の終了後、違う地域の学校とホストファミリーのところに移動します。

先輩からの便り

「自分の未来を広げる可能性に満ち溢れた一步」

第25期生 平林 聡一郎



留学する理由なんてカッコつけなくて大丈夫。留学のきっかけは、どんなことだっていいと僕は思っています。世界に挑戦してみたい、違う環境で生活したい、今の学校生活から逃げ出したい、海外の友達を作りたい、現地のダンスとバトルしたい。どんなきっかけでも、大切なのは今、もう既にあなたがこのパンフレットに目を通していているということ。自分の未来の可能性を少しずつ広げているということ。

一步を踏み出し始めたあなたに、MNCCはきっと寄り添ってくれると思います。私自身、MNCCとの出会いに尊い可能性と未来をもらえました。実は、私の留学のきっかけは正直あまりポジティブなものではなく今の環境を変えたい、というような意識でした。小さなコミュニティで息苦しくなって不登校の時期もあり、地元宮崎から飛び出してテレビで観るような華やかな海外に行きたい！関わる人たちの幅を広げたい！と。新しい環境は自分自身を新しく形成していきます。

私は、もともとあまり英語は得意ではなかったですが、いくまでの時間や、留学中はとにかく本を読んで、英語で日記をつけてを繰り返して語学力を上げる努力もしました。しかしながら、語学力が上がることも大事ですが、もっと大きな3つの学べたことを紹介したいと思います。

1. 自分で考え行動する

留学しようかな、と思っただけでパンフレットを読んだ瞬間から、留学中の1つ1つの授業や課外活動へ参加、滞在中の時間の使い方、帰国後の大学進学や就職、結婚など人生は選択の連続です。周り合わせて過ごす方がずっと楽だし、何と無く楽しいとも思います。でも、踏み出す皆さんの未来はもっと自由にグローバルなはず。今世界に飛び出すからこそ、もっと選択肢が広がっていくはず。大学生になってからでは勿体無い。今から自分で考え行動していくことで、かけがえのない体験ができると信じています。

2. 多様性を知る

今の時代、狭い考え方の中で生きる必要なんてどこにもありません。今の環境が全てではありません。外に目を向ければ、自分と似たような考えの人や、全く別視点を持った人、気づきをくれる人に溢れています。自分が輝く場所を見つけ、自分を磨いてください。大丈夫、世界は本当に広い。なんだってできるはず。

3. 「縁」と「タイミング」を大切に

3つの中で、僕はこれが一番大きな学びでした。なんでMNCCだったのか、きっかけは正直覚えていません。でも、ここで出会えた仲間や先生、ステイ先のホストファミリー、現地の学校の友達。皆が今の自分を作ってくれています。縁あって出会う方々に支えてもらい「今」があります。そして、チャンスがあるなら「このタイミング」で行くことに意味があると思います。パンフレットを通してですが、私はこうやって次世代のMNCC生と出会えたことも本当に嬉しいですね！

振り返った時に、「ああ、あの時に行つてよかったな」と思えるような人生にすればいい。英語が話せなくて失敗した！なんて、後から笑い話にすればいい。一瞬一瞬を全力で生きる10代を過ごしてください。最後まで読んであなたはきっとMNCC生になるんじゃないかなと僕は思っています。何故なら、留学したことを後悔するような人生を歩まない、自分で未来を輝かせる人だと僕はあなたを信じているから。

受 入 体 制

☐本留学の運営と構成

この米国公立高校交換留学は、南日本カルチャーセンターとアメリカの公益教育法人という、日本と米国の全く異なる2つの組織によって構成され、運営されているプログラムです。ですから、基本的には期間中の高校留学そのものは、米国公益教育法人が実施する独立した正規の交換留学制度であり、センターが公立高校交換留学を直接提供しているわけではありません。

何故このような実施形態が発生するかといいますと、世界からやってくる様々な国の留学生は、それぞれに本国の実状と環境が異なり、米国公益教育法人によって留学生のそれらを掌握するには行き届かない現実的側面が発生するからです。例えば、この交換留学プログラムに参加するにあたり、日本出発までに準備しなければならない様々な作業が、数多くあります。それら日本での作業を、米国公益教育法人も指導することはできますが、きめ細かに指導するには、当然無理があります。そこで、米国公益教育法人に代わり、日本でのそれらの業務をセンターが専門的に担当しているわけです。ですから、通常の高校留学プログラムと異なり、日本サイドでの作業が綿密に、数多く用意されているのもそのような背景があるのです。ということは、センターの管理下で参加者は日本では指導を受けていきますが、米国に入国してから帰国のために出国するまでは、米国公益教育法人の管理下に参加者は入ることになります。

具体的にセンターでは、日本における留学生の募集、出願から選考までの作業、英語指導やオリエンテーションの実施や高校提出用英文書類作成の指導、日本の在籍高校への情報提供、交流訪問者ビザ取得や米国の渡航手続き、また、留学期間中の保護者への対応を担当します。そして、米国に入国して約1年後に米国を出国するまでの米国での身元引受人は米国公益教育法人であり、ホストファミリーの決定や学校選定、さらに留学期間中に米国で発生するすべての問題に対する処理と対応は、米国公益教育法人が担当していきます。もちろん留学期間中はセンターと米国公益教育法人が密接に連絡を取り合い、適宜、判断、決定しながら運営されています。

☐アメリカの受入教育機関

本留学制度の米国受入機関は、アメリカ合衆国により認可された、非課税組織の非営利教育プログラムの一部門として、米国政府の認可のもとに運営されている組織です。

また、米国政府が入国を招待するという意味を持つ「交流訪問者（J-1）ビザ」に必要な書類を発行する権限を持つ組織として米国国務省より認可された教育法人です。このプログラムに参加する学生は、このJ-1ビザを申請する事ができます。

留学滞在先には、地域ごとに経験豊かな Academic Coordinator (AC)、Academic Program Admin-

istrator (APA) がおり、受け入れ家庭と生徒が有意義な10カ月間が過ごせるようにお世話します。APAとは、ステイ地域の責任者であり、本留学制度に理解ある方で、国際教育に幅広い経験を持っています。ステイ地域のACを育成、監督し、緊急時やACが1人で処理しきれない事態が発生した場合には、ACと共に直接、留学生のアドバイス、指導にあたります。ACとは、留学生の直属のカウンセラーです。留学生とホストファミリーとの間に問題が生じた場合や、学校、友人などとの問題等、家庭生活や、学校生活についての悩みの相談、問題解決にあたります。ACは、いわば、留学生とホストファミリーとのパイプ役ですので常に心を開いて相談してください。

☐ホストファミリーの選考と受け入れ高校の留学手続きについて

受け入れ家庭（ホストファミリー）、学校の決定は、地域の担当ACにより成されます。ACは、生徒が提出した正式書類にもとづき手続きを行います。ホストファミリーについては、生徒の性格、興味等を考慮し、本留学プログラム制度に賛同し、協力してくださるファミリーの中から、選考し、交渉し、決定します。そして、ホストファミリー、学校の決定は、米国公益教育法人のACに一任されており、参加者の意向、希望により、受け入れ家庭、学校を希望、指定する事はできません。但し、以前ホームステイプログラム等に参加した事のある生徒で、ホストファミリーとの話し合いが成されている場合は、それが優先される場合もあります。

☐現地業務体制

ACは、毎月少なくとも1回、それぞれの留学生に電話による連絡を取ります。また、ACは、期間中（10カ月間）に学校または、家庭への訪問数回が義務付けられています。もちろん、留学生により悩みの相談を受けた場合、問題が生じたり、緊急事態が生じた場合は、それに応じて、問題解決に対処できるような体制になっています。また、AC、APAは、月に1回留学生のホストファミリーとの家庭生活、学校生活における向上度をチェックして、月間レポートを作成し、センターに報告しています。

現地で発生した問題は、当事者間の話し合いによって解決するのが常とされています。APA、ACは、リアルタイムで留学生に対応しておりますが、日本との時差や、情報の混乱を避けるため、恒常的な組織の情報伝達経路がある関係上、センターへの連絡には、多少時間を要します。但し、現地が緊急と判断し、センターに直接の指導を求める場合は、電話で留学生と連絡を取り合う事もあります。また、日本のご両親への報告、お世話は、センターが連絡の窓口となります。

留学期間中のセンターの業務

☐留学期間中のセンターと保護者

先述されているように、留学期間中のセンターの主な仕事は、留学生の保護者の日本側窓口となることです。

1年近く留学生は日本を離れて生活するわけですから、期間中に様々な問題や心配事が発生します。これらの問題を抱えた留学生と日本にいる保護者は、一定の距離を保つ必要があります。留学生の悩みが、保護者の悩みと同じであったり、留学生の抱える問題が、保護者の抱える問題と同じであってははいけません。保護者は、当然、本プログラムの趣旨と内容を理解していただかなければなりません。そのために、保護者用の資料をお渡しし、保護者同伴のオリエンテーションを実施するわけです。参加者が事前に学習し、異文化や英語学習において理解を深めるのと同じように、保護者も特に異文化に関する理解を深めてもらわなければなりません。

時として、留学生が離れたところに住み、トラブルを抱え、悩み続けている時、その距離感からか、保護者が日本でパニックになることがあります。すなわち、子どもに対して何もすることができないもどかしさ、無力感、いらだちが保護者をパニックにさせます。そして、保護者の勝手な判断と突飛な言動、また、留学生への不適切な助言などが、益々、留学生の抱えたトラブルを拡散、拡大化させていきます。

留学生にとって適切な助言とは何か。最も遠くにいながらも、最も身近な存在である保護者がどう判断し、どう行動し、彼らの問題を支えていくかということは、彼らの留学の成否を握る大きな要素でもあります。適切な判断をするためにも、期間中、常にセンターが保護者の相談口となり、適切なアドバイスをさせていただきます。

☐センターの業務

このプログラムの参加当事者は、当然生徒本人であり、保護者でもなければ、センタースタッフでもなく、米国公益教育法人職員やコーディネーター、高校の先生でもありません。これらの方々は、生徒の周囲でお世話する方々です。ですから、基本的に、生徒が日本を出発して米国に行きますと、プログラムの現場は米国に移ってしまいます。出発までは、生徒は日本に居り、センタースタッフは生徒のために、事前学習を始めとするあらゆるお世話をすることができますが、一旦、日本を離れてしまえば、それまで日本でお世話したセンタースタッフは、直接は生徒に対しては何もすることができなくなり、センターに代わり、米国公益教育法人のコーディネーターが生徒のお世話を直接的にすることになるわけです。ですから、現場の責任者であるコーディネーターが、生徒に関する指導者として生徒に関与し、判断し、決定していきます。そして、この留学期間中における日本でのセンターの仕事は、主に米国公益教育法人本部との折衝とコーディネーターへの助言です。そして、保護者への業務連絡を現地との間に立って行います。このように、生徒が米国に行った時点で、業務が全く逆になる

ことがご理解いただけると思います。

このような業務の分担の中で、センターが期間中に具体的にを行う業務は、下記のようなものがあげられます。

☐アカデミックレポート

アカデミックレポートは次の2つからなります。「ACレポート」と「スチューデントレポート」です。ACレポートは、月1回、生徒の担当コーディネーターが留学生、ホストファミリーとの生活、学校生活における向上度を生徒とホストファミリーに意見を聞きながら、客観的に評価し、報告するものです。このレポートは米国公益教育法人本部を通してセンターへ送られてきます。センターはそれを日本語に訳して、保護者に送付しています。スチューデントレポートは、生徒自身によって、任意に書かれるものです。毎日の日記形式になっているものと、月末に学校生活と家庭生活について書いてもらうものがあります。これもACレポートと同様、コピーして保護者に送付されます。このレポートは、生徒の日常の行動や反省を記録するものになります。これらのレポートにより、センターでは、具体的な問題となつて現れない生徒の悩みを早期発見し、現地に連絡し、早期解決する材料としていきます。さらには、帰国後、生徒にとっては自らの留学を振り返るものとなると思います。また、スチューデントレポートについては、センターの方からコピーを学校の方に送付します。

☐留学期間中のサポート

留学期間中は、不慣れな英語での生活のため極端に情報が不足してきます。我々は母国語による情報収集にあまりにも慣らされているため、情報収集量の絶対的な不足が決定的な判断ミスに繋がるということをほとんど認識していません。日本では何気なく過ごしていても、学校で、家庭で様々な情報が入ってくるわけですが、留学中は、学校でも家庭でも、通常日本で入ってくる情報量の5パーセント程度しかありません。それも、時には日系人からのものであったり、同じ日本人留学生からのものであったりします。さらに、その情報源は伝聞によるものが多かったりするのです。

センターでは留学中に起きてくるこのような情報の不足を補うために、e-mailなどを通して、情報提供が行われるようにしております。留学している10カ月間には、留学生はさまざまな悩みを抱えたり、疑問を感じたりすることが、必ず起こります。その際にも、センター担当者がe-mailなどによって、留学生の悩みや相談事などのカウンセリングを行っています。センター担当者が留学生と細やかにコミュニケーションを図ることで、留学生が抱えている問題を解決する方法や考え方を指導し、その結果、問題が大きくなるのを未然に防いだり、解決できる手助けをしています。

☐ホストファミリー

本交換留学制度の参加者は、一般のアメリカ人家庭（ホストファミリー）に滞在し、家族の一員として生活を共にします。ホストファミリーは、本留学制度の趣旨に賛同し、協力して下さる方々でAC（アカデミック・コーディネーター）を通じて選ばれています。ホストファミリーの決定は、厳正な審査のもと行われますが、その際、彼らの経済力、家族構成、婚姻形態、年齢、人種、民族、宗教などは、ほとんど考慮されていません。1番重視されているのは、彼らがいかに本留学の制度の趣旨を理解し、熱意と愛情を持って留学生を受け入れようとしているかです。

もし、皆さんが「ホストファミリーは、ご夫婦で子どもさんがいて、普通より少し大きい家で…」と想像されるなら、もう既に身勝手な憶測が始まっています。お世話くださる家庭は様々です。定年退職された子どものない老夫婦の家庭、ご主人がいない家庭、ご夫婦と幼い子どものいる家庭など、家族構成や生活環境は千差万別です。しかしながら、彼らは、皆さんをボランティア（無償）でお世話して下さいます。ですから、彼らとの家庭生活の中では、ステイさせて頂いている事に感謝し、彼らの気持ちを踏みにじる事のないように「自分は、彼らの為に何ができるか」という視点で考え行動して下さい。何故ボランティアを行うのか不思議に思われるでしょうが、彼らが留学生を引き受ける動機として次のようなものが上げられます。「留学生を通して日本の文化を学びたい」とか、「自分の子供達に国際的な感覚を身につけさせたい」、「外国人留学生にアメリカの家庭を学ぶ機会を与えたい」等が一般的です。また、アメリカ社会では、ボランティア活動を通して何か社会に貢献しようとする精神があります。ホストファミリーになる事もその表れと言えます。

アメリカは、「人種のるつぼ」と言われるほど、いろいろな人種、言語、宗教が混在しています。アメリカ合衆国憲法、カリフォルニア州法により、人種、皮膚の色、宗教などを理由に差別する事は禁じられています。皆さんのホストファミリーも留学生を受け入れるホストファミリーとして適切である限り、上記の点を理由として差別をしません。社会組織の最小単位である家族は、その社会全体の事柄を良くも悪くも反映しています。皆さんは、ホストファミリーと生活を共にすることにより、アメリカ社会をより深く知ることができると思います。

日本とアメリカでは、家庭における考え方には大きな違いがあります。それらを認識した上でアメリカの生活

をスタートしてください。まず、皆さんに注意して欲しいことはその家族の一員になりきることです。これが家庭生活を円滑に行う上で最も重要なことです。アメリカ人は、子供に対する考え方が日本人とは、異なっています。日本の家庭では、子ども中心の家庭が営まれて、過保護に育てられる為、子どもの親に対する依存心は高く、その結果、親離れ、子離れができにくく、子どもの自立心も育ちにくい傾向があります。一方、アメリカの家庭では、子どもに対するしつけには、厳しいものがあり、幼少時より一個人として尊重され、自己主張のできる自主独立の教育を目指しています。日本の母親は、たとえ仕事を持っていたり、家庭の全ての家事は、母親の使命と考え、一手に引き受けている場合が多く見られます。しかし、アメリカでは、母親は、仕事を持つ他、自分の生きがい、自分自身を向上させる為に、大学に戻って授業を受けたり、ボランティア活動に参加する等、家を留守にする事も多々みられます。母親がいない場合は、父親が子ども達の面倒をみたり、家事も家族で分担し、協力しあっています。家族の一員として生活する以上、皆さんも当然協力していく必要があります。日本の生徒は身の回りの事を母親に頼る傾向がありますが、アメリカでは、通用しません。つまり、「自分のことは、自分でする」という事がアメリカでは、大原則となるわけです。このようにアメリカの家庭には、それぞれ「ファミリールール」というものがあります。皆さんもそれを早く知り、また、守らなければなりません。

皆さんが、ホストファミリーを通して、アメリカを学びたいのであれば、様々な活動に参加してください。日曜日には、家族と一緒に教会に行ったり、教会で催される行事に参加したりして積極的に行動する事です。ホストファミリーは、皆さん方を通して、日本の国・家庭生活・習慣等多くの事について知りたがっているわけですから、皆さんもそれに応えられるようにしてください。何事にも積極的にトライすることによってホストファミリーとのより一層の深い絆が生まれると共に、アメリカの生活習慣、文化、若者の行動、考え方などが様々な体験によって得られるはずです。

日本の親元を離れ、異なる文化、言語を持つ国の人々と一緒に1年間過ごす事は、大変な事だと思いますが、事前にセンターからの研修で学んだ事を活かしながら、人間の成長を遂げ、さらに、アメリカ、アメリカ人との相互理解を深めていけるのが、このプログラムの良さと言えます。

学 校 生 活

☒ アメリカの教育制度

アメリカの教育ほど「多様」という言葉があてはまるところはありません。アメリカは州によって法律が違うので、教育のシステムも各州ごとに異なっております。また、同一州でも各教育エリアが細かく分かれており、それぞれの地域に教育委員会が設けられ、その細分化された教育システムが決められ、運営されています。例えば学制は、全国的に決まったプラン等というものがなく、6・3・3制や6・2・4制、また、8・4制のところもあります。また授業も日本のように画一的、統一的な指導要領、方法ではなく、生徒が希望する進路に基づいて教育するといった内容になります。アメリカの教育に対するコンセプトは、できるだけ個人の個性を尊重すること、将来の職業に役立つ教育を重んじる事の2つを柱にしています。ゆえに豊富な選択科目が揃っているので自分の能力や将来の計画を考慮しながら、何を選ぶのかを決定します。アメリカでは、高校までが義務教育であり、各公立高校の運営は、それぞれの校区に住む地域住民の税金によって賄われています。教科書も学校からの貸与制となっています。したがって交換留学生は、アメリカの一般家庭に滞在し、彼らが税金を支払う地域の公立高校に通うことになります。

☒ アメリカの高校生活

アメリカの高校は、一般的に9月から1月までと、2月から6月までの2学期制を取っています。授業は、週5日制で8:00~15:00頃まで、毎日同じ時間割で6~7科目を学びます。日本のようにクラス担任はなく、担当カウンセラーがおり、進路問題や学業成績など様々な方面での悩みや問題について相談にのります。学期始めには、このカウンセラーの助言のもとに、それぞれの能力や進路を考えながら授業登録をしていきます。アメリカの高校では生徒の多様な要求に応える為、英語や数学等でもレベル別にわかれ、家庭科、農業、工業関係のクラス等豊富な教科数(150~200)を用意しています。

日本と違って自分の教室はなく、4~5分間の休み時間内に次の科目の教室へと移動します。また、正課の授業が終わってからの課外活動も盛んに行われています。課外活動は、体育系、文化系のものに分かれ、体育系では、シーズン制で1年間に数種類の課外に参加する事ができます。成績は、定期テストのほか各単元終了ごとの小テスト、レポート提出及び学習態度などを含めて総合的に評価されます。アメリカの高校は、単位制なので第12学年(高校3年生)を修了した者で、卒業認定単位

数を取得し、卒業試験にパスすれば、交換留学生に対しても卒業証書を授与される事も有り得ます。但し、交換留学生の卒業資格取得の規定、及び基準は、州・学区・学校ごとによって若干異なっており、正式な卒業証書ではなく、留学生用の卒業証書を授与する所がほとんどです。

授業科目は、必修科目と選択科目から成ります。一般的に次のようなものがあります。それぞれの学校、学年により必修科目は異なります。

必修科目

- English
- U.S. history
- U.S. government
- Biology
- Chemistry
- Algebra
- Geometry
- Physical Education

選択科目

- Art
- Drama
- Computer
- Crafts
- Dance
- Agriculture
- Electronics
- Photography
- Speech
- Cooking
- Ceramics
- Choir
- Band
- Journalism

☒ アメリカの高校の1日

Period 1	English II	7:35~8:24
” 2	Algebra II	8:29~9:23
Snack time		9:23~9:33
Period 3	U.S. History	9:38~10:27
” 4	Biology	10:32~11:21
” 5	P.E.	11:26~12:15
Lunch		12:15~12:45
Period 6	Band	12:50~13:39
” 7	Keyboarding	13:44~14:33



オリエンテーション感想

■あふれ出る意欲

沖縄県首里高校 仲井間 宗辰

この5泊6日のオリエンテーションの感想といっても、正直、何を書いていいか、この6日で色々学びすぎてわかりません。でも、自分が勘違いをしていた所、ノーマークだった所、このオリエンテーションを受けなかったら考えもしなかった所を学び、そして改善する事ができたので、本当に安心したし、感謝しています。そしてSLEPの結果から、class participationを自分がいかに出来ていなかったかを痛感し、今では勉強をしたい意欲があふれ出てきそうです。オリエンテーションは本当に大事だと思います。これから絶対続けたい方がいいと思います。私は自由研修の討論で、最初、絶対この人が悪いと思っていたものが、反対側の意見を聞いてみると、「あはあ〜そういう見方もあるのか。」と感心もしたし、人を色々な角度から冷静に見ることで、問題も起きにくくなっていくし、ステレオタイプで物事を考えることの浅はかさなどを学びました。

■オリエンテーションの大切さを実感

熊本県人吉高校 椎葉 響

オリエンテーションはかなりためになるもので、参加することの大切さが身に染みてよく分かりました。オリエンテーションの大切さとして感じたものは、あの難解なケーススタディや自由研修を解答した時点では、恐ろしいほどの誤解が生まれている、ということ。今、オリエンテーションを終えて、昔の自分の考えを見返すと、ゾクッとすることがかなりあります。オリエンテーションに感謝するばかりです。同期の中で男は自分一人なので、仲良くなれるか心配は少しありましたが、皆とは気が合い、とても楽しかったです。やはり、似た目標を持つ仲間というのは、良い環境を作るうえで不可欠だと改めて感じました。

■目的を共有する同期の人に感謝

鹿児島県志学館高等部 坂口 まこ

このオリエンテーションに参加する前、冬のオリエンテーションの3日間ですでに出会った35期の人たちと再会できる楽しさと、色々な心配から来る不安の両方がありました。でも、駅に着くと久しぶりに会って、とてもハッピーな気持ちになりました。それから6日間はとても大変でした。日米の違いや高校生活について、そして、英単語や慣用語表現のテスト、ELTiSやSLEPなどたくさんを学習しました。日が経つにつれて疲れてきて、すぐ眠くなる時もありました。でも、もし他の会社で留学に行こうとしたら、何も勉強しないで行くということを考えると、本当にMNCCに申し込んで良かったなあと感じました。アメリカ生活でのマナーとかは、このオリエンテーションが無ければ、知らないものばかりでした。この6日間、学んだこと全てが大切だったと思います。しかし、一人では無理だったと思います。35期の人たちと一緒にだから、無事に乗り越えられました。また、ご飯の時とかは、とっても笑いが絶えませんでした。

■意見の発言と共有

沖縄県名護高校 上里 凌子

春のオリエンテーションでは、冬のオリエンテーションよりも発言しよう、行動しようという研修に参加したのですが、冬のオリエンテーションの時よりもメンバーの雰囲気が変わっていて、皆も同じ気持ちで来たんだと実感しました。実際、ケーススタディや自由研修では皆が手を挙げたり、自分の意見を言っていて、すごく楽しく感じました。また、ケーススタディでは、自分の意見を言うだけでなく、他の人の意見も聞いて、「なるほど!」と思ったりして、共有できたことは、今後の留学生活で活用できそうです。自由研修では、あまり学校では出来ないディベートができ、最初はど話そうかと考えていたけど、だんだん慣れてきて、自由研修は本当におもしろかったです。

■留学へ向けての心構えができた

佐賀県佐賀清和高校 田浦 龍之介

アメリカと日本の両文化において、双方を理解することの難しさを感じた。相互理解の時間において、アメリカ人がなぜ日本文化になじむことができないのかを考えてみることで、どれほど自分に日本的思考が染み込んでいるかが分かり、アメリカ的思考も知ることができた。行く前は、パンフレットなどでどんなものか考えていたが、意外に楽しく活動できたし、留学へ向けての心構えをすることができたと思う。

■留学のリアリティを実感し、成長した

宮崎県宮崎大宮高校 柿崎 未来

オリエンテーションを終えて、今感じる事は、自己改革を経て、ずいぶん成長した自分になったのではないかとことだ。ここへ来るまでは、まだ留学するというリアリティのなさから来る甘えがあった。学校の勉強や部活、生徒会、塾などの忙しい毎日をこなしていくことで精一杯だった。しかし、オリエンテーションへ来て、出発までの時間は、あまり多くは残されていないにもかかわらず、やるべきことが山のようにあることを気づかされた。英語の学習はもちろんのこと、アメリカでの日常生活のことや日本とアメリカの様々なちがいがなどだ。特に日本人とアメリカ人の根本的な考え方や価値観の違いを理解する事は、17年間日本で生きてきた私にとって簡単な事ではなかった。でも仲間と一緒に考え、話し合うことで深まっていったのではないと思う。今回学んだ事はしっかりと定着させ、また見つけた課題をしっかりと解決できるように、宮崎にもどっても先を見すえて努力していこうと思う。また、同じ目標を持って共に研修を乗り越えた仲間感謝したい。

■理解し、質問し、発言する

鹿児島県鳳凰高校 福永 椰々子

長いようであつという間のオリエンテーションでした。私は今回のオリエンテーションに参加するにあたって、一つの目標を決めました。それは、思っていることや質問をその場で発言することです。つまり、class participationを目標に参加しました。しかし、質問をするにあたり、そもそも質問がなければ発言することすら不可能であることに気づき、酒井さん、浜田さんの話をよく聞いて理解することから努めました。そうすると自然に発言の量も増え、class participationも向上していきました。SLEPとELTiSでは、酷いスコアを取ってしまい、落胆しかけたが、負けてはいられません。自分がアメリカで困らないためにも、これからは十二分に気合を入れて頑張っていきたい。まず、次のオリエンテーションまでに日々精進していき、納得のいくスコアが出せるように!

■留学に向けてしっかりと準備を

長崎県海星高校 原田 知佳

オリエンテーションは地獄だと先輩達が感想に書いていたの、とても不安でした。でも、この機会に同期の子達と仲良くなれて、とても楽しい時間を過ごせました。勉強時間は長かったけれど、アメリカに行くうえでの知識として、しっかりと学べて有意義な時間を過ごすことができました。毎日のクイズでは、同期の友達と競い合い、夜寝る前にノートを見直したり、少し朝早く起きてみんなで問題を出し合ったりして、合格点以上取れるように頑張りました。スポーツ活動や野外活動では、いい息抜きができました。毎日約10時間勉強して、最終日には開放感がありました。皆で協力合せて、高め合いながら過ごした日々は、長いようで短く感じました。留学に向けてしっかりと準備していきたいです。

■自分を見直すきっかけになった

福岡県筑紫女学園高校 長峯 眞如

オリエンテーションに参加する前は、冬のオリエンテーションの結果から、自分の力がきちんと伸びてきているか心配で、今回のオリエンテーションに参加したくないなと思っていたけど、いざ来てみたら、とてもあつという間の5泊6日でした。同期のみんなと、以前より色々な事に対しての意識を高めることができました。学ぶものが多く、実りあるオリエンテーションになったし、自分の課題を見つけ、これからの自分を見直すきっかけにもなりました。オリエンテーションは終わったけど、同期のみんなが頑張っていると思うと、自分も頑張ろうという気持ちになれるので、私にとって、同期のみんなはとても良い刺激になります。そして、もう出発まで約3ヶ月と考えると、もうすぐだなと実感します。3ヶ月間で、自分の英語力や留学に対しての知識をどれだけ伸ばすかで、留学中の生活も変わってくると思うので、日々努力を続けていきたいです。私はメンタル面が弱く、すぐ落ち込んでしまうところを一番見直したいと思っています。高校2年生になって、学校と留学の事前学習や英語の勉強の両立が、ますます難しくなると思うけど、自分なりに判断をくだし、着実にこなしていくことで、精神的にも、学力的にも成長できればいいと考えています。今回のオリエンテーションで学んだ事を、これからの自分の学習に活かしていき、次のオリエンテーションではより良い結果を出したいです。



■文化交流から学ぶ姿勢

福岡県久留米工業高等専門学校 岩川 翔太

自由時間が全然なくてとてもハードスケジュールだったけど、この8日間はたくさんの貴重な話や、楽しい時間を過ごすことができました。どれも自分のためになるような話や、物事を正しく判断するために必要となる知識ばかりでした。自分が持ってしまいがちな小さな視点からでは相手の立場になって考えることはできないということを、一番思われました。この高校留学の文化交流の中でたくさんのものを学ぶには、そういった固定観念や、偏った視点、考え方は排除すべきだということも学びました。自分がいかに他人に依存し、物事をいろいろな方向から見るができないことを思い知らされる日々でした。

■自己改革することを決意

山口県岩国総合高校 福永 光里

私は、最初の頃オリエンテーション期間を、とてもとても長く感じ、ちゃんとできるかなと不安に思っていました。ここでの授業は、学校での授業と違って、とても興味深いものばかりで、こんなに充実した授業を受けたのは初めてだと思いました。私は、このオリエンテーションがあるMNCCから留学に行けるなんて、とても運が良いなと本当に思いました。小濱さんが、ケーススタディの時に、私たちのために涙を流してくれたのがとても感動でした。ここでの時間は、留学を成功させるためには絶対欠かせないものだったと思います。そして濱田さんは、みんなが質問するのに対して、とても分かりやすく説明してくれたし、濱田さんの言う事はすごく説得力があって、すごいなと思いました。これが自己主張というやつなんだと思いました。このオリエンテーションに来る前のバスの中で、不安に思っていたQuizも、濱田さんが言った事を聞いていたら、点数がとれるようなものだったので、そこまで宿宿が嫌だとも感じませんでした。ここで学んだ事を生かして、今日帰ってから自己改革を行おうと決めました。自主性・自立心・自己主張ができるようになっていきたいです。これからみんなでがんばっていきたいです。私は英語力がないので、英語学習もがんばります。生まれて初めて、1日中勉強し続けた8日間でした。みんなありがとうございました。

■考えさせられた一週間

和歌山県向陽高校 南村 真衣

「オリエンテーションは、辛い。」と聞いていたので、スケジュールを見て、やっていけるのか不安でした。普段全く考えないことを深く考えさせられる一週間でもありました。授業は発言をたくさんして、集中して聞くので、疲れたこともありましたが、すごく面白かったです。「アメリカに行く」ということが、日に日にリアルになってきて、漠然とした不安もだんだん大きくなってきましたが、これからはその不安にしっかり向き合っていこうと思いました。

■自ら発言することの必要性

沖縄県具志川高校 座喜味 日向

オリエンテーションを終えて、もっと英語力を伸ばしていけないといけないと改めて思いました。そして、頭を回転させて、自分から発言することがアメリカでは求められることだと改めて知ったし、このオリエンテーションを終えてからも、学校で実践していきたいと感じました。また、34期生のみんなと授業をしていると、自分自身が頑張らないといけないと思われ、たくさん刺激を受けました。春の2次オリエンテーションまで約1ヶ月半あるので、その間にもオリエンテーションで学んだことを復習し、また英語力もより高められると思うので、頑張っていきたいです。

■相手の立場に立って考えるということ

鹿児島県鳳凰高校 田畑 里緒

初日、5泊6日は長いと感じていたけど、最終日まであったという間だった。アメリカという国について深く学ぶ事ができたし、アメリカの人たちの立場に立って物事を考えるということも学んだ。それはすごく難しかったし、自分にはなかなか理解しがたいものもあった。だけど、それはこれからの留学生活にとっても重要なことなので、自分の意見ばかりを通そうとするのではなく、相手の立場に立って考えるようにしたい。そして、次のオリエンテーションまでに、自立心、自己主張をもっとつけるよう、自己改革をしようと思った。英語力もまだまだ足りないし、ケーススタディで学んだ対応策とかも、英語が出来ないと実践できないので、残りの4ヵ月、精一杯頑張りたい。

■自分の意思を持つこと

福岡県福岡大学附属若葉高校 馬場 芽久

このオリエンテーションは、いろんな人が発言し、意見を述べとても充実していました。自由研修やケーススタディーなど、たくさん発表をする機会がありました。事前学習をしているときは、これを実際に討論できるのかと不安を抱えていましたが、正しいとか、間違えているのではなく、人前でまず発表することの大切さが分かりました。また、自分の考えとは異なる人の意見を聞くことで、すごく刺激をもらいました。日本の学校ではここまで多くの人が発言をしないので、本当にこの経験ができてよかったし、楽しかったです。授業の内容はとても深く、考えさせられる場面が多々ありました。常に自分の意志を持っていることは日本人にとって大変なことだと分かりました。

■明確な形になった不安と焦り

大分県大分上野丘高校 山形 沙希

今回のオリエンテーションで、私は多くの意見を皆に伝えました。今回の研修では全くと言っていいほどできなかったし、普段の学校生活でも、ほとんど発表していませんでした。ですから、私は「成長できた」と自負しています。今まで苦手だった自己主張が、だんだん楽しくなってきました。討論の時が一番意見を言えし、相手が自分の意見を認め、うなずいてくれるのは、とても嬉しく思いました。初日、皆との話し方が分からなかったり、1日中他人と一緒に行動するのがけっこう苦痛だったりしたけど、日が経つにつれ、夜一緒に勉強したり、ご飯食べたり、愚痴を言ってみたり、そういうちょっとしたことを話せる相手がいるって楽しいと感じました。また、このオリエンテーションで、今までぼんやりとしていた「不安」や「焦り」が明確な形を持って実感できました。その点はすごい怖くなって精神的に苦しい時もあったけど、他人の考え方とか勉強を聞いて自分の駄目な部分を知る良い機会でした。

■心に火がついた

宮崎県宮崎大宮高校 林 千菜美

今回の合宿に挑むにあたって、目標を立てていました。それは、class participationを頑張ると言うことです。前は、普段の自分があまり出せず、本当にだめな自分でした。しかし今回は、前回よりはできるようになったと思います。「日本語でできないんだったら、英語でできるはずがない。」という言葉に、本当に納得しました。また、私はもっと努力をして、英語力、特に筆記のほうを伸ばしたい！と、とても強く思いました。お風呂や部屋で、たくさんさんの同期の仲間に、「どうやって、英語勉強してるの？」とか「何を勉強してるの？」など、ずっと聞きまわりました。SLEPテストやELTiSを受けて、自分は本当に英語力がないと思い、もっとせんといかん！と心に火がつけました。「努力すれば、必ず英語力はついてくる。」という、カウンセリング時の言葉で、頑張ろうと思えました。過去は取り戻す事はできないので、これからを一生懸命頑張っていくしかないと思いました。だから、単語力をもっと増やして、高校の文法も勉強し、たくさん努力しようと思えました。

■成長を感じ、自分の現実を知った

鹿児島県鹿児島純心女子高校 栄 夏子

今回のオリエンテーションで、冬のオリエンテーションよりも、はるかに自分が成長したと感じた。冬は積極的になることの難しさ、緊張、はずかしさをまだ残していたが、春では、積極的に授業に参加するclass participationや、分からなかったらその場ですぐに質問することにも慣れ、自主性や自己主張のスキルが上がったと思っている。また、クイズや英語のテストで自分の現実をきちんと知る事も出来た。同期の人たちと協力し、絆も深まったと思う。次の春の二次オリエンテーションまでに、ここで吸収したことを学校でも発揮し、英語はもちろん、精神的にも大きく成長したい。そして留学に行く直前のオリエンテーションは、アメリカに行くことへのリアリティを持って臨もうと思う。

■同志の仲間存在 鹿児島県鶴丸高校 谷口 宗軌

この一週間、本当に様々なことを考えさせられた。留学を志願してから既に一年が経っている。そのための勉強、心の準備、生活のあらゆる場面で準備をしてきたつもりだった。しかし、このオリエンテーションでは、自分の英語力のなさ、自主性、自立心、自己主張の意識のなさを思い知らされた。不安も感じたが、今気付くことができたというプラスの気持ちになった。出発までの3、4ヶ月で自分がここで学んだことをどれだけ生かせるかが一番大事だということも知ったので、是非頑張りたい。また、このオリエンテーションでたくさんの仲間が出来たことも嬉しいことだった。学校では自分だけが留学を志しており、その孤独さとの闘いは計り知れない。しかし、同志の仲間がいることによって、互いに心の支えとなり、安心もしたし、活力にもなった。そんな仲間にも感謝したい。

■自分のテーマを持って臨む高校留学 宮崎県宮崎第一高校 今東 莉彩

今回のオリエンテーションは、前回に比べて、より深く多くのことを学ぶ事ができました。留学の目的は語学ではなく、別の目的をもって臨まなくてはならないと知り、私も何か一つテーマを見つけようと思います。日本と米国の文化には、想像していた以上に多くの違いがあり、普段当り前のことがタブーだったり、気を付けなければいけない事が多くありました。この6日間で多くの知識を得て、漠然としていた留学がさらに現実化し、今の自分に努力がどれほど不足していたかを知る良い機会でした。残り約3カ月、自分を見つめ直して、日々成長して行きたいです。

■留学までの道筋が見えた 鹿児島県加治木高校 大田 真純

今までは学校とセンターの事前学習、習い事の両立が大変で、自分で決めた留学だけど、何度やめようと思ったことかわからないくらいでした。しかし、このオリエンテーションを通して、同じ悩みを分かち合える友達に出会えたことや、今まであまり実感できなかった留学というものが、身近に感じるようになったことで、「頑張ろう」素直にそう思えるようになりました。今までは闇雲に頑張っている感じがしたが、今はもう、自分のやるべき事が分かっています。留学への不安は完全にはなくなりますが、今はそれよりも残りの数ヶ月で自分がどれだけ変わるか、私自身も楽しみです。

■時間の使い方の工夫 沖縄県開邦高校 宇座 しおり

初めは、5泊6日とか無理、きついって思っていたけど、慣れたら意外といけることがわかりました。時間の使い方を工夫したら、いくらでも使える時間が増える事もわかりました。日々の生活において、無駄な時間がいかに多いかと言う事を痛感したので、改めようと思います。また、今まで、あまり現実味を帯びていなかった留学が、一気に現実味を帯びました。残り3ヵ月半で出来ること、やらねばならないことを見極めて、受験勉強と両立しながら英語の勉強も頑張っていこうと思います。それと、みんながアメリカのことについてとても詳しいことに本当に驚きました。せっかく沖縄に住んでいるのだから北谷や普天間に行つて、アメリカの文化にふれようと思います。

■意見を分かりやすく伝えるトレーニングの大切さ 鹿児島県鹿児島第一高校 谷山 あかね

5泊6日は長いようで短かったです。日米比較、ガイダンス、自由研修、ケーススタディなど、ためになる事をたくさん聞けて、ますますアメリカへの留学が楽しみになってきました。家に帰ったら、まずはアメリカの国歌、誓いのことば、God Bless Americaを暗記したいです。そして、しっかりと勉強に取り組もうと思います。アメリカの50州もスラスラ言えるようになりたいです。全ての授業が楽しくて、おもしろくて、すごく好きでした。冬のオリエンテーションでは、手をあげることにはあまりしなかったけど、今回は皆が積極的に手を挙げて、自分の意見を言って、とてもいい雰囲気でした。自分の意見を他人に分かりやすく説明するのは簡単ではないことも知る事ができ、いかにトレーニングが大切かということもわかりました。そして、人として大切な事も学べて、とても意味のある5泊6日にすることができました。

■夢物語が、現実のものに 佐賀県佐賀西高校 式町 美礼

「アメリカ留学」というのは、やはり私たち日本人からすると、非現実的というか、想像もつかない夢物語のように感じます。私も実際、アメリカの高校生活なんてテレビの中の世界だし、果たして自分がそんなところでやっていけるのだろうかとか、漠然とした不安を抱えています。そんな中、このオリエンテーションを通して、留学の辛さであったり、怖さであったりを実際の体験談などから知ることができました。日頃、私たちがどれだけ日本という平和ボケした世界で暮らしているのかを、思い知らされたような気がします。留学初期は、留学生の誰もがぶつかる言語の壁。友達ができなくて一人で昼食をとることになるのかと思うと、ますます不安は募ります。しかし、自分から話さないとも何も変わらない。家に帰ったら、出発までの3ヵ月間はもっともっと英語力をつけよう！とモチベーションがあがりました。オリエンテーションがこんなにしっかりしているのはMNCCくらいだと社長も豪語していましたが、この留学プログラムを選択してよかったと思います。それはきっと現地でも感じるのだと思います。あと3ヶ月、自分のやれるだけのことをして留学に臨みます！

■実践的な学習 大分県日本文理大学附属高校 小寺 望里

学校で学ぶ学業のことだけではなく、実践的で、これからの留学、そして社会に出た時に役立つことを数多く学ぶ事ができたと思います。例えば、ケーススタディ一つをとっても、留学中に起こるトラブル（問題）に、事前に対処法を見つけて、アメリカという異文化の生活に適應するため、様々な視点から、同期のみんなと意見を交わし、class participationの力を付けました。また、自由研修の討論では、客観的に見たり、主観的に見たりして、トラブルの原因となった根源をさぐりながら、日米を相互に理解できる力を付ける事ができました。この6日間は、書ききれないくらいたくさんのことを学び、また野外活動でも、留学に直接的な関わりはないけど、ウォークラリーや天体観測などを通して、「今、していることは決して無駄になることはない」、「いつか、どこかで生かせるときが来る」ということを感じる野外活動でした。5月の研修まで1ヵ月半あるので、それまでに今までは違った自分になれるよう、しっかりと自己改革をして、7月からの留学に備えたいです。

先輩からの便り

第14期生 八汐 満広



私は今オーストラリアで3つの日本料理の店をオープンしています。高校は進学校でしたが、ただ大学に行くことに疑問をもっていました。親父の仕事が寿司屋だったので、小さい頃から実家に帰っては店の手伝いをしていました。そのような環境があったのも助けて、料理と勉強という真反対にあるものはくつつかないかという単純な疑問を考え始めた頃に、米国は合理的だと聞くので米国に行ってみようと思いました。

1年間の留学生活は今でも人生で一番の年であったと思います。夢中であったというのが1年間の感想です。留学は甘いというのと甘くないという、両方だと思います。米国では辛いこともありました。楽しいこともありました。逆に日本がすごいと思ったこともありました。留学後、京都での修行を経て、現在は、バンガラディッシュの人々に日本料理を教えています。根性論も先輩論も通じません。大変だけど、面白いで

す。料理と勉強をつなげた何かをやりたいという高校生の時の夢から、日本料理の職人芸と欧米的な合理経営というカテゴリーに変わり、今でも悩んでいます。オーストラリアで日本料理店をやるにあたって、英語というハンディもあるので非常に苦労しましたが、色々な発見があって面白いです。たった1回りの人生、80年の間に1回くらい死ぬほど苦労してもいいと思います。経験して終わってみたら、世も末だと思うぐらいしんどかったことも、いい思い出になると思います。そしてまた次の挑戦ができます。経験して苦労することができるということはとても楽しいことなので、自分の足で米国に渡って、自分の感想を持ってほしいと思います。

スケジュールレポート

第30期生 安藤 菜見子

8月16日▶ 事前講座終了日だった。もう同期のみんなというのは最後なんだと思って、急に悲しくなった。みんなでWe can do it! って手をつないで叫んで、今までの講座の思い出がいっぱい蘇ってきた。今まで甘えていたと思う。日本語で話してしまったこともあったし、何とんでも落ち着く場所だった。先生に色んなことを教わった。今日を境に、本当の旅が始まるんだと思う。もう誰にも甘えられない。

8月19日▶ 一番のストレス。英語が分からない。というか日常生活の会話が半分も理解できないことにイライラするし、ストレスの原因になっていると思う。シーンとしても、話題が思いつかない。高校のスポーツの申込書を書くときに、ホストマザーの言っていることが分かんなかったし、何の書類かも分からないし、色んなことがあってバスルームで思いっきり泣いた。はあ、リスニング力が欲しい。

8月26日▶ 水泳チームの練習が始まった。一人だけでも自己紹介するつもりだったけど、みんな自己紹介することになって、ちゃんと留学生ってことをアピールできた。私はもっと話すべきだったと思うけど、言うことが思いつかなかった。でも初日だし、どんな感じが体験できて、学校が始まる前に友達を作るチャンスがあって嬉しい。

9月4日▶ ついに学校初日で、朝起きたら吐きそうだった。先生にお願いして、ほとんどのクラスで自己紹介をした。今になって思うと、あんな大勢のアメリカ人、しかも高校生の前で自分でもよくやったと思う。先生達の話すスピードは恐ろしく速く、殆ど意味不明だったけど、Child Development のクラスでは手を挙げて質問し、English では読みの拳手をした。私の中の何かが変わり始めている！日本にいる私とは完全に違った。ランチは一人で食べるんだろうなと思ってたし、ランチを持てき忘れたので、浮かない気分だった。学食の列に並ぼうとしたら、水泳チームのEmilyを発見！“Emily!”と絶叫し、ランチパートナーを見つけることができた。昨晚から、今日はどんな terrible day になるんだろうかとビクビクしていたけど、今日一日に“bad”という文字はない！私にしてはよくやった！今日の自分を褒めたい。

9月7日▶ ここ数日間は話しかけてくる人もいたし、なんとなく一目置かれてる感じがしたけど、大事なものはそれを保つこと、受け身にならないことだと思った。そのことは良く分かってるけど、本当に何を話したらいいか分からないし、取り残された気持ちになる。国際交流は好きだし、楽しいと思うけど、それは表面的なもので、本当の国際交流はもっと時間と努力が必要だということにこれから理解できる。そして、やっぱり英語が良く話せる者勝ちというのも、正直事実だと思う。私は日本では話すのが好きだったけど、今は話すことをあらかじめ頭の中で文章を作っておかないと、スルツと英語が出てこない。まだ9月だから当たり前だけど、既にリスニングとスピーキングに相当なストレスを感じる、もどかしい。言いたいことはあるけど、それが英語にならない。

9月12日▶ あんまりいい日ではなかった。原因は分かっている。友達がいない。水泳チームには何人かいるけど、うわべの友達という感じがする。毎時間、教室を移動するせいで固定の友達ができないし、退屈でさみしい気持ちになることもある。今日のバンドの時間の避難訓練は悲惨だった。一人で行動して背中が重かった。いい日じゃなかった理由は、私の努力不足というか、コミュニケーション不足というのは分かっている。今日は特に人との関わりを放棄した気がする。気を引き締めて話しかけて、笑ってごまかして、何とか輪の中に留まる、という日々で疲れてしまった。想像以上に大変だぞこれは！

9月17日▶ アジア系の友達は簡単に増えていくのに、アメリカ人の友達がいない。授業は相変わらずだけど、英語の時間にふと周りを見渡してみた。みんなアメリカ人で、私はその中でたった一人の日本人としてここにいるんだと考えたとき、勇気が湧いた。イレギュラーとしてここにいるということを最近忘れていた。私は日本代表！目立つべき存在！地道に頑張るだけ。

9月21日▶ ホストマザーの誕生日だったので、カードを渡したら喜んでくれた。夕方から水泳チームのキャプテンの家でお泊り会があり、みんなでおかし食べたり、ペイントしたり、映画観たり、アメリカンなことをいっぱいした。一部の友達とは深い

仲になれた気がする。この時期は特にこういう行事を避けてはいいないと思う。とにかく参加することが大事。緊張していたけど、行ってよかった。

9月27日▶ 放課後バンドの集まりがあった。学校中のバンドのクラスの生徒が練習してて、すごい迫力でテンションが上がった。フットボールゲームも初めて観て、よくわかんなかったけど、雰囲気が好きだった。バンドメンバーとして応援に貢献できた感じがした。また一つアメリカ行事を体験できた。

9月30日▶ もう9月が終わったのか、と思うということは、それだけ充実していたからだと思う。ついに学校が始まって、いっぱい緊張して、色んな出会いがあって、困惑したり、嬉しいことがあったり、友達ができたり、色んな感情を持った月だったと思う。アメリカの高校がどんな感じが掴めてきたし、日本とは大いに違ってたそれを体験できてるのはすごく楽しくて、幸せなことだと思う。授業中の指示、友達作り、宿題等まだまだ不安で不完全で心配で辛くなる日もあった。でも、助けを求めたら絶対に助けてくれる人がいる。学校内で今まで私の知らなかったアメリカをいっぱい吸収した。後悔というか、ああすれば良かったな、とか思うときもあるけど、私は学校初めての月にしては頑張ったと自分を褒めていいと思う。来月は今月の失敗を絶対生かして、もっといい月にする。もっと勉強して、もっと話す。

10月7日▶ 成績表見たらオールA！Child DevelopmentとEnglishはAマイナスで、それ以外は全部A！超うれし！先生たちの優しさに感謝。うれしくてACのクリスティにメールした。夕食の後はたいていホストシスターのAshleyと一緒に部屋にいて、お互いの宿題やらそれぞれのことをしてるけど、時々流れてくる曲の説明をしてくれたり、分からないことを質問できるし、こういう時間を大事にしなきゃって思う。

10月11日▶ 水泳が本当にきつい。プールサイドで休憩してる時に隣にいた子と少し話したけど、すぐ沈黙になってあぐくその子は違う群れに行ってしまった。こういうのよくある。それに時々、話しかけるの面倒だなと思う。本当に良くないって分かっているけど、そう思ってしまう。でも、自分から話しかけて行動しない限り、今の状況から抜け出せないと思う。今日は泳いだあと本当にしんどくて、もう誰とも話さずささと帰った。とにかく家に帰らかった。家には3人のホストシスター達がみんないて、なんかホッとした。それに部屋にいても長女Ashleyと共有だから一人でいる感じがしない。シスター達がいてよかったなって思う。

10月14日▶ バンドクラスのコンサートがあった。マザーが来てくれて、私も全力で演奏したし、楽しかった。帰りの車でマザーが“I enjoyed it.”って言ってくれて嬉しかった。マザーが、日本の高校生は受験や勉強で時間がなくて、好きなことや趣味に時間を費やせない。あなたがここに来る理由の一番は英語を学ぶことだろうけど、ここでは“You have time.”って言ってた。今まで来た留学生は、パレエや読書を楽しんでたって。確かに英語で生活は大変だけど、学校生活は慣れれば慣れるほど楽と思えると思う。日本で忙しくなるのが嫌で高校の吹奏楽部には入らなかったけど、今のバンドクラスでまたクラリネットを吹く楽しさを思い出した。冬のスポーツも春のスポーツも、楽しめるだけ楽しむべきなんだと思う。

10月17日▶ 水泳の最後の試合だった。もちろんHome戦で今までで一番応援もすごかった。途中でSeniorにサプライズイベントがあって、私にもJuniorのキャプテンがお花を渡してくれた。その時「Namikoのには花とステッキいれてるからね。Because you are special.」って言われてもう泣いた。涙止まらなかった。短い期間だったけど、水泳部に入って本当に良かった。仲のいい友達もできたり、sleep overや試合など楽しい時間がいっぱいだった。私の拙い英語を真剣に聞いてくれる人もいたし、すれ違えばHi Namiko! って言ってくれる人もいた。メンバーのお母さんたちにもよく声掛けてもらった。気にかけてもらった。お礼を言いたいのは私のほうだよ。

10月21日▶ 英語のクラスで先生の朗読を聞いてメモをとる作業をした。話分かんないし、混乱して頭がおかしくなりそうで、もう嫌だつてめまいがした。言語の壁。不自由というか、いちいち頭で翻訳してたら、脳に何かつかえてるよう。バンドで演奏する時、休みのカウントを数えるのがまだ日本語。これは訓練あるのみなんだと思う。水泳の後はホストファミリーの激しいケンカが

また始まって、居心地が悪かった。ケンカの時はみんな早口で、真剣に聞いてみたけど、少ししか内容掴めなかった。何だかちょっと、家でも学校でも居場所がないような気持ちになる。疲れたなあ。久しぶりにお腹の底から笑える出来事がほしい！

11月3日▶ ついに言われてしまった、「quiet」と。ファザーが「今日は静かだね」と言うと、マザーが「大体いつもね。」って。まあ言われなくても分かっていたけど、いざ言われるとへこむ。11月に入って気合入れ直して、やる気満々だったのに。今日1日中家にいながらほとんど喋らなかつた。あー、もう嫌だ。何が嫌なのかさえも意味不明。上手くいかないことが多すぎて泣きたくなる。今更だけど英語って難しいなあと思う。言語って難しい。明日から冬のスポーツでボウリングに参加する。ちょっと怖い。でも何か始めたら絶対いいことある。何もしない方が一番焦るし、病む。

11月4日▶ 勇気を出して見知らぬ世界に飛び込んで良かった。ボウリングのメンバーは7人。私にとってはそこがポイントだった。水泳チームの方が大人数で迫力があつたけど、一人一人と打ち解ける余裕は私には無かつたし、群れに入っていく勇気も無かつた。でも、7人だと威圧感がないしアットホームで打ち解けやすい雰囲気。練習の後、メンバーの一人とたくさん話した。彼女もいろいろ話題を持ちかけてくれた。でも、最初に話しかけたのも、歩み寄ったのも私！少しの勇気が勝負。ちょっと勇気を出して行動するだけで、世界を広げることができる。ここには水泳で友達になった人は一人もいないし、留学生もいない。自分次第で何かを変えられるかもしれない。最近、自分の会話不足、コミュニケーション不足、この先の心配などで沈み気味だったけど、今日はこの留学はまだまだ捨てたもんじゃないなと思った。まだチャンスはあつて、自分次第でどんな方向にも変えることができるんだ。

11月11日▶ 精神的に息詰まるときがあつて、昨日の夜なんとなくMNCCのケーススタディー解説を読んでたら、当てはまる項目や引っかかる項目、ぐつとくるアドバイスだらけで、蛍光ペンで線を引いたらだぶカラフルになった。行く前はなんとも思わなかつた項目も、今は当てはまる。特に印象的だったのが「与えられた環境を生かすも殺すも自分次第」という言葉。もっと現実を受け入れようと思った。ファザーが私と三女Amyに外出許可をくれた。小学校に行つて、久しぶりに外の空気を吸つて、相当ナリフレッシュになった。外に出たって提案して正解だった。夕方は下2人のシスターと映画を観て、ずっとAmyと遊んで話してを繰り返した。みんなから「あなたは良いお姉ちゃん」とか褒め言葉をいっぱい言われて嬉しかった。私には3人のシスターがいる。その環境を思いっきり活かした日になった。

11月16日▶ 今日は読書dayだった。みんな家にこもって何か読んでいるから、ある意味いい環境。授業中ついていけなかつた英語の本も、家で落ち着いて読んだら大体理解できた。今もリーディング力の無さを嘆いているけど、1年前なんか薄い本でもすごく時間かかってたから、そういう意味ではすごく成長してると思う。長文に嫌気がささなくなるまで読み続ける。こういう地道な努力が本当に大事だと思う。

11月30日▶ 面白い体験をした。夕方からACのクリスティが私と次女Alexisをアイススケートに連れて行ってくれた。近所の大学生も連れて来ていて、そこに日本の大学生もいて話しかけられた。何歳？や靴のサイズなに？って日本語で聞かれたとき、一瞬固まって数秒返事ができなかつた。日本語を書いたり読んだりするけど、聞く、話すという動作をまるでなくて、脳が混乱しているのがよく分かつた。会話を続けていくうちに日本語が出てきたけど、時々no〜って言いそうになつたり、なんか変な日本語を使っていたりして、すごく不思議な体験だった。日本語も英語も中途半端な感じというか30%は英語脳になっているな、という感じ。家にも学校にも日本人が1人もいないこの環境が、すごく貴重なんだと実感した。

12月6日▶ 夕方からbanquetっていう水泳部の総表彰式みたいのがあつた。早く着いたけど、仲いいリンは来なかつたしバレンティーナもギリギリに来て、それまで全く話す人がいなくなつた。みんなまるで私は見えていないかのように高速でしゃべり続けてたし、話に入っていくスキもまるでなかつたことがショックだった。3ヶ月間なんとか頑張ってきた人間関係の結果を突きつけられたような気がした。隣の子にはちょっと話しかけたくらいで、すぐ沈黙になる。何で？一番辛いポイントはドイツからの留学生のアナ。アナのこの3ヶ月は誰が見ても成功といえる。ほとんどのメンバーにいつも話しかけて人間関係を築くのもうまければ、英語も止まらない。これが話す人がいなくて1人いる状況なんかより辛くなる。自分の3ヶ月が愚かに見える。努力不足に見える。泣きそう。

比較って辛い。同じ留学生でもレベルが違いすぎる。なのに「留学生」という一つの枠で見られる辛さ。あーもう悔しい。何でこんなに上手くいかないんだろう、頑張っているのに。何をすればいい？深い友達を1人でも増やして、少し長めの会話をしたい。こんな簡単そうなことに4ヶ月も悩んで、今も格闘中。結局私はこのチームの中で、リンとバレンティーナとしか関りを持っていなかつたのかもしれない。思っていたよりずっとずっと私の影は薄かつたんだなと思って思った。日本では人間関係のことなんかでこんなに悩んだことはなかつた。平和主義な私はトラブルに巻き込まれにくかつた。別にここでトラブルに巻き込まれているわけじゃないけど、精神状態がトラブルだ。時間をムダにしているのもあって思う水泳部での3ヶ月、私ができた精一杯でこの段階。それだけ留学って難しく大変で悩まされる。

12月13日▶ MNCCの言つてた通りだ。私の周りはクリスマスモードで気分が上がるはずなのに、イマイチ気分は上がらないし、ぼーっとしてしまう。心配事もあるし、生活に慣れて新しいことに目がキラキラすることも少なくなった。こんなときこそ努力が必要なんだろうな。無理してでも脳に楽しいと思わせてやろう！最近怠りがちな読書をまた始める。

12月19日▶ ボウリングのメンバーからのあだ名がなぜか「キウイ」で(笑)試合のときとかあたしスコアめちゃうくちや悪いのに、キウイ！って応援してくれるのが嬉しい。英語で書いたエッセイが機械の判定だと恐ろしく悪くて落ち込みつつも、やっぱりなって笑えた。やっぱ先生達がいい人過ぎるんだなと。本当の実力でいい成績をとるには、まだ数年かかりそうだ。楽しいことよりつらいこと、大変なことの方が多くせにあともう一年ここにいられたらなんて思ってる。

12月25日▶ シスターたちに起こされてリビングに行くと、プレゼントが山積でみんな大興奮だった。こんなにもらって申し訳ない！と思うくらいで、なんか誕生日とクリスマスとお正月を全部混ぜたような感覚だった。親戚も集まって、おじいちゃんやおばあちゃんやおじさんもプレゼントを持ってきてくれた。おばあちゃんにもらった本は帰るまでに読み終えたいなあ。

12月28日▶ 夕食作りは私と次女の役割だったのに、全然手伝ってくれなくてほぼ全部一人でやった。それなのに、次女がこれ火通ってないってきつく言ってきて、最終的にマザーなんか電子レンジに入れたら？とか言つて。あれだけ時間かけて頑張ったのに、悔しくなつたし、失礼だと思った。涙出てきて見られないように頑張つたけど、たぶんばれた。ホストマザーと次女がしきりに大丈夫？って言ってくるのが、余計に腹立ってしまった。同情なんか大嫌い。大丈夫だったら涙なんか出ない！はつきり言つてこの冬休みはもうどん底。今までで一番心が沈んでいるのが分かる。今まで気付かなかつた所や、スルーしてきたホストファミリーの嫌なところがどんどん見えてきて、些細なことでイラついてしまう。ホストファミリーとの生活だけの日々は辛すぎる。かといって家を出て会う友達もいない現実にもまたへこむ。数日前は日本の友達が夢に出てきた。みんなに会ってバカ笑いでしゃべり続けたい。30%ぐらいしか理解できてないにもかかわらず、苦笑い、オチも分からないのにとりあえず笑つとく。そんな生活を続けてたらそりゃ病むよ。これがどん底であつて欲しい。MNCCの異文化適応の第4段階が気持ち悪いくらい書いてある通りで、なんか涙出そうになつた。

1月1日▶ 一応夜中の12時まで起きてたけど、外から聞こえる花火の音が無駄に切なかつた。人生で一番静かな新年。でも、夕方ホストファミリーとアイス食べに行つて、Grandma迎えにいって、みんなでレストランに行った。そのへんは特別な感じが





した。新年がやってきたんだし、気持ち切り替えて明るく行こう！

1月6日▶ 2週間ぶりの学校！仲の良い友達に会えたのは嬉しかったけど、多分見えないところでエネルギー使いまくったんだろうな。すごく疲れた。でもやっぱり学校に行くと楽しいことあるし、何より脳が刺激されているのが分かる。忙しいのがどれだけ幸せなことか冬休み実感したし、やっぱり外の世界に出ると色んな発見がある。家帰ってからはシスターとクーポン切り一緒にしながらいっぱい話した。最近自分から話しかけるようにしてたら、シスターもどんどん返事してくれるし、なかなか良い感じ！

1月8日▶ 放課後バスケットの試合にバンドで参加した。唯一話をする子のグループにいたけど、全然話さなかった。話すことがなかったし、英語が出てこなくて、それにもう疲れていた。今日は自由参加で、行ったらなんかいいことがあるだろうと思いついて行ったのに、結局反省だけで帰ってきてしまった。嫌だーもう！英語難しすぎ！人間関係築くのってこんなに大変だったっけ？クラスで意見言えないのも、2人きりになると居心地が悪い友達いっぱいなのも、作り笑いの日々も、残念ながら私の今の現実で、そろそろ本気で向き合ななきゃと思う。もう夢見てる場合じゃない。でも、参加しようって決めたことはえらいよね！そういう姿勢、大事だよ！

1月13日▶ シスターと同性愛者の権利について語り合った。シスターはすごく情報調べてるし、真剣にその人たちのことを考えてるのが全力で伝わってきて、なんか心打たれた。アメリカにいと同性愛者やトランスジェンダーの問題が身近で、シスターの高校の友達にもいるそう。一番感動したのは、シスターが将来的にYouTube等のメディアを使って、自分なりの意見や彼らへの権利を訴えたい！って張り切っていたこと。15歳でここまで本気なのがすごいと思った。シスターのマシニングトークが終わった後、私が日本人目線での意見を言って、そこからシスターが日本の素晴らしさについて語り始めた。どんどん話が深くなっていて、価値のある会話をしている感じがした。それに、Namikoは日本人のイメージからすればよく話す方だと言われて嬉しかったな。

1月24日▶ 前期最終日で、今日で一緒にのクラスが最後の友達もいて、なんか悲しくなった。そして、学校が始まってもう5ヶ月経ったんだという現実には驚きつつ、焦る。いつもこうやって日々を振り返る度に頑張ろうって気合を入れなおしてるけど、私はこの5ヶ月でどれだけ頑張れたんだろう…。放課後はボーリングトーナメントに行くと、私はサブだったけど、最後のゲームだけ参加してかなり緊張した！メンバーと輪になって話しているとき、Namikoが日本語話してるの聞きたい！って言われて、ちょっと話したら、Woow!!ってなって面白かった。

1月30日▶ 新しく取った授業の先生がかなり妙。指示と違うことしたら、私のこと“Hey, Japanese girl!”と呼んできて、私はその時ちょっとイラっとするくらいだったけど、後で友達が“That was mean.”とか、racismだよ！って言って、ちょっとハッとした。その後も何人かに話したけど、みんなそれは問題発言だよ！って言った。

1月31日▶ 時々、自分こんなに弱いんだって思う時がある。今日がそれ。例の新しい授業の先生の扱いがひどい。まるで私を馬鹿にして。友達はいつも私の見方で、すごく怒ってた。だから、放課後のクラスを何とか変更しようと思ってオフィスに行ったら、オフィスのおばさんに、もうタイムリミット過ぎてから変更できないと冷たく言われて、悔しくて帰りのバスの中で号泣。見られてるなんてどうでもよかった。ただ泣いてスッキリした

かった。勇気出してこの話をシスター達に相談した。みんな口を揃えてunacceptableって。これがアメリカだと思った。人種に関する発言は、本当に命取り。ACに相談しても同じ反応。どうにかして授業を変更してくれるって。日本じゃまず起きない問題。私が人種差別の対象になった。

2月5日▶ タイピングの授業で手紙について勉強してて、先生に日本のおじいちゃん、おばあちゃんから届いた手紙を見せたら、是非みんなとシェアして！って言われて、クラスの前で手紙見せて住所の書き方の違いとかを説明した。みんなの驚く反応が嬉しかったし、発表も嫌じゃなかった。なんかチャレンジできたことが嬉しかった。

2月10日▶ なんていい日！ボーリングチームのbanquetがあって、最高だった！表彰状とかメダルとか思い出の品いっぱいもらって、あたしスピーチで号泣。涙もろくて困る。みんな駆け寄ってきて、輪になって慰めてくれて、写真もいっぱい撮って、サインとかもらって、ボーリングチームのいい締めくくりになった。小さいチームだったおかげで、水泳部の時にはなかった存在感を発揮できた。みんなには感謝でいっぱい。

2月16日▶ Elenaと映画を観に行って、そのあとElenaの家にSleep overに行った。自分でもびっくりするくらい話が止まらなくて、めちゃくちゃ楽しかった。Elenaのお母さんとおばあちゃんもすごくいい人で、静かで居心地のいい場所だった。日本語教えて！ってやる気満々。私の読書のために読みやすいファッション雑誌をいっぱいくれたり、夜中まで動画見て大笑いした！クラスのイケメンの話とか、むかつくフレッシュマンのこととか、友達らしい会話をいっぱいした。ホストシスターの友達じゃない人のところに一人でSleep overしたの初めてだったし、大きな一歩を踏み出せる気がする。何回もbest friendと言われた！Elenaは漢字の成り立ちとか、歴史的建物とかにも詳しくて、日本について語り合う度に、日本の良さとかすごさを逆に教わってる気持ちになる。最近学校の成績は下がり気味だけど、仲の良い友達が出来ただけで学校生活は随分楽しくなってきた。

2月28日▶ タイピングのクラスで、ウェブサイトを作る企画をやって、Elenaといい感じのポスターを作った。アメリカ史のエッセイは昨日家で3時間掛けて準備を頑張った分、下書きがスラスラと終わった。日本は3月1日で、私の友達は卒業式！同級生との思い出とか、卒業式とか全部述べてここにいる。価値のあるものにしないとやりきれない。ここに来なければ感じなかった嫌なこと、辛いこともある。でも、得たものもいっぱいある。明日から3月。自分自身が満足できて、誇れる日々を送りたい。

3月17日▶ バンドのコンサートがあった！なんと最初の曲が私のソロからの始まり。緊張でおかしくなりそうで、周りのみんなに頑張れって何回も言われた。何でいつも私はこんなに自分に自信がないんだろうか。でも、うまくいったし、先生もゴージャスだって言ってくれた！あがり症治らないなら、せめてもっと自分に自信を！自分が思っている以上に、あたしはすごいよ！

3月18日▶ ACに頼まれて、短期のホームステイの生徒を受け入れるホストファミリーへの講習会にゲストとして行った。10組くらいの夫婦や親子がいて、その人達の前で、私は何故ここにいてとか、留学のきっかけ等自己紹介してたら、話が止まらなくなった。緊張してたけど、みんな暖かい視線で聞いてくれて嬉しかった。私は自分に自信をもっと持つべきだと思う。今日私がやったことは、誰でも出来ることじゃない。すごいこと！日米の文化の違いの話とか、ウケ狙いみたいなのも思いの外うまくいって、参加してよかった。今の自分を誇りに思っ、自信満々でいたい！

3月19日▶ 帰国日の連絡が来た。正直何の感情も湧いてこなかった。あー一時が来たんだなーって感じ。多分まだ実感が湧いてないんだと思うけど。もうすぐ帰国でほっとする気持ちもあるし、残りの時間で自分に何が出来たかについて考えてみたりもした。良いことは勝手に来るんじゃないかって、自分で作っていくものだよ！自信もって、笑顔で！

3月28日▶ Happy birthday to myself!!なんと今日で18歳になる。なんて。学校ではElenaがプレゼントくれて、何人かにもおめでとう言われた。ファミリーは、ACが電話くれるまで気付かれなかった。(笑) まあ、いいんだけどね。ACと学校のオーケストラのコンサートに一緒に行った。終わってからACの家に行くと、短期のホームステイに来ている日本人の子に会った。なんか2年前にホームステイした時の私が思い出されたというか、あどけなく可愛かった。私もたった2年前は訳も分からずアメリカに行き、英語もままならず、でも自分が言ったことが少し伝わっただけで喜んでた。そんな私も今となってはそれなりの日常会話くらい

なら出来るようになってる。本当はそんなことさえないんだよね。いやー成長した！すごいよ！ドイツからの留学生もいて、ちょっと驚いたのは、彼女のアメリカ生活は思ったほど順調ではないらしいこと。彼女がA Cに何でも相談しているのを見て、私もファミリーのことを相談した。いつもA Cと過ごした日は良い日になる。こんな大人になりたい。

4月5日▶ 新しい発見！新聞を読み始めた。学校のテストとかで出そうな単語が新聞に満載で、単語をいっぱい覚えた。家にいると本当に1人になりたいのに、一人になれる場所はどこにもない！今日も家事を頑張った。家汚すぎ！誰も片付けられないから私がする。

4月8日▶ 昨日からElenaの家でsleep over。昨日は彼女が行く大学まで行って、アドバイザーの人に会ったり、帰り道は相当暑い中歌いながらへとへとになって歩いて帰ったり、とにかく楽しかった。話し始めたら止まらなくなる。今朝は早起きしていざモールへ！何週間も前から春休みはモールへ行こうって約束してて、やっと叶った！映画観て、買い物して、クウォリティーの悪すぎるブリクラ撮って、プロムのドレス一緒に試着したり、楽しいとか以上の忘れられない日になった。

4月16日▶ 今日嬉しかったこと、Englishクラスで書いたロミオとジュリエットのエッセイが機械判定で76%だった。クラスの平均は50%~60%だったらしい。機械は私が留学生だと知らないし、相当嬉しかった。5限はWalt DisneyについてSaranとプレゼンテーションがあったから、目がパッチリ覚めた。Saranが1番にやりたいと言って、トップバッターになった。思ったより緊張しなかったけど、私たちのプレゼンテーションは長すぎてtime upと言われてしまった。まあ、とりあえず終わったし、ほっとしている。夜はファザーとナチョ食べながら映画HOBBIT見たけど、話が全然分からなかった。言語の壁はまだまだ厚い。

4月25日▶ 学校ではパレードのためのマーチングの練習が始まった。歩幅とか、同時に考えることが多すぎてすぐく大変だったけど、一度やってみたかったから嬉しい。学校に行くことに新鮮さはもうかけらも残ってない。あんなに怯えてた学校生活も、今じゃ普通だから慣れてすごいね。ハリーポッター1巻をまた読み始めた。夏に1回読んだから、もう1回読むとその時分らなかった単語が分かったりして面白い。

5月10日▶ 午前はAmyのBirthday partyをして、10人くらいのギッズのお世話を頑張った。かなり大変だけど、あの素直さはやっぱりイネ！みんな可愛かった。そして、午後からElena家に向かい、Elenaとパッチリ決めてプロムにいった。プロム自体は思ったより質素だったけれど、踊りまくって楽しかった。そのまま夜はElena家でSleep overした。

5月15日▶ 今歴史の授業で真珠湾攻撃について勉強してて、色々考えさせられる。そして視点が違いすぎてびっくりする。かなり日本悪者扱い。ビデオで観たときなんか、なんかすいませんみたいな。しかも教科書で広島に原爆落としたことは、1枚でまとめられている！ホロコーストのこともそうだけど私は歴史全然知らないなあと思った。

5月17日▶ 留学生のさよならパーティーでスピーチがまさかの2番手。しゃべりながら号泣してしまった。マザーも泣いていたし、他のホストファミリーも私につられて泣いている人がいたらしい。で、私から始まり、ほぼ女の子みんな泣きだして、Ashleyから“You started it!”と言われたので爆笑だった。夕方からLacey fun fairにマーチングバンドでパレードに出た！ファミリーもみんな観に来てくれた。道路もパレード用に通行止めにして、そこを観客に囲まれて演奏しながらマーチングして、一生忘れられない最高の思い出になった。明日から同じことをしにカナダに行く！

5月19日▶ 昨日はカナダの観光をして、今日は6時前に起床してパレードに向けて準備開始！出番が思ったより後半で、待ってる間2年前MNCCのJapan Homestayに行ったDerekがバンドにいて、いろいろ話した。日本の思い出話をいろいろ聞かせてくれた。新しい友達もできた。やっぱり本場の早口ティーンエイジャーの話にあんまりついていけなかったけど、まあ、こういう感じもう慣れたし！パレード自体は一生忘れられない最高の思い出になった。演奏しっぱなしだったけど、カッコイイユニホーム着て、留学生活の中でも特にトップの良い思い出になった。

5月22日▶ バンドのクラスの時間、ほとんどの生徒が模試を受けに行っていて、クラス10人くらいしかいなかった。いきなり先生が私のことについて語りはじめて、日本から留学するのはえらいとか、Namikoに会えて嬉しいよ！と言われてめちゃくちゃ嬉しかった。先生は日本に12年前に行ったことがあるらしく、思

い出話を聞かせてくれて、クラスメイトも興味を持ってくれて、なんだか暖かい気持ちになった。夕方から最後のコンサートでちょっと寂しくなった。

5月26日▶ Ashleyの思いつきで本当は古着屋さんに行く予定だったけど、お店が閉まってて、Amyも連れてモールに行った。やっぱり買い物は楽しいね！Amyの子供服売り場に試着室がなくて、Amyの買い物だけでできなかった分、帰りにLime Berryっていうアイスクリーム屋さんに行った。シスター達とだけ過ごしたなんかいい日だった。

5月30日▶ 学校生活も終わりに近づくとともに、先生たちから無謀な課題やら、年度末のエッセイ等々、課題とテストに追われた月だった。プロムに行って、バンドでカナダに行って、市内の道路をマーチングパレードをして、year bookもらって、体験した全てのことに感謝しなきゃなあと思う。何だかんだで1年いろいろあったけど、来月で本当に全てが終わってしまう。ホストファミリーや友達をより大切にして、いい締めくくりを迎えたい。

6月2日▶ 夕方からバンドのbanquetに行った。表彰とか私は全然関係ないと思ってたけど、Senior pick、Best 木管楽器player、Best hard workerの3つにノミネートされて、感激しまくりました。顧問のMr. Johnsonはみんなの前で、Namikoの演奏はfantasticだった！と言ってきて、嬉しすぎる。

6月11日▶ ランチタイムの時、アメリカ史の先生と話をする約束をしていて、2人で東日本大震災について40分くらい語り合った。残りの時間は、アメリカと日本の文化の違いについて盛り上がった。英語の上達も褒めてくれたし、かなり充実した時間になった。

6月13日▶ 学校最終日！バンドでMr. Johnsonとの別れで号泣してから、3限の終わりまで泣き続けた。いっぱいハグしてもらっては泣きの繰り返しだった。みんなから寂しいって言うてもらえて、私の一年は「成功」と言っていんだって思えた。放課後は、Elenaと友達と3人で映画観に行った。最高の最終日。いっぱい泣いて、いっぱい思い出みがえってきた。先生達全員に、日本らしいカード、5円玉、竹のしおりのカードをプレゼントした。Mr. Johnsonには300羽鶴作った！

6月16日▶ 日本好きのミカエラが家にて、カレーと一緒に作った。そういえば、ずっと人の家に行ってたばかりで、誰かを呼んだのはこれが初めてだったな。楽しかった！途中でAshleyも参加してきて、余計に盛り上がりすぎて最高だった。友達って本当にいい。これから残りの人生でも、友達は特に大事にしたい。

6月17日▶ Elena Day! 朝からゲームセンターに行って、巨大な賞品もらったり、滝がある森に連れて行ってくれて写真をいっぱい撮った！最後にElenaの家に行って、プレゼントいっぱいもらって、だんだん寂しくなってきた。帰り際に、なんとElenaのお母さんとおばあちゃんが泣いてくれた。もう、私の留学生活、成功だよ！こういう出会いに一番価値があると思う。言語の壁とか、そういう努力もその裏にはあるけれど、やっぱり、いい人との出会いほど素晴らしいことはない。

6月19日▶ ついに最終日。朝は皆で早起きして、Ashleyが有名なチョコレート工場のお店に連れて行ってくれた。その後友達がバイバイ言いに来てくれて、シスター達みんなと遊んでるうちに夕ご飯も一緒に食べて、かなり楽しい最終日になった。空港にマザーとAshleyが来てくれて、別れ際に号泣した。号泣するほど頑張った。悔いがないくらい、素晴らしい一年になった。みんなありがとう。



11月 10月の最初に二週間の休みがあった。このシステムについて説明すると、Districtと言って、そこに所属している高校があり、僕の通っている、TOKAY high school は Lodi district に入っていて、そのDistrictに属する学校は、約2か月学校に通うと2週間の休みがある。これは日本でいう1学期みたいなもので、数えるところかが4回あったような気がする。生徒と先生も、みんなこれに向けて頑張っているという気がした。ちなみに、アメリカの生徒は1年間に180日、学校に通わないといけないという法律があるらしい。ということで、僕はこの2週間をゆつくりと過ごしたけど、このことでいろんな問題に直面しまった。というのも、僕は日本では休みの日は家にいることが多かったので、アメリカでも同じように過ごしていたら、お母さんから友達はいないのかとか、何で遊びに行かないのか、など言われて結構心配された。僕はあまり遊びに行かない方なんだと説明しても、あまり理解されることがなくて、僕の担当カウンセラーからも変な誤解をされてしまった。そういう感じで最初の一週間が過ぎた後、僕は次の週に、ストックトンにいる別のホストファミリーから、アメリカのナショナルパークのBig treeに誘われて行くことになった。そういう形で、お母さんとかが外に遊びに行く機会を作ってくれたりして、とても有り難く感謝するけど、自分的には外に遊びに行くこととか、しかも、その機会をほかの人から作ってもらうのに、とても違和感を抱いたりしていた。

この問題が起こるのは、僕自身の日本での生活との違いにあるのかも知れないけど、僕が自分なりに考えた結果、まず日本では、高校は勉強を頑張るところと見られていて、大学に入ると自由に遊ぼうというのが、日本の考え方なのかなと思う。だから、僕は日本では、あまりアメリカの高校生みたいに遊んだりはしていなかった。でも、アメリカはこれが逆で、高校の時に遊ぼうという考えで、大学では真剣に勉強という感じになっている。この文化の違いからくる摩擦で、今僕は自分で何とかなしいといけなくなっているのかなと思う。これが日本とアメリカの違いとして、一番僕が困ったことです。でも僕自身はこの問題に解決策を持っていて、まずは遊べばいいということです。とにかくまずやってみるということで、これから先どうなるかわからないけど、できるだけいろんなことに挑戦して、友達と遊ぼうということです。でもこの違いが自分を強くするし、いろんなことを学ばせてくれるのかと思うと、やってやろうという気になります。

高校ではアメフトのシーズン最後の試合で、1年で一番でかい試合といわれている、Lodi high school というライバル同士の試合に行った。いつもの試合でもたくさん人があるのに、その何倍もの人が来っていた。まず、空いている駐車場を探すのに時間がかかった。

友達と見に行っただけ、探すのに30分くらいかかって、お金も確か10ドルくらいだったと思う。高校の試合なのに、こんなに人が来ているのは、正直言ってとてもすごい。試合は僕の高校が負けて、結局Tokayは今年は1回も勝てなかったらしい。アメフトのシーズンが終わり、僕はサッカーのシーズンに入るので、try out に向けて準備を始めた。まず、医者の所に行って、メディカルチェックをしないとイケないらしい。日本ではこんなことをしたことがなかったので、ちょっと驚いた。僕はこのサッカーのシーズンが、友達を作るチャンスと思って、実際にたくさん友達の友達を作った。みんなとても上手で、サッカーをしている人はどちらかというと、メキシコ人がほとんどだった。みんなうまい下手にかかわらず、自信をもってプレーしていた。英語でコミュニケーションをとらないといけないので、とても難しいけど、やっていてとても楽しい。

家では家族と第二次世界大戦について話した。ということで、原爆の話をする事になり、どう思うかについて、お母さんはアメリカはとても悪いことをしたと言った。でも、そのことにディエゴは、日本が最初に真珠湾を攻撃したから、アメリカは原爆を落としたんだとも言った。このことについて、どう思うかと逆に聞かれた。その瞬間、僕は日本を代表して、僕の意見を言わないといけないということを自覚した。僕は自分にうそをつきたくなかったから、自分が思っていることを堂々と言った。「原爆を落としたことについて、アメリカはとても悪いことをした。日本が真珠湾を攻撃したからと言って、原爆を落としてよかったとは思わない。でも、日本が真珠湾を攻撃したことについても悪いと思う。僕の意見は、結局のところ、どの国がいいとか、この国が悪いとかではなく、戦争をしたすべての国が悪い。」と。

12月 家族と日本のことについて話したことがあった。それは憲法のこと。自分の中でとても疑問に思っていたことがあったから

だ。日本はこのまま軍隊を持たなくてアメリカの核の傘の中にいた方がいいのか、またアメリカ人はそれをどう思っているのだろうかと思ったし、アメリカ人が作った日本の憲法のことについて知っているのか、それをどう思うか、はたまた憲法を変えた方がいいのかなど。

家族にこんな感じの質問をしたら、お母さんは、日本は軍隊を持ったほうがいいと言った。日本は一応自衛隊があって、国を守ることとはできると言ったけど、ほかの国が攻めてきたら、守るだけというところに疑問があるらしくて、お母さんは軍隊を持った方がいいとのこと。お父さんは、日本は憲法を別に変えなくていいんじゃないかと言った。理由は簡単で、今それで国が回っているなら、別に必要はないとのこと。確かにそうだなとも思った。

ナンシーの友達で、高校の時に日本語を勉強していて、しかも実際に日本で3か月くらいインターンシップとして働いた人がある。しかも日本のことを大学で勉強したらしく、もしかしたら、僕よりも日本のことを知っているんじゃないかなとも思わせる人で、この人もお父さんと同じで、憲法は変えなくていいと言うほうだった。理由はお父さんと一緒。ここで思ったのは、日本とアメリカでは憲法に関する感覚というものが少し違うなと思った。というのも、日本って、今、国はこの憲法で回っているのに、憲法を変えようとする人があること。また、アメリカ人は国が回っているなら、それでいいんじゃないかという感じ。もちろん、日本の憲法はアメリカ人が作ったから、それが理由で変えようという人があるんだろうけど、ちょっと感覚の部分で違うなと感じるところがあった。

そして、このナンシーの友達と言ったことで、面白いことがあった。僕が日本のどういうところが嫌いかと質問した時だった。それは、日本人は人種差別が多いと言ったことだ。僕は今までそんなこと思ったことがなかった。まさかあの日本がそうなのかなとも思いたくもなかったし、でも、それを聞いたときは少し、「えっ!」、となった。理由を聞いてみた。インターンシップの時、ある日、日本の小さい子供と電車に乗った時に、黒人の人がいて、その人にその子が「黒い、黒い。」と言うので、注意したらしいけど、その子は笑いながらやめなかったらしい。僕はその話を聞いた時に、小さい子供がしたことだから、少ししょうがないのかなと思ったけど、そこが日本とアメリカの違いなのかと気が付いた。アメリカは小さい時から、実際にいろんな人種の人と、毎日の生活を送っている。だからそういうことは、小さいころから常識として知っているのだ。でも、日本には日本人しかいないから、そういう多民族の人たちと会う機会がない。だからその人は日本に来てそのことにびっくりしたし、好きな日本の嫌いなところはそこだと言ってくれた。やっぱり日本にいたらわからないことばかりだなと、改めて気づかされた。また、その人は白人と黒人だと、日本では白人の方が人気があることも述べてくれた。その人は白人だけど、そこにも大分違和感があるらしい。そもそもその人が日本語を習い始めたのは多文化について興味があったかららしい。日本語を高校で習う人に聞いてみても、同じ答えが返ってくることもあるから、日本はそうやって興味を持たれているのかと思った。

日本とアメリカのクリスマス、一番違うところはと聞かれると、アメリカはイブを祝うところかなと思う。今考えると日本でイブ祝う人いるのかなと思った。サンフランシスコに家族とクリスマスのイベントに参加するために行ったことがあるけど、サンタコンといって、仮装する祭りで、いろんな人たちが来ていた。とてもたくさんの人がいた。お母さんが教えてくれたけど、サンフランシスコはゲイの街といわれているらしい。そして、僕も実際にそういう感じの人と会った。でも一番驚いたのは、仮装した人の中に、裸のじいさんたちがいたことだ。ほんとに裸。服はなし。着ているといえば、あそこを隠すための本当に小さな袋。しかももう見えている。今冬、しかも中にはほんとに隠さずに裸の人がいた。しかも、あそこにピアスをしていること。どうやってという気持ちと、男にしかできない想像をしたらとても痛かった。お母さんが、横に並んで写真撮ってあげると言ったけど、断って遠くからその人たちの写真を撮った。とてもすごい経験になった。ほかにもクリスマスの行事に参加した。友達の家に誘われて、メキシコのクリスマスの行事に参加したりした。とてもいい経験で、違いという意味でとても学べた。主なメキシコの人たちの宗教は、カトリックとクリスチャン。同じキリスト教かなと思ってたけど、全然違うらしい。最後に、僕はクリスマスで家族からたくさんのおもちゃをもらった。まずは靴、フード付きのパーカー二つ、バックパック、スポーツ用の長ズボン二つ、そしてスキー用の手袋をもらった。ワシントンの家族からも来てサッカーのTシャツをもらった。僕もみんなに少しだけあげたけど断然みんなからもらうほうが多かった。

参加者へのアンケート

◆日本と米国の高校における違いは何だと思いますか？

- アメリカの高校は、日本よりもっと先生と生徒の関係が近く、でもその為に、生徒が先生に対して失礼と思われることもしばしばあった。
- 米国の高校は生徒に全ての判断を任せ、個々の個性を伸ばすことに重点を置いている。
- 先輩、後輩の上下関係がなく、みんなが仲良しなのがアメリカの高校。
- 教科が選べる。
- アメリカは私服である。
- 自主性の尊重。
- 勉強する目的。
- アメリカは何でも自分で意見を言う場がある。
- アメリカはやる気のある人間だけ勉強をやっていいという考え方があり、上と下の差が大きいけど、日本はみんなで頑張るという傾向がある。
- アメリカの高校は日本のそれと違い、勉強する場というよりも楽しむ場という感じがある。
- 日本人は依頼心が強く子供っぽい、米国人は独立心が強く大人である。
- 日本人は物知りでも自己主張ができない。アメリカはその逆。
- 米国の高校は設備が整っている。
- 授業中、先生とのやりとりが多い。何を質問しても、先生は怒らず聞いてくれる。だから、授業中に寝てる人もいない。
- アメリカの高校は、勉強よりもSocializationの為の場である。
- たくさんイベントがある。
- 個人の自由を尊重する。
- アメリカの生徒は、みんな自分の意見をはっきり言うし、分からないことがあれば、すぐに手を挙げて先生に聞く。
- アメリカでは授業をしっかり理解しないと、テストが解けない。
- アメリカの高校生は、愛校心が強い。
- アメリカの高校には「進学するために勉強する」という緊迫感がない。
- 日本の先生、校則は厳しすぎる。でも、アメリカの先生、校則は甘すぎる。
- とにかく、何かを必ず体験しながら授業を行うのがアメリカの高校。
- アメリカの授業は、先生が教えるのではなく、生徒が自分たちで学ぼう、教わろうとしている。
- アメリカの高校では宿題をすることが、成績決定の過半数以上を占めている。
- エッセイやレポートなど、自分の考えをまとめる宿題が多いのがアメリカの高校。
- 日本では先生が与えたことをすれば、やっていけるけど、アメリカでは自分で考えて、何でもしなければいけない。
- アメリカの高校は個人で行動。日本の高校は集団行動。
- アメリカの授業は討論形式。ノートはとらない。
- 米国の高校は、本当に個人を大切にしている。
- アメリカの高校は、大学のような感じ。
- アメリカの高校には、いろいろな人種の生徒がいて驚いた。
- アメリカの高校は、遅刻にとっても厳しい。
- 自分の思うことをストレートにはっきり言うアメリカの高校生に対して、日本の高校生は「このことは、本当に言っているのか？」と実際に口にする前に、もう一度考えなおす。
- やる気が違う。
- 米国の高校はとても自由な分、個人の責任がとても大きい。日本は自由は少ないが、責任を親がとってくれる。
- 校則から授業の考え方で全て甘えのきかないのがアメリカ！
- アメリカの高校は、クラスごとにクラスメートが変わるので、いろいろな人に出会える。
- 授業の進め方。
- アメリカは、才能を伸ばす教育。
- 米国には、積極的な生徒はどんどん進めるシステムがある。
- 自主的な姿勢と受け身な姿勢。
- 日本では出る杭は打たれるが、アメリカでは出る杭はさらに出される。
- 自由と自分自身に対する責任の大きさ。
- アメリカの高校では「覚える・解く」というより、「作る・考える」という感じ。
- アメリカの授業は、無駄口が多いけど、発表もたくさん。学校生活を楽しむ時間も機会もたくさんある。
- 生徒主体がアメリカ。先生主体が日本。

◆留学中、最も苦労したのはどんなことですか？

- 留学初期の頃の英語でのコミュニケーション。
- 友達作り。
- ホストファミリーとの人間関係。
- 学校が始まった時、英語が通じなくて友達がうまく作れなかったこと。
- 勇気を出すこと。
- 英語の宿題。
- 考え方（価値観）の違いに戸惑った時。
- 食文化の違い。
- 自分の意志の持ち方。
- ダイエット。
- 年の近いホストシスターとの接し方。
- 積極的であること。
- 自分の考え、意志を相手に伝えること。
- Yes、Noでの意思表示。真ん中がないから。
- EnglishとU.S.Historyの授業。
- ホームシック。
- 各クラスのコツをつかむこと。
- 頭の中で、英語で考えること。
- 学校の授業のテスト。
- 人に対して「我慢する」こと。
- 英会話。
- 家が町からとても遠くて、ホストファミリーの助けがないと、どこにも行けなかったこと。
- 英語のクラスでの本読み。
- 英語の発音。
- 物事を多角的に見たり、自分に客観性をもつこと。
- 兄弟ゲンカ。
- 宗教について。
- もちろん言葉。そして異文化！
- 日本の価値観を持っていない人に、日本のことを説明すること。
- 物理の授業。
- ホストファミリーとの間に生まれる文化の違いによる誤解。
- 英語力が不十分なのに、いろいろなトラブルを自分自身の手によって解決していかなければならないこと。
- ストレスのコントロール。
- 学校の授業でのプレゼンテーション。

◆この留学で得たものは何だと思いますか？

- 忍耐力と独立心。
- 英語力。
- アメリカの文化。
- アメリカならではの経験と体重。
- アメリカから見た日本の姿。
- Friendship & Laughs. アメリカナイズしてしまったけれど十分役に立っている。
- 日本への愛国心。
- アメリカが、日本のことをどう思っているかを学んだ。
- 日米両国の友人のすばらしい友情。
- 生きることの難しさと自己管理の大変さ。
- 感謝する心。
- 人間らしさと日本人らしさ。
- World communication.
- 体力。
- 物事を多角的に見ることができるようになった。
- 積極性、根性、英語力、度胸、そして脂肪。
- 強い心。心の変化。いい方向に成長したと思う。
- 前向きに考えること。
- 他人を許すこと。
- 自己主張。
- 未来への希望。
- 精神力。
- 他人とどのようにつきあうか、その方法。
- 情熱とやる気。
- 現実的思考。

- 自信。
- 少しのことではへこたれない、ずぶとさ。
- 表現力。
- 思い出。
- 自分をコントロールできるようになった。
- 「No」と言えるようになった。
- 1日1日を後悔のないように生きる努力をするようになった。
- 視野が広がった。
- 強さと優しさ。
- 行動力。
- 自立心。
- 笑顔が多くなった。
- 親離れできた。
- 言葉では言い尽くせないほど、得たものはたくさんあった。
- 達成感。
- 人間味。
- 兄弟!!
- 根性&勇氣。
- 自分を見つめる心。
- 甘えなくなった。
- 知識。
- 責任感。
- 柔軟な考え方ができるようになった。
- 「自立する」とはどういうことか分かった。
- 自分自身を留学前よりも好きになった。
- 自分のことをもっと知ることができた。
- 自分自身の行動に責任をもてるようになった。
- 自分を冷静な目で見ることができるようになった。
- 自分らしさ。
- 立ち直りの早さ。
- 人生を楽しいと思える心。
- 柔軟性と努力する姿勢。

◆これから留学を志す生徒さんに先輩としてのアドバイスをお願いします。

- とにかくうるさいぐらい積極的に話すこと。でも授業はちゃんと受けること。日本人生徒へのイメージが悪くなるから。
- 問題がおこっても良いように考えないと、いちいち腹をたてていたら、1年間は耐えられませんよ。
- 留学に憧れを抱かないこと。
- 「金満国ニッポン」とお金に関しては悪名高いので、留学生として金を派手に使わないこと。
- あんまり力まないで気楽にね。
- 友達作りに1年間気合を入れてください。
- 泣いて下さい、いろんな面で。
- 基礎的英語力を身につけておく。
- 世界情勢に目を向けておく。
- ずばり、行くのをやめましょう。苦勞したくない人は。
- こんな苦しまなくても、日本でまじめに勉強すれば？
- 目的のない人はやめた方がいい。
- 楽しい事ばかりではなく、つらいことの方が多いという事を出発前に自覚しておくこと。
- まあ、頑張れ!!
- いっぱい遊んで、いっぱい学んで実りある1年になるよう努力してください。
- 何か1つでも良いことを得て帰ること。
- 留学が決して日本社会からの逃避であってはいけません。
- アメリカに行っても自分たちは日本人なのであり、日本人としての誇りを持つべき。そして日本に帰っても日本人らしく生きること。
- 日本でも不平不満の多い人は、あちらでも常にそればかり。だったら日本に帰帰って言いたくなる。
- 行く前にもう1度、自主性、自立心、自己主張が身についているか確認してください。
- 行く前に、親離れ子離れしましょう。
- All work and no play make Jack a dull boy!!
- いろんな人間がいます。いろんな考え方、価値観があります。それを受け入れられるだけの度量があれば、あなたも国際人!!
- 依頼心は一切すててください。
- 英語にしても何にしても行く前に勉強しておかないと、後悔先にたたず。
- 日本の物価、特に土地や車の価格を知っておいた方がいい。
- 自分のずうずうしさをみがけ！アメリカでは、神経が太くて調子にの

- りやすい方がよい。
- アメリカの映画や音楽を見て聴いておくと、話題にもなるし、アメリカそのものを幅広く理解できる材料の1つです。
- できるだけ単語力をつけていくこと。
- Writingが大変。日本で英文の日記をつけておくことが必要。
- 今日という日は二度と来ない。
- Keep in your mind, 「always be positive」 whenever you have hard time to go through a year.
- 何でも待ってたんじゃだめ。自分から行くこと。
- 辛いけど、それ以上に得られるものがある。
- Be positive since the first day. Don't be afraid of everything. You can do it!
- 部活に入ろう。
- 分からないことは恥ではなく、当然のことだと頭に入れておくこと。
- よく話し、よく聞き、できることは全てしつつ、時間を大切に。
- 英語力は留学のkeyである。
- 絶対きついで、自分でやれると思うなら、がんばってください。
- 人と話すことを恐れないで、どんどん話そう。
- 最初の3カ月は、死にものぐるいでやってください。
- 自分の国について勉強していくように。
- 自分を思いきって表現するのが1番。
- 楽しむこと。でも、はじめはちゃんとつけること。
- ストレスをためすぎないように。
- 全てが自分次第。
- 留学は地獄です。でも得るものは、とてつもなく大きいです。
- 日本の生活と比べてはダメ。何もかも思い通りにはいきません。
- 甘くないですよー、留学は。
- とことん、Express yourself!!
- 個性を出しきった方がいい。
- どんなにつらくても、楽しい時はやってきます。自分に負けるな。
- 初めから恥を捨ててください。後から後悔しても遅い。
- 話せなくても、とにかく口を開くこと。
- 常に人と触れ合って、1人にはならないこと。
- 「理想と違う」と言っても、きっと分からないと思うけど、この大きな冒険を意義のあるものにしてほしい。
- とにかくalways smile!
- 相手に変わって欲しいと望むより、まず自分が変わるように努める。
- 中途半端な気持ちで行くと絶対に後悔するよ。でも、行ったら何にも代えられない最高の自分だけの財産ができるよ。
- 日本でできないことは、アメリカに行っても絶対にできません。
- 負けないでください。人間、実は強いんです。
- 自分をしっかり持ち、見失わないこと。そして、自分で道を作ること。
- 自分の目標を見失わないこと。
- 覚悟ができている人は、がんばってください。甘い考えを持っている人には、私は全く勧めません。
- 挑戦することや立ち止まってしまふことを恐れずに、ゆっくりでもいいから前に進んで行ってください。自分を信じてがんばろう。
- 自分が「楽しい」と思わないと、留学は楽しくならないよ。
- 現実結構、厳しいです。留学は人生のサバイバル。
- 自分の知っているアメリカをイメージして行くのではなく、アメリカにもいろいろな側面があるので、そこを見てきて欲しい。
- 嫌なことがあっても、次の日には忘れよう。
- とにかくopenに！
- 留学が「遊学」にならないように。
- 出発までの準備期間は、今までに体験したことがないような苦勞や辛さを味わうと思います。でも、それは必ず、感動に変わる日がくるから、自分を信じてがんばってください。
- 留学は、やりたかったら誰にでもできます。でも、自分の努力次第で、ただの自己満足で終わるか、苦勞したけど、それ以上の大きな何かを得ることができるのか決まります。
- 事前学習は、手を抜かないでしっかりやらないと、後でものすごく後悔するよ。
- 留学中にできる親孝行は、留学をいっぱい楽しむことです！
- 自分が苦勞することを、最初から予想しておいてください。でないと、ショックを受けます。
- 人生の中のたった1年だけど、自分次第で、最高の1年にも、最低の1年にもなります。

Questions and Answers

Q01: 1次募集から3次募集までありますが、いつ出願しても同じでしょうか。

A01: 1次募集の締切りと3次募集の締切日は、約4カ月の違いがあります。さらに、1次募集と2次募集の間は約2カ月の違いが発生します。つまり、1次募集者と2次募集者とは、約2カ月の差の中で準備が始まり、1次募集者と3次募集者との間には、約4カ月の準備における差が発生します。そういう意味では、募集が進めば進むほど、センターの判定は厳しくなり、遅れてスタートしても、1次募集者と同様に準備できるかという基準で、判定が行われていくということになります。また、参加者は高校留学生に必要な英語力の基準であるELTiSのスコア212点以上を取得する義務があります。センターでは、全員がこの基準をクリアできるよう、SLEP TESTを定期的に実施し、英語力を測定しながら、英語学習の指導をします。早く出願すれば、早くから事前学習に取り組むことができ、それだけ英語力向上が期待できます。センターの英語学習には「聞く学習」として、日米文化の違い等を説明した英語のCDを聞いて、それを書き取る学習も含まれています。英語を書き取ることで、より集中して英語を聞く習慣がつかますので、リスニングは確実に上達します。ですから、英語力に自信のない方や成績が平均的な方は、できるだけ早い時点で出願し、早めに英語学習を開始し、担当者のアドバイスを耳を傾けた方が得策だろうと思います。

Q02: 高校の何年生で参加するのが理想なのでしょうか。

A02: いつ参加することが最も理想的かという視点では、答えは見つかりません。つまり、各学年で参加することの特徴はあったとしても、各参加者の成績も、環境も、個性も、進路も異なるのですから、どの学年が1番良いという考え方は、望ましい考え方ではありません。各学年で参加する場合の、特徴を十分に理解しておいた方がいいと思います。例えば、高校1年生で参加する場合、出願時は中学3年生であり、高校受験と事前学習が重なり、準備が大変になりますので、出願する場合は第3次募集までに出願することが望ましいと思います。この場合帰国後は、休学扱いの場合は高校1年のままであり、留学扱いで高校2年に進級しても、大学受験に向けて十分な時間を確保することができます。高校2年生で参加する場合、1年間の高校生活にも慣れ、準備においても余裕を持つてすることができ学年となります。しかし、帰国後、高校1年間で学習したものを思い出すまでに、2学期は苦勞することになります。高校3年生で参加する場合、精神的にも大人に近い、落ち着いた年齢となり、異国で1人生活するとき、自己判断力や問題解決能力にもすぐれ、また、米国高校生との交流もより高い次元でのものが可能であり、実質的にも期間中に得るものが多い学年であるといえます。しかし、帰国後、休学扱いの場合でも、大学受験まで約7カ月しかなく、偏差値の高い大学への進路は不利となります。留学扱いで行っても、同級生とは実質的に約3カ月遅れて卒業することになります。実際にセンターで交換留学に参加した、過去の参加者の学年別内訳は、高校1年生が25%、高校2年生が43%、高校3年生が32%となります。

Q03: 学校の先生や両親に高校留学の参加を反対され、大学で留学することを勧められました。どうしたら良いで

しょうか？

A03: まず、皆さんの周囲にいる方々が、なぜそのようなアドバイスをされるのか、というところから考えてみましょう。それにはもちろん個々に様々な理由があるとは思いますが、一概に答えがあるわけではありません。センターの経験上でお話をしますと、日本の教育には、まだ「受験」というシステムが根強くあるからかもしれません。高校生にとっては、大学進学や就職など、高校卒業後の進路がその後の人生に大きくかわってくると考えられているため、例えば学校の先生は、留学することで、「大学受験」や「就職活動」に支障が出ることを懸念するのかもしれません。また、ご家族が高校留学に反対するのは、わが子を異国に送ることへの漠然とした不安や経済的な事情などから、留学という決断を先送りしているのかもしれません。もしくは、周囲の方々は、高校留学よりも大学留学の価値を信じているのかもしれません。まずは、皆さんが高校留学をしたいという強い気持ちを持っているのであれば、周囲の方々が、高校留学に反対する理由をはっきりと知り、自らの考えを伝える必要があるのではないのでしょうか。センターでは、過去に周囲の方々の本当の真意がどこにあるかわからないまま、ただ単に「反対されたので、高校留学をあきらめた。」という方々をたくさん見てきました。そして、彼らのほとんどは、そのことを後悔しているのです。最終的には「自分の人生は、自分で選択する」という視点が大事であり、そのためには、高校留学についての情報収集を行い、知識を得ることが必要です。もちろん、未成年者である高校生は、経済的な面でも保護者のご理解とご協力が不可欠です。周囲の方々と十分に話し合いをし、皆さんの高校留学参加への強い意志と説得力のある行動が周囲の方々に伝われば、きっと道は開かれるはずです。

Q04: 交換留学生の適性とはどのような事でしょうか。

A04: 交換留学生としての適性には、様々な資質が求められます。明るく、社交的で、適応力と自主性に優れていることが、まず、一番に指摘されることだと思います。次に、克己心、判断力、問題解決能力、協調性などが挙げられます。さらに挙げれば、忍耐力、向上心、好奇心、柔軟性、寛容性、自立心などの能力が求められます。もちろん、これまで挙げた能力を、全て備えているという人はおりません。自分自身の性格を考えて、それらの能力がないからといって、悲観することはありません。また、高校留学に不向きな性向は、「わがまま」「自己中心的」であることを指摘できると思います。もし、友人や知人から、よくそのように指摘される人は、苦勞が多くなることは間違いありません。でも、これら個別の能力の有無で、一喜一憂する必要はありません。総合的に判断する必要があります。

Q05: 低い英語力でも、高い判定を受けることがありますか。

A05: センターの、このプログラムに対する考え方は、優秀な成績を持つ生徒だけを選考するのではなく、留学の意志のある者をセンターで「育てていく」という視点で考えています。すなわち、英語力が平均的であっても、留学の意欲が強くあり、留学適性や人格的なものが抜群であったり、さらには、特筆すべき特技の持ち主とか、何かに抜きんでた才能を持つとか、人的交流に情熱を持っているとか、ボランティア活動に積極的

であるとかなどの、留学希望者の持つ個々の才能や個性が、審査の際には大きな要因となり、高い判定をすることが数多くあります。センターが書類だけでは判定しづらい出願者に対して保護者同伴の上、個別に約3時間のカウンセリングを行ない、判定するというのも大きな意味があるのです。ただし、このような場合でも、出発までにELTiS212点以上の取得義務は当然変わりませんので、早めの段階で出願して、事前準備に取り掛かって、センター指導の下に必要な英語力を養っていくという方法で対応して欲しいと思います。

Q06: 事前学習がたくさんありますが、終了できますか。

A06: 「センターの高校留学は事前学習が大変だから、別の業者の制度で行く」という人がいました。学校の先輩からその大変さを聞かされたのだそうです。でもよく考えてください。なんだか変です。そのような姿勢では、高校留学そのものが成功するはずありません。高校留学は、センターの事前学習以上に大変なことなのです。毎年、参加した生徒はこれらの事前学習を終了して、出発していきます。だからこそ、高校留学そのものもうまくやっていくことが出来るのです。事前学習をやり通すことができなかったら、留学しても得るものより失うことの方が多かったということすら起こるのです。みんなががんばってやっているわけですから、あなただけやれないわけはありません。気持ちで負けないでください。

Q07: 留学準備期間中は、どのようなことを勉強しておけばよいのでしょうか。

A07: まず、センターの「英語学習」をやっていただきます。また、今まで習った英文法も総復習する必要があります。英語の勉強以外では、同じくセンターから与えられる「自由研修」を通して自分自身の意見を持てるように、どんな些細な事も自分で問題意識を持って考える訓練を行ってください。そのためには、新聞には毎日目を通して日本国内のみならず世界の情勢にも関心を持つようにしてください。さらにこれまでの参加者が指摘してきた通り、案外、身近な日本の事についての知識が不足しています。日本の事について聞かれた時に最低限答えられる程度の知識も身につけておきましょう。いずれにせよ、センターが提供する事前学習の指示通りに準備を行っていけば、それで充分だと思います。勉強方法で悩むことはありません。

Q08: オリエンテーションがたくさんあるのですが、全部受けなければなりませんか。

A08: この留学は、オリエンテーションが大変充実していることが大きな特色の一つであり、これを受けることが、留学への成功の近道であると考えています。そして、それらの費用は留学生参加費用の中に含まれていて、何回も説明してありますが、これだけの量のオリエンテーションを日本で実施している団体は多くありません。それを逆に嫌がる参加者もいますが、それは本末転倒であり、留学を通してより多くの事を得るために、このオリエンテーションは非常に重要であると、センターでは考えています。特に春のオリエンテーション前は、参加者は極度に神経質になり、不安を訴える者が多くなります。ところが、オリエンテーション終了後、大勢の同じ目的を持つ者と時間を過ごし、その夢に向けて現実的な視点で留学を捉えるようになります。そしてそれまで、一人で黙々と留学の準備をしていたのに、異なる県の友人たちが数多くできて、仲間意識が芽生え、勇気が湧いてきます。これまで、このオリエンテーションに参加した生徒のほぼ全員が、このオリエンテーションを高く評価し、絶賛し

ています。中には、もし留学しなかったとしても、このオリエンテーションで学んだことは自分の人生に大きく影響してくるだろうとアンケートで答えている生徒もいます。不安で心配かもしれませんが、勇気を持って臨んで欲しいと思います。

Q09: 留学準備中に、参加を取消されることがありますか。

A09: もちろん、いくつかの理由によって、そのような事態が発生する可能性はあります。例えば、事前学習の取り組みが怠惰であったり、オリエンテーションを修了できなかったり、出願後に成績が下降していったり、交換留学生として不適格な言動をとったり、さらには、このパンフレットに記載されている参加資格に抵触する事実や内容が判明したりした場合など、いろいろな理由によってそのような事態が考えられます。特に、出願してから出発するまで1年以上もありますので、この間に就学時とは状況が変わり、当然上記のような事態になる可能性はあります。ただし、自らの意志の強さを試されることでもありますので、交換留学生としての真剣な姿勢で取り組みさえすれば、当然回避できる問題でもあります。

**Q10: ELTiSとSLEP TESTの違いは何ですか？
ELTiS212点はどれ位のレベルですか？**

A10: ELTiSは、英語の知識量を問うSLEP TESTや英語検定試験に比べ、英語を道具として使う、実践的な英語運用能力を問う問題形式といえます。数学の計算問題や、統計グラフを読み取る問題など、アメリカの高校の授業を想定した内容が特徴です。ELTiS212点の取得には、英検2級程度の英語力と、ELTiSの問題形式に沿った対策が必要となるでしょう。

Q11: SLEP TESTで50点以上、ELTiS212点以上を取りましたが、留学事前講座は受講した方がよいのでしょうか。

A11: 本当に生徒のことを考えれば、センターでは留学事前講座を受講されることを勧めざるを得ません。何故ならば、いかに英語力のある生徒でも、留学初期の頃の授業では、ほとんど分からない状態がしばらくは続くからです。しかし、余分な費用が必要となりますので、それを積極的に勧めることはできません。保護者と十分に相談して、任意に考えて判断してください。

Q12: 出発までに、ELTiSの点数が212点以上を取れなかった場合どうなるのですか。

A12: 大変重要な質問です。出願時期によって、第一次募集、第二次募集、第三次募集と分けて募集は行われます。第一次募集で出願した人は、出発までに一年以上の準備期間がありますが、第三次募集で出願した人は約9カ月の準備期間になります。センターではSLEPやELTiSの試験を数回受ける機会を作りますので、日本を出発するまでに212点以上のスコアを取得しなければなりません。さらに、数年前まで交換留学生の英語力判定試験として利用されていたSLEPも補助的な試験として活用しながら、ELTiS212点以上の取得に向けてサポートしていきます。でも、既に説明されているように、規定の期日までに212点以上のスコアに到達しない場合は、留学事前講座を受講していただくことになります。但し、期日以降日本出発までの間にも、先述しました両方の試験は定期的に実施されますが、その間に規定のスコアを取得することができたとしても、講座の受講は必要となります。そして、米国に出発後の講座期間中にも同様の試験が行われます。もし、あなたが日本を出発するまで、212点以上のスコアを取らず、さらに、その講座期間中においても、212点

以上のスコアに達することができなければ、講座終了後に帰国するという重要な事態が起こります。このような事例は、これまで3名発生しています。全体的には全参加者の0.3%という割合ではありますが、当事者にとっては最悪の結果というだけでなく、センターにとっても極めて不名誉なことになります。また、米国国務省が交換留学生に求める英語力試験の数値（旧試験のSLEPで45点以上、現行のELTiSで212点以上）、この点数を出願時に（つまり、出発の約一年前に）クリアした留学生の割合は全参加者の15%程度にしすぎません。ですから、80%以上の留学生が準備期間中に英語力を伸ばしていることがわかります。でも、あなたにとって、それは単なるデータでしかなく、全出願者にその結果が保証されているわけでもありません。結局、留学を希望するあなた本人が、交換留学生として、米国国務省から求められているELTiS212点以上のスコアを、出発までに取るという強い覚悟と結果が求められているのであり、それができなかった場合は、背水の陣を引いて日本を出発し、留学事前講座を受講し、それでもなお212点以上のスコアが取れない場合は、当然のこととして、米国の高校から受け入れを拒否されるという結果があるだけです。さらに、その後、早期帰国や強制送還の対象となり、その場合の帰国経費も別途必要になる可能性があるだけでなく、出発までに支払った費用も返還されることはありません。それらの理由は、センターも現地公益教育法人も、留学生が高校入学時には規定のELTiS212点以上を取得するものとして、取得することを前提で、全ての事務作業が同時進行して行われていくからです。英語力の向上や努力することにおいて、その自信や覚悟がないのなら、高校留学そのものを断念することです。高校留学は極めて価値の高い体験ですが、反面このような厳しさがあることも承知して下さい。

Q13: 英語力が不安ですが、授業についていけますか。

A13: 高校生活は、8月下旬から9月上旬にスタートしますが初めの数カ月間は、学校の授業や宿題等にどの留学生も苦労しています。英語での環境に適応し、慣れるまでは、ほとんどすべての留学生は、不安と困難を感じるのが当然とも言えます。ところが、学校生活が始まって3カ月を過ぎる頃になると、学校の授業にも要領を得、耳も慣れ、成績も向上し始めます。成績の評価方法は、小テスト、宿題の提出状況、授業中の態度、出席状況、定期テスト等で総合的に評価されます。分からない時は、黙っていないで、先生に相談し、心を開いて自分のできる範囲で前向きに努力すれば、悪い評価を受けません。もちろん、出発前にELTiS212点以上のスコアを取得していることを前提にした話であり、前向きな努力を続けられ、努力しただけ、英語力も伸びてきます。留学生の中には、学期末に学校の成績優秀者に選ばれる者も毎年出ています。

Q14: 1年間の高校留学で、どの程度英会話力や英語力は向上しますか？

A14: 多くの高校生は、1年間高校留学をするとペラペラと英語を話せるようになると考えている人が多いようですが、かなりの個人差があります。1年後にほとんどの参加者は、日常生活には全く不自由をしないリスニング力を身に付けることはできます。しかし、話すことにおいては、よく話した人と余り話さなかった人とで、大きな差が発生します。大事なことは次のことです。高校留学参加者の英語力は、各自個人差があります。でも、1年後の帰国時においても同様に個人差があります。特筆できることは、出発時の個人の英語力の序列は、帰国時の英語力の序列と全く変わらないと

いうことです。つまり、出発時に英語力が低かった者が、高かった者を超えて帰国することはないということです。出発時の英語力は、帰国時の英語力を占めるのです。出発時点で英語力が高かった者は、留学初期から、同期生の平均以上に英語を話せるわけですから、1年後は益々英語が話せるようになります。同様に、平均以下の英語力の者は、留学初期は、英語を思うように話せません。1年後の英語力も同期生の平均以下でしか推移しないのです。ということは、出発までの英語の学習が、高校留学のすべてであるということになります。センターでは、高校留学生に対して、出発前に英検2級に合格をし、帰国後に英検準1級を取得することを目標に掲げています。下記は、これまで高校留学に参加した留学生への帰国後の英語力に関するアンケート結果です。

—帰国後の英語力—

帰国後の英語力に関するアンケート結果です。

(回答者は170名)

帰国後、英語検定を受験した人は108名で、

準2級合格者	3人	準1級合格者	60人
2級合格者	46人	1級合格者	8人

帰国後、TOEFLを受験した人は17名で、

451点～500点	3人	551点～600点	6人
501点～550点	5人	601点～650点	3人

帰国後、TOEICを受験した人は36名で、

501点～600点	3人	801点～900点	15人
601点～700点	10人	901点以上	3人
701点～800点	5人		

Q15: 短期のホームステイに参加したことがあるのですが、その家庭から高校に通う事ができますか。

A15: 以前お世話くださったホストファミリー宅から、現地公立高校に留学するには、そのホストファミリーと学区内の高校が受け入れを了承されることが必要です。ホストファミリーと連絡を取り合い、先方と話し合われた上で、既に、ホストファミリーが了承している場合は、その旨をセンターへご連絡ください。また、「できるなら、その家庭にお世話になりながら通学したい」という程度でしたら、米国公益教育法人の方でそのホストファミリーの意向をお尋ねして、ホストファミリーと学区内の高校が受け入れを了承されたら、可能ということになります。

Q16: アレルギーや持病がありますが、参加できますか？

A16: アレルギーや持病があることが、自動的に参加資格がないことに直結はしませんが、アレルギーの内容によっては、米国公益教育法人より受け入れを拒否されたり、条件付き受け入れという判断をされる場合があります。また、受け入れにあたり、プログラム費用とは別に、追加で費用の支払いを求められることがあります。具体的には、犬や猫などの生物にアレルギー症状のある留学生、特定の食物や抗原に対して重度のアレルギーがあり、受け入れに特別な配慮が求められる留学生、そしてベジタリアン（菜食主義）の留学生は、米国公益教育法人に追加の支払いが発生します。もちろんアレルギー症状などは程度問題もありますので、追加の支払いが必要かどうかは個別に判断されること

になりますが、記述のとおり、追加費用の可能性があるのでご承知ください。個別にご相談等がございましたら、どうぞセンターへお問い合わせください。

Q17: センターの交換留学では、日本で受入れをする必要があるのですか。

A17: この交換留学は、日本で義務的に外国からの留学生を受入れる必要は全くありません。

Q18: 留学期間中、本人の在籍している日本の高校では、どのような取り扱いになりますか。

A18: 1988年度4月から高校留学において取得した単位が正式に日本の高校の単位として認められるようになります。そのため、現在では必ずしも休学して留年しなくてもよいのです。例えば、高校2年の1学期終了後、1年間留学した場合、帰国して高校3年の2学期から復学することも可能です。但し、進級についての判断は最終的には各高校の学校長が、留学期間中に取得した単位や出席状況、学習内容を考慮し、決定しますので、その判断は各高校によって異なる可能性もあります。事前に在籍高校に確認する必要があります。留学に関する在籍高校への手続きとして、留学届（留年せずに進級または卒業）または休学届（留年し同級生とは1年遅れで卒業）のいずれかを提出しなければなりません。これまでの参加者では、どちらかと言えば、留学届で復学した生徒の方が多いようですが、帰国後の大学受験のために、十分な時間を確保することを考え、休学届を希望する生徒もいます。どちらを選択するかは、各留学生の進路等を考慮し、ご家族や先生方と相談しながら決定することになります。

Q19: 工業高校に通っていますが、学校の先生から、留学届で行く場合は、単位を認定するために、アメリカの高校で同等の科目をとるように言われましたが、可能でしょうか？

A19: 高校留学で得られる単位の認定に関しては、一つ一つの教科の単位の読み替えをするわけではなく、包括的に1年間の留学が有益なものであったかどうかということで、総合的に評価されます。出席状況や成績や単位などを見て、最終的には各高校の学校長の裁量で判断されます。そのため、日本の高校で履修している科目を考慮して、アメリカの高校での履修科目を決める必要はありません。そもそも、他国の高校に留学するわけですから、学校の仕組みや制度も、授業内容も異なりますので、日本の高校における科目と同等のものを履修するというのは、不可能なことでしょう。なお、アメリカの公立高校では、日本とは異なり、一般的に200科目ほどの科目が用意されており、日本にはないような科目を履修することが可能です。

Q20: 現地の高校は、交換留学生にどのような対応をしているのでしょうか。

A20: よく留学生が誤解しているのがこの問題です。参加者は現地受入高校が、交換留学生に何らかの特別な対応をするのではないかと期待している人が多いようです。例えば、英語ができないことで、特別な対応をしてくれるとか、最初は、学校の誰かが特別に留学生のために親身になって、お世話してくれるとか、アメリカ人の同級生が、交換留学生として、特別な目で見えて、親しく話しかけてくれるとかなどのことを当然のこととして期待しています。でも、現実ではこれらのことは、一切、ありません。日本的な甘えた依存心からくる発想です。上記のようなことが期待できないばかりでなく、通常のアメリカーン高校生の一員として、学校側から何ら特別な対応を受けることは全くありません。

Q21: 日本では進学校に通っています。アメリカでもそのような進学校に通うことが可能でしょうか？

A21: ここでは、まず日米の教育の違いを知る必要があります。アメリカでは公立高校までは、義務教育となるため、日本の公立中学校と同じと考えてください。つまり、その住民である限りは、居住地区にある公立高校には無償で通うことができるわけです。日本では高校受験というものがありますので、当然偏差値の異なる高校というものが頭には浮かぶと思いますが、アメリカでは日本のような高校受験はありません。そのため、偏差値による高校の違いというものはありません。

Q22: 留学先高校は、どのように振り分けられるのですか。

A22: 果たして、自分の留学先の高校は、何州の、どの町の、どの高校なのだろうかと、興味は尽きないことだろうと思います。残念ながら、留学生が留学先を希望することはできません。米国公益教育法人が、留学生の提出するあらゆる書類を適宜判断し、受入れてくれる高校を最優先事項として、全米各州に振り分けていきます。これまでの例では、西海岸三州（カリフォルニア州、オレゴン州、ワシントン州）に派遣された生徒が最も多く、約70%になります。次に、モンタナ州、アイダホ州、コロラド州、アイオワ州、テキサス州、イリノイ州、オハイオ州、ケンタッキー州、ニューヨーク州、ペンシルバニア州、ミズーリ州、マサチューセッツ州、ミシガン州、ニューハンプシャー州、インディアナ州、ミシシッピ州、ウィスコンシン州、メイン州、ジョージア州、アラスカ州、ロードアイランド州などに派遣されています。

Q23: アメリカの高校では、日本の在籍高校の学年と同学年に入るのですか？

A23: アメリカの高校で、どの学年に割り当てられるかは、学校側の判断になります。ほとんどの場合、同じ学年に入ることになりますが、学校側の判断で、日本での学年とは異なる学年に割り当てられることもあります。但し、そのことで留学生にとって不利益な状況は起こりません。

Q24: ホストファミリーはどのような方々ですか。

A24: ホストファミリーはボランティアで参加者をお世話していただく、普通のアメリカ人家庭です。人種や民族や宗教、思想、家族構成、婚姻形態、年齢などによる差別や偏りはありません。特に、日本人がアメリカ人としてすぐにイメージ化する、アングロサクソンのアメリカ人というわけではありません。ご存知の通り、アメリカは人種のつぼであり、そこに国籍を持つ者は、人種や民族に関係なくアメリカ人ですから、ある特定の集団に偏った形でホストファミリーが決定することはありません。同様に、すべての家庭に、必ず同世代の子供がいるというわけでもありません。ただ唯一、ホストファミリーに共通するものは、ボランティアであるということだけです。

Q25: ホストファミリーと良い関係を作るにはどうしたらいいのでしょうか？

A25: ホストファミリーと良好な人間関係を作り上げることは、大変重要なことです。過去に参加した留学生でも、留学期間中に第2の家族と呼ぶほどの関係を築き、さらにその後の人生を通して、その関係を深め、強い絆を育て続けている留学生がたくさんいます。人間関係の構築に、唯一の方法や王道はありませんが、日本での日常生活で人間関係を作る時と同様に、アメリカでもホストファミリーに積極的に関わって、時間や体験を共有し、試行錯誤をしながら時間をかけて人間

関係を土台から作っていく過程が必要でしょう。そして、ホストファミリーとの生活で、頻繁に感謝の気持ちを表すことは非常に大切なことです。そのために、ホストファミリーが無償で留学生を自宅に受け入れてくださっているという事実、そして10カ月という長期間、アメリカでの保護者として、留学生のお世話をしてくださっているということ、これらをまずは理解する必要があります。ホストファミリーがいなければ、高校留学という経験は不可能です。ホストファミリーには、留学生をお世話する義務はなく、留学生はお世話していただくという立場です。それらを理解するだけでも、ホストファミリーに対して自然と感謝の気持ちは湧いてくるはずです。センターでは、以上のことも含めて、オリエンテーションでも、留学を成功させるために、留学生に様々なアドバイスや指導を行ってまいります。

Q26: 期間中、ホストファミリーが変わる事がありますか。

A26: ホストファミリーの変更は、ホストファミリーの引越や突発的に生じた事由により、発生する事があります。長期間の滞在となれば、予期できない事もあり、生徒によっては、ホストファミリーが複数回チェンジする事も往々にあります。

Q27: 留学期間中、生徒と直接連絡をとっても良いのでしょうか？

A27: センターでは、留学期間中の生徒と保護者間の連絡は、特に制限を設けていません。しかし、裏返してみれば、制限なく、気軽に連絡を取ることができる環境下に置かれることになり、それによって様々なトラブルを引き起こす可能性があるということになります。例えば、ホームシックの誘発、文化交流の妨げなど、トラブルになりかねない多くの展開が予測されます。但し、お小遣い送金のことや日本の在籍高校との事務的な連絡事項など、必要な連絡もあると思いますので、保護者と生徒間との距離を一定に保った上で、適切に連絡を取ることをお願いしております。

Q28: 治安はよいのでしょうか。また、危機管理に関する指導は行われるのですか。

A28: アメリカは治安が悪いというイメージがあります。拳銃や麻薬類が氾濫し、常に危険と隣り合わせなのが日常的という感じで考えてしまいがちです。しかし、このイメージをアメリカ全土にあてはめてしまうのは、とんでもない間違いです。このイメージとは程遠い環境のアメリカも数多くあります。確かに、日本は世界のどここの国とも比較できないほど安全で、治安は安定しています。ですから、我々日本人はそういう環境が当たり前と考えているのですが、同様の環境を日本以外に見つけることは不可能です。反面、日本が安全だけに、日本人には危機管理能力に問題性が見られます。日本に住むなら危機管理能力をとやかく言う必要はないかもしれませんが、そうでない国が多いわけですから、危機管理は海外ではとても重要な要素となるわけです。治安が悪いことによって、犯罪や事故に遭遇することも多くあるでしょうが、危機管理のあり方を学習することによって、危機から回避することが出来る可能性が高くなります。そこで、センターでは、危機管理に関する事前学習を春の2次オリエンテーションで徹底的に指導しています。日本人が海外で犯罪や事故に巻き込まれるのは、治安の悪さもありますが、むしろそれ以上に危機管理能力の欠如がその最大の原因となっていることを理解しておく必要があります。



Q29: 留学期間中、アジア人であることによる人種差別の心配はないのでしょうか？

A29: アメリカは多民族国家であるがゆえ、様々な人種、民族と共存した社会が構築されていますが、万人が全て同じ価値観を共有しているわけではありません。人種差別の問題も同様であり、行く先々の地域で、どのような思想を持った人に出会えるか予測できません。数十年前と比べると、差別意識は格段に薄まりつつありますが、それでも、わずか50年前まで、公民権運動が盛んだった国でもあり、その不安が払拭できていないとは断定できません。留学期間中は、そのような人種差別の問題も、生徒自身に降りかかる試練の1つとして、うまく対応するために、また、同時に留学生自身が差別を行う立場になることを防ぐことも含めて、オリエンテーション等を通して指導していきますので、留学生の皆さんはしっかりと学習していくことが大切です。

Q30: 留学期間中、携帯電話を持っていくことはできますか？

A30: センターではこれまで、携帯電話の持参を禁止しておりました。これは携帯電話が交換留学の目的である「文化交流」を阻害する要因として考えられるためです。あらゆるトラブルの引き金となり得る携帯電話は、留学生にとって害悪なものにしかならない、という見方がセンターの見解です。しかし、SNSが一般化している現代社会において、携帯電話が必需品として、生活の中に浸透しつつあるのも紛れもない事実です。現在では、携帯電話を所持している生徒が至るところで見受けられ、皆が気軽に連絡できる状態にあり、むしろそうでなければならないという風潮さえ、普遍的な価値観として多くの人々に認識されています。そこでセンターでは、38期生より携帯電話の持参については「任意」として対応しております。つまり、あくまでも各ご家庭の判断に任せております。なお、留学期間中の携帯電話に関する如何なるトラブルも、センターでは一切の責任を負いませんので、十分ご理解ください。

Q31: 米国の西海岸から留学地までの移動費用は、参加者個人によって異なるということですが…。

A31: この交換留学の費用は、参加者が疑問を感じないように、詳細を具体的に明示しており、結果的に、同様のプログラムの中でも、かなり安価な費用（15日間のオリエンテーションの食事代、宿泊費まで含まれていることを考えると）になっています。参加者は同じ交換留学に参加していますので、当然同じ費用になります。唯一違うのは、米国内での滞在先の場所が、州単位で違うということです。ですから、例えば、西海岸のカリフォルニア州の高校に通う生徒と、東海岸のニューヨーク州の高校に通う生徒の場合、米国内での移動費が大幅に異なってくるのは当たり前です。通常は、これらの米国内での移動費用をある程度平均化して参

加費用を設定し、参加者の均一化を図るという方法をとっていますが、センターでは、参加者の行き先に応じて、米国内での移動費用を、個人的にかかった費用として、別途徴収する方法をとっています。その際の起点となるのは、米国出入国する際の米国西海岸にある国際線離発着空港と考えています。到着日と1年後の出発日の往復の費用の目安は次の通りです。車で移動する場合、約2万～2万5千円、西海岸三州（カリフォルニア州、オレゴン州、ワシントン州）を飛行機での移動の場合は約3万円～約4万5千円、大体、参加者の約70%程度はこの三州に滞在先が決定しています。これ以外の州に飛行機で移動する場合は、6万円～10万円ぐらいになります。

Q32: 留学先の高校やホストファミリーが決定するのはいつ頃ですか。

A32: 一概に申し上げられませんが、過去の事例で説明しますと、1番早く決定した者は1月でした。そして、3月末までに決定した者が全体の30%、5月末までに決定した者が全体の75%、7月末までに決定した者が全体の95%でした。最後の5%の留学生は、8月になって決定しております。アメリカの高校は通常、9月上旬から始まりますので、8月下旬に出発しますが、特に、約1カ月間の留学事前講座を受講する者は7月の中旬には日本を出発しますので、それらの参加者の中には、出発時点では、留学先が未決定のまま出発することになる生徒もいます。

Q33: 留学中のお小遣いはどのくらい必要ですか。

A33: 文具類、学校内のカフェテリアでとる昼食代、諸雑費のほか、お小遣いもいれて月150ドルで十分です。アメリカの子供達は、自分でアルバイトをしてお小遣いを捻出しており、普段高額のお金を持ち歩いていませんので、高額のお金の所持はトラブルの原因となりますので、慎んでください。

Q34: 留学期間中に、日本へ一時帰国することはできますか？

A34: 稀なケースとして、健康上の問題で、日本での治療が必要になった場合等、やむを得ない事情で一時帰国する可能性は考えられますが、原則、プログラム期間中に日本へ一時帰国することはできません。10カ月という限られた期間ですので、プログラム期間中はアメリカの生活に没頭し、様々な経験や学習をし、その貴重な時間を精一杯有効活用するよう努めてください。

Q35: 留学期間中に病気や怪我をした場合不安ですが…。

A35: 病気やけがをした場合、当然、病院に行くことになります。アメリカの医療は世界の最高レベルにあり、医療設備や医療環境も日本以上に進んでおります。ですから、アメリカで治療を受けることそのものに不安を抱かれる必要はないと思います。むしろ、医療費が極めて高額ですので、補償内容の充実した海外旅行保険に加入しておかれることを強くお勧めいたします。

Q36: 留学期間中にトラブルは発生するのでしょうか。また、その時、どうすればいいのでしょうか。

A36: センターでは、トラブルに対してどう対応するかについても、オリエンテーションで詳細を指導しますので、心配される必要はありませんが、現段階では次のことを知っておいてください。まず、トラブルには避けられないものと、避けられるものがあるということを知っておくべきです。そして、期間中におこるトラブルは、大体、言葉の問題、人間関係の問題、成績の問題、金銭問題に集約されます。トラブルを抱えることのな

い留学生は絶対に皆無です。すなわち、何らかの問題や悩みや心配を抱えながら、日常生活を送ることになります。異文化の生活では、「はじめに問題ありき」という視点で臨み、それらの問題をどう解決していくかと鷹揚に考えていくことです。もちろん、最大限にトラブルを回避するための努力は必要です。それでも、回避できない問題は必ず発生しますのでパニックにならず、オリエンテーションで指導された対処方法で、対応することです。

Q37: 留学期間中、身近に日本語で相談できる人はいますか？

A37: 現地には日本人のスタッフはおりません。期間中に留学生が抱える悩みや問題は、留学生の直属カウンセラー（アカデミックコーディネーター）に相談します。現地で起こった問題は現地で解決することを基本としますが、必要な場合は、センター職員がe-mail等で留学生へアドバイスをを行います。

Q38: 強制送還や、途中帰国がありますか。その場合はどのような対応になりますか。

A38: 留学期間中に強制送還されたり、途中帰国するような事態が発生することが、留学生や保護者にとっては最悪のケースであるといえます。それはプログラム実施者側にも同様の事がいえます。心配されるようなケースは、残念ながら起こります。強制送還になる場合の理由は、プログラム規則や趣旨に違反した行動をとったりした場合に起こりますので、自分の行動の結果責任ですから、今から心配するようなことではないかもしれません。欲望管理や行動管理などの自己管理をしっかりして、周囲に流されることなく、当初の留学目的に自らが誠実に行動できれば、全くの杞憂にすぎません。むしろ、不幸なケースは健康上の理由で、医師からそれを勧められたりした場合などです。異文化での生活には精神的タフネスが必要です。心配事や悩みは必ず発生します。ノイローゼやストレスからくる精神不安定や情緒不安定などの状態に陥ったとき、医師から本国での治療を勧められたりする場合があります。なお、これらの強制送還や途中帰国が発生した場合は、帰国そのものが緊急になりますので、帰国費用などに関して別途費用が発生したり、このパンフレットに記載された内容とは、全く異なる対応などが発生することを承知しておいてください。

Q39: センターのプログラム上の立場と役割は何ですか。

A39: このプログラムでのセンターの主な役割は、日本における参加者の募集と、出発までの事前研修と事後研修を行うことです。つまり、日本サイドにおける参加者の指導を担当しています。もちろん、参加者の留学手続きや、渡航手続きなどの事務的なこともありますが、それ以上に、参加者を出発までに事前学習などを通して、徹底して指導して、留学生を「育てていく」というのがセンターの考え方です。参加者に留学手続きなどの事務作業をすすめていくという、従来の日本サイドの仕事だけでは、留学生の準備は不十分です。日本の学業成績が優秀だからということだけで、留学が成功するほど甘くはありません。指導なき高校留学は、参加者にも、実施者側にも、危機管理そのものが欠落しているといえるでしょう。また、留学期間中は保護者からの相談やアドバイスのにも対応したり、米国公益教育法人から送られてくるレポートや留学生の様子をセンターが中継して、保護者に連絡します。

Q40: 再適応オリエンテーションの前に、日本の高校に復学するのですが、それでも再適応オリエンテーションに参加しなければなりませんか？

A40: センターでは、日本の高校への復学については、再適応オリエンテーションの後に行っていただきたいと考えておりますが、学校の事情等でそれが叶わないことがあることも理解しております。ただ、その場合でも、やはり再適応オリエンテーションには参加されることを強く勧めます。約1年間、アメリカ人家族と家庭生活や市民生活を送り、アメリカの高校生と同じように学校生活を送ってきた高校留学生は、異文化の影響を受け、価値観や考え方、言動など、アメリカ人とほぼ同様な状態にあると言えるでしょう。しかし、当の本人はそのような自分自身の変化に気づいていません。そのことに起因する、日本における逆カルチャーショックや不適応など様々な問題が発生することになります。これらは、当然学校生活に限らず、家庭生活や社会生活などあらゆる場面で現れます。再適応オリエンテーションでは、留学生が日本での生活に円滑に適応していく手助けのため、今後発生し得る問題等を、過去の経験を具体的に提示しながら、指導していきます。

Q41: 交換留学終了後、引き続き留学することは可能ですか。

A41: このプログラムでは、米国国務省管轄である交流訪問者（J-1）ビザを取得しますので、期間は1年間と制限されています。しかし、この高校交換留学プログラムに参加する生徒だけを対象に、学生（F-1）ビザを取得し、引き続き同じ地域の公立高校、又は、私立高校の卒業を目的として継続留学するプログラムがございます。もちろん、米国高校の卒業が保証されるものではありませんが、そのプログラムを利用されると、留学中、高校交換留学プログラム同様、米国公益教育法人と、センターからサポートを受けることができます。ただし、2年目以降の留学プログラムでは、プログラム参加費用に加え、高校の授業料とホストファミリーへの支払いが別途に発生いたします。なお、この留学継続プログラムには、複雑な参加条件が多くなりますので、事前にお問い合わせください。

Q42: 帰国後の進路選択にはどのようなものが考えられますか？

A42: 「留学」から連想されるものとして、大体の方々が「英語」をお考えになると思いますが、実際に留学を終えた生徒たちは、多岐の分野に亘る進路を歩んでいます。英語を専門とした道を進む生徒は却って少なく、医師や研究職などの理系の側面を持った分野を目指す生徒らが増えてきているのが最近の傾向として見受けられます。実際、過去の参加者は、次のような職業に就いています。医師、看護師、大学教授、キャビンアテンダント、航空会社勤務、国家・地方公務員、教員、家業、銀行員、警察官、心理カウンセラー、英会話教師、病院職員、貿易会社勤務、米軍基地勤務、国際公務員、海外で日本料理店経営、自営業など。

Q43: この交換留学と語学、大学留学の違いは何ですか。

A43: 交換留学とは、高校時代にしかできない留学で、語学習得ではなく、文化交流を目的としています。最初からアメリカの高校生と肩を並べて授業を受けるほか、家庭生活、あらゆる日常生活の場に英語があふれています。また、このような環境の中では、言葉の不自由さ、異文化に対する戸惑い、対人関係などの幾多の困難に直面します。これらの困難を乗り越えながら人間的成長をとげ、さらに、相互理解を深めることができるのがこの留学の良さと言えます。大学の正規留学とは、学生の学びたい専門分野を、よりその分野の研究

が進んでいる大学や大学院へ行行って勉強する為の留学です。アメリカでいう大学は、誰でも進学するものでなく、真に勉強したい人だけが行きます。それだけ、内容も濃く、大学生は遊ぶ暇もない程忙しく、勉強します。ですから当然大学に入学する以前に大学の授業を受講できる程度の英語力が必要とされます。その為、ほとんどの学生がまず、語学研修から始めます。この語学研修は、英語を母国語としない人と一緒に授業を受ける事になります。これが語学留学と言われるものであり、現在、日本から留学する人達の90%以上が最初の段階でこの形をとっています。学生の中には、正規の大学生活に入る前に、この段階で正規留学を断念するケースも多く見られます。将来的にアメリカの大学に進学される方は、交換留学を経験し、ある程度の英語力をつけ、異文化生活に対する準備をしておくのも1つの方法でしょう。実際、交換留学してからアメリカの大学へ進学するケースもあります。

Q44: 交換留学以外で米国高校に留学できるプログラムはありますか？

A44: 参加者の目的や希望、条件に合った私立高校に留学するプログラムがあります。希望する留学地域に留学できますし、スポーツや芸術などの専門分野に特化した高校への留学や、米国高校の卒業を目的とした1年以上の留学も可能です。日本の高等学校に在籍していない方でも参加できますし、過去の学業成績において多少不安のある方など、交換留学の参加資格に抵触する方でも参加できる可能性があります。また、参加者は、交換留学生と同様に、留学準備期間中は、センターによる事前学習とオリエンテーションを受け、留学期間中は、米国公益教育法人とセンターによる充実したサポートが受けられます。ただし、私立高校留学では、授業料とホームステイ費用は個人負担となりますので、年間の留学費用は交換留学に比べ高額となります。詳しくは、お問い合わせください。



第 期 米国公立高校交換留学出願書

※記入不要

										CODE						
県	高1	高2	高3	県番号				高1	高2	高3	全体番号				担当者名	

フリガナ氏名						男女	生年月日	西暦	年	月	日	出生地	市郡
フリガナ現住所	〒()-()							☎()-()-()					
	県市郡							FAX()-()-()					
フリガナ家族の住所	〒()-()							☎()-()-()					
	県市郡							FAX()-()-()					

学校名	入学年月	中学校		年	科
小学校	年 月	高 校			
中学校	年 月	担任教師			
高 校	年 月	英語教師			

3.5 cm × 4.5 cm
写 真 貼 付
(スピード写真可)

学校所在地	〒()-() 市郡 県 ☎()-()-()				
-------	----------------------------	--	--	--	--

続柄	氏 名	生年月日	職業（会社名及び学校名）
父		西暦 月 日	
母		西暦 月 日	
		西暦 月 日	
		西暦 月 日	
		西暦 月 日	

5段階評価 年 学期
※最新の成績を記入してください。

国 語	
数 学	
理 科	
社 会	
英 語	
美 術	
音 楽	
体 育	
技 術	

※家族全員について書いてください

保護者先 連絡先	氏名() ☎()-()-()
	携帯電話()
	メールアドレス()

長 所		短 所	
特 技		習 い 事	
趣 味		部 活 動	
得意教科		不得意教科	
高校への届出	留学届 ・ 休学届 ・ 未定	志望進路	
英 検	無 ・ 有 () 級	英 会 話	1 . 流 暢 2 . 普 通 3 . 少 し 4 . できない
アレルギー		持病・既往症	無 ・ 有 ()
過去の参加者を知っていたら名前を書いてください			
このプログラムを何で知りましたか			

全体席次 年 学期
番
人中

生徒会役員歴	
--------	--

私は、南日本カルチャーセンターの米国公立高校交換留学に、必要書類を添えて出願します。

年 月 日

本人署名 印

保護者署名 印

出願料20,000円は 月 日 ☐ () に振り込みました。
☐ 現金書留で送金しました。
☐ 南日本カルチャーセンターの () に支払いました。

このプログラムに参加しようと思った動機

自宅より最寄のバス停・駅までの道順を図示してください。

※記入不要

南日本カルチャーセンター使用欄	アセスメント結果	受付
	点	
	判 定 結 果	

留学生出身校一覧

* 丸の中の数字は参加人数です

- 鹿 児 島 県 … 私立鹿児島純心女子高校③⑨、県立鹿児島東高校③④、私立鹿児島高校②①、私立鹿児島修学館高校①⑥、市立鹿児島玉龍高校①⑤、県立錦江湾高校①④、県立鹿児島中央高校③③、私立鹿児島実業高校③③、県立甲南高校⑩⑩、県立鶴丸高校⑩⑩、私立池田高校⑩⑩、私立志学館高等部⑩⑩、県立甲陵高校⑨⑨、市立鹿屋女子高校⑨⑨、県立加治木高校⑨⑨、県立志布志高校⑨⑨、県立川内高校⑨⑨、県立大島北高校⑦⑦、県立国分高校⑦⑦、県立松陽高校⑦⑦、県立武岡台高校⑦⑦、県立鹿屋高校⑦⑦、県立与論高校⑦⑦、県立出水高校⑥⑥、県立伊集院高校⑥⑥、私立鹿児島第一高校⑥⑥、私立鳳凰高校⑤⑤、市立国分中央高校⑤⑤、私立鹿児島城西高校⑤⑤、県立大島高校⑤⑤、県立指宿高校④④、県立鹿児島西高校③③、市立鹿児島女子高校③③、私立れいめい高校③③、県立浦生高校②②、県立枕崎高校②②、県立野田女子高校②②、県立種子島高校②②、県立加世田高校②②、私立川内純心女子高校②②、私立樟南高校②②、私立鹿児島育英館高校②②、私立尚志館高校②②、県立鹿児島工業高校②②、国立鹿児島工業高等専門学校①①、県立樋脇高校①①、県立串木野高校①①、県立笠沙高校①①、県立鹿児島水産高校①①、県立大口高校①①、県立市来農芸高校①①、県立宮之城高校①①、県立牧園高校①①、県立末吉高校①①、県立福山高校①①、県立奄美高校①①、県立徳之島高校①①、県立屋久島高校①①、県立隼人工業①①、県立楠隼高校①①、市立鹿児島商業高校①①、私立大口明光学園高校①①、私立出水中央高校①①
- 宮 崎 県 … 私立宮崎日本大学高校④④、県立宮崎大宮高校③③、県立宮崎西高校①⑦、私立宮崎女子高校①⑤、県立宮崎北高校①③、県立日向高校①②、県立小林高校①②、県立高鍋高校⑨⑨、県立宮崎商業高校⑧⑧、私立日向学院高校⑧⑧、県立宮崎南高校⑧⑧、県立富島高校⑥⑥、県立都城商業高校⑥⑥、県立佐土原高校⑤⑤、県立日南高校⑤⑤、県立都城西高校⑤⑤、私立都城聖ドミニコ学園高校⑤⑤、私立宮崎第一高校⑤⑤、国立都城工業高等専門学校④④、私立鵬翔高校④④、県立福島高校③③、県立高千穂高校③③、県立延岡西高校②②、県立都農高校②②、県立妻高校②②、県立宮崎工業高校②②、私立日南学園宮崎嶺学館②②、県立都城泉ヶ丘高校②②、県立五ヶ瀬中等教育学校②②、県立本庄高校①①、県立延岡東高校①①、県立延岡高校①①、県立宮崎東高校①①、県立都城工業高校①①、私立聖心ウルスラ学園高校①①、私立日南学園高校①①、私立日章学園高校①①
- 熊 本 県 … 私立ルーテル学院高校⑨⑨、県立熊本第一高校⑥⑥、県立済々黌高校⑥⑥、県立大津高校⑤⑤、県立人吉高校④④、県立熊本高校④④、県立八代高校③③、県立玉名高校③③、県立鹿本高校③③、県立多良木高校③③、私立熊本学園大学付属高校③③、県立熊本北高校②②、県立芦北高校②②、県立翔陽高校②②、県立熊本商業高校②②、県立東稜高校②②、私立文徳高校②②、東海大学第二高校②②、県立熊本第二高校①①、県立熊本工業高校①①、県立天草高校①①、県立氷川高校①①、県立水俣高校①①、私立熊本国府高校①①、私立尚綱高校①①
- 大 分 県 … 県立大分東明高校⑨⑨、県立日田高校⑨⑨、県立森高校⑥⑥、私立大分高校⑤⑤、県立大分南高校⑤⑤、県立大分上野丘高校⑤⑤、県立三重高校④④、県立中津南高校④④、県立臼杵高校④④、県立大分豊府高校④④、県立鶴崎高校③③、県立大分工業高校③③、県立別府羽室台高校③③、県立大分東高校③③、県立佐伯鶴城高校③③、県立別府鶴見丘高校③③、県立日田林高校②②、県立大分女子高校②②、私立明星高校②②、私立別府大学附属高校②②、県立日田三隈高校②②、県立津久見高校①①、県立国東高校①①、県立四日市高校①①、県立鶴崎工業高校①①、県立舞鶴高校①①、県立大分商業高校①①、県立芸術文化短期大学附属緑丘高校①①、県立大分雄城台高校①①、私立別府女子短期大学附属高校①①、県立竹田高校①①、県立大分西高校①①、県立高田高校①①、私立岩田高校①①、日本文理大学附属高校①①、私立別府翔青高校①①
- 沖 縄 県 … 県立首里高校⑦⑦、県立コザ高校④④、県立浦添高校③③、県立知念高校③③、県立小禄高校③③、県立那覇西高校③③、県立開邦高校③③、県立向陽高校③③、県立南風原高校②②、私立沖縄尚学高校②②、私立沖縄女子短期大学附属高校②②、県立豊見城南高校①①、県立豊見城高校①①、県立北中城高校①①、県立浦添工業高校①①、県立陽明高校①①、県立那覇国際高校①①、県立那覇高校①①、県立名護高校①①、県立具志川高校①①、県立読谷高校①①、県立首里東高校①①、県立糸満高校①①
- 佐 賀 県 … 県立佐賀商業高校⑩⑩、県立佐賀西高校⑧⑧、県立高志館高校⑥⑥、県立武雄青陵高校⑤⑤、私立佐賀清和高校⑤⑤、県立佐賀東高校④④、私立龍谷高校④④、県立武雄高校③③、県立致遠館高校③③、県立唐津東高校②②、県立三養基高校①①、県立神崎高校①①、県立伊万里高校①①、県立小城高校①①、私立敬徳高校①①、私立成瀬高等部①①、私立佐賀女子短期大学付属佐賀女子高校①①、県立神埼清明高校①①
- 長 崎 県 … 県立北陽台高校②②、私立長崎日本大学高校②②、私立純心女子高校②②、県立長崎東高校①①、県立長崎南高校①①、私立活水高校①①、私立青雲高校①①、県立佐世保商業高校①①、県立大村工業高校①①、私立海星高校①①、私立聖和女子学院高校①①、県立長崎北高校①①
- 福 岡 県 … 福岡大学附属若葉高校④④、国立久留米工業高等専門学校③③、私立福岡雙葉高校②②、私立筑紫女学園高校②②、県立戸畑高校①①、県立明善高校①①、市立南筑高校①①、私立西南女学院高校①①、私立福岡大学付属大濠高校①①、私立福岡工業大学付属城東高校①①、県立大牟田北高校①①、県立三池高校①①、私立明光学園高校①①
- そ の 他 … 山口県立岩国総合高校②②、私立仙台育英高校②②、東京都立北高校①①、東京都立武蔵丘高校①①、東京都立戸山高校①①、私立国際基督教大学高校①①、和歌山県立向陽高校①①、高知県立高知西高校①①、兵庫県立須磨友ヶ丘高校①①、私立麗澤瑞浪高校①①、大阪府立住吉高校①①、私立山陽女子高校①①、奈良県立奈良北高校①①、私立清林館高校①①、茨城県立土浦第一高校①①、国開高校(中国)①①、私立山手学院高校①①、私立宇部鴻城高校①①、私立昭和女子大学附属昭和高校①①、私立海陽中等教育学校①①

帰国後の進路 (順不同)

東京大学、一橋大学、京都大学、大阪大学、東京外国語大学、筑波大学、お茶の水女子大学、北海道大学、埼玉大学、千葉大学、横浜国立大学、神戸大学、大阪外国語大学、九州大学、広島大学、岡山大学、山口大学、高知大学、長崎大学、九州工業大学、佐賀大学、佐賀医科大学、大分大学、大分医科大学、熊本大学、宮崎大学、宮崎医科大学、鹿児島大学、琉球大学、防衛大学、国際教養大学、東京都立大学、横浜国立大学、都留文科大学、神戸市立外国語大学、兵庫県立大学、山口県立大学、北九州市立大学、長崎県立大学、宮崎公立大学、酪農学園大学、国際基督教大学、上智大学、早稲田大学、慶應義塾大学、明治大学、法政大学、立教大学、中央大学、青山学院大学、東京女子医科大学、国際医療福祉大学、東京理科大学、日本大学、東海大学、専修大学、創価大学、日本獣医大学、神奈川大学、神田外国語大学、学習院女子大学、獨協大学、東京農業大学、日本獣医生命科学大学、津田塾大学、南山大学、同志社大学、立命館大学、同志社女子大学、京都外国語大学、京都女子大学、京都光華女子大学、関西学院大学、関西外国語大学、名古屋学芸大学、名古屋外国語大学、名古屋学院大学、甲南大学、大阪経済大学、武蔵野大学、名古屋商科大学、日本福祉大学、朝日大学、松山大学、西南学院大学、福岡大学、立命館アジア太平洋大学、別府大学、福岡筑紫女子大学、筑紫女学園大学、久留米大学、ルーテル大学、宮崎国際大学、鹿児島女子大学、鹿児島国際大学、鹿児島純心女子大学、沖縄大学、長野県立短期大学、大分県立芸術文化短期大学、鹿児島県立短期大学、青山女子短期大学、中日本自動車短期大学、神戸松陰女子短期大学、九州女学院短期大学、長崎大学医療技術短期大学、長崎短期大学、中九州短期大学、福岡女子短期大学、長崎ウェスレヤン短期大学、鹿児島純心女子短期大学、鹿児島第一幼児短期大学、沖縄キリスト教短期大学、ジョージア工科大学、カリフォルニア大学バークレー校、カリフォルニア大学ロサンゼルス校、カリフォルニア大学デービス校、カリフォルニア大学アーバイン校、カリフォルニア大学サンタバーバラ校、カリフォルニア州立大学フラトン校、カリフォルニア州立大学スタンシラス校、デニソン大学、アラバマ州立大学、イースタンワシントン大学、ロンドン大学、オレゴン大学、ポートランド大学、ハワイ州立大学、ベニンセラカレッジ、シャーピーカレッジ、モデストジュニアカレッジ、マーセッドジュニアカレッジ、サンウォーキンデルタカレッジ、ディアンザコミュニティカレッジ、サウザンオレゴンステイトカレッジ、フレズノシティカレッジ、ランチョサンディアゴカレッジ、ヤキマバレーコミュニティカレッジ、モントレールペンシユラカレッジ、ワーナーパシフィックカレッジ、スポケンコミュニティカレッジ、クラークコミュニティカレッジ、ロングビーチシティカレッジ、シエラカレッジ、グロスモントカレッジ、サンタローザジュニアカレッジ、グランデルコミュニティカレッジ、その他多数



— お問い合わせ・出願先 —

株式
会社

南日本カルチャーセンター

〒890-0056 鹿児島市下荒田3丁目16番19号

T E L 代表 (099) 257-4333

F A X (099) 250-0321

ホームページ www.mncc.jp

Minami Nihon Culture Center